

撰関期の「着座」「着陣」関係記事

『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて(二)

三橋 正*

小右記講読会

池田卓也 川合奈美 関口崇史 田井秀
中丸貴史 村上史郎 山岸健二

はじめに

古記録(日記)を正確に読解するためには、通時的に読むだけではなく、多年の関連記事を集め、儀式書(故実書)と合わせて部類的に読む方法が欠かせない。同じ儀式・事例についての次第や用語がわかるだけでなく、規範的な部分と例外的な部分とが整理でき、各条に対する理解も深まるからである。しかも、この部類的な読み方は平安時代に確立した「古記録文化」の理念とも一致する。貴族たちは朝儀などの先例を重視する立場から、日記を付ける際にも具注暦に記す日次記(本記)の他に、重要な儀式などに関する別記を作成していたし、その膨大な記事を活用するために目録や部類記を編纂していたことが明らかにしている。

古記録のテキストを公開する際にも、部類的な読み方を再現できるようなデータベースを提供することが理想である。小右記講読会および文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)『小右記』註釈と平安時代データベースの作成(平成二十一〜二十三年度)による作業では、『小右記』と『左経記』を中心とした古記録データベースの構築に努め、『小右記講読会』のホームページ(<http://saneyoric.meisai-u.ac.jp>)にて公開しているが、ウェブの設計が完成していないために理想的な姿を十分に提示できていない。そこで古記録の本文と書下し文のテキストから、目録などの関係資料とを総合的に検索した結果を示す例として、昨年度の「立后」に続き、「着座」「着陣」に関する記事を集成して掲載する。

「着座」とは、一般に座に着くことであるが、貴族社会では公卿が新任・昇進・復任して初めて太政官曹司庁(太政官庁・弁官庁・弁官曹司)や外記庁(太政官候庁・外記候庁)にある官職ごとに割り振られた自分の座(本座)に着くという、特別な儀式を指すことがある(黒板伸夫監修・三橋正編『小右記註釈 長元四年 上巻』解説二九「着座」〈池田卓也執筆〉参照)。「着陣」も同様で、ここでは任官後最初に宜陽殿西北廂と陣座(左近衛府陣座)の本座に着くことを意味する。そのような緊張感をもって行なわれる大切な儀式であったので、記主自身の場合などは詳細に記録されており、貴族の習慣や意識を探るにも有効である。すでに長元四年(一〇三一)の註釈で『左経記』の源経頼(記主)の関連記事を書下し文にしてあるが、ここでは『小右記』『左経記』の全時代に確認できる事例を公卿を中心に収録した。ただし、『小右記』逸文から記事の存在が確認できる貞元元年(九七六)から長久元年(一〇四〇)年までの六五年間の資料を対象としたが、事例が確認できたのは長元八年(一〇三四)までである。

『小右記』を部類した『小記目録』（第一五）には「公卿着座事（付着座）」の項目があり、五三例の首書が挙げられている。貴族社会で「着座」「着陣」の事例を『小右記』に求めようとした時、先ずこれらの事例が参照されたであろう。また、『小記目録』には同巻の「慶賀事（付初参）」にも二例（56 104）あるので、合わせて五五例となる。しかし、古記録（日記）だけでなく、『公卿補任』などの補任資料や『日本紀略』『本朝世紀』などの編年資料からわかる事例は、（本稿で載録した確実なものだけで）一三四例ある。もちろん『小右記』の記事がもとから無かったものもあるだろうが、『小記目録』に載録された五五という数字は多いとは言えない。このうち『小右記』本文があるのは二四例（8 11 12 22 23 32 56 69 71 72 74 96 97 98 99 101 104 105 106 107 112 117）であるのに対し、『小右記』本文があるのに『小記目録』に載録されていないものが二三例（9 21 26 29 31 68 73 76 77 79 82 95 100 103 108 109 110 111 113 114 115 116 128）ある。つまり、『小記目録』に載録された事例は、同時代のほんの一部に過ぎないし、『小右記』の関連記事についてもすべてが網羅されていないことがわかる。ここから『小記目録』における臨時記事の抽出方法を窺い知ることができ、記主藤原実資と目録作成者との意識（または時間）の差違を考察する手がかりになるかも知れない。

尚、『小右記』本文はないが『小記目録』にあり、かつ他の古記録にあるのは、40（『権記』・42（『権記』・48（『権記』・66（『御堂関白記』『権記』・89（『左経記』・120（『日本紀略』）の八例である。また、『小記目録』と『公卿補任』だけで知られるのは二例（7 14）である。

この類聚を分析しながら読解することによって、平安時代の貴族が昇進時に行なう厳肅な儀式の実態がわかるだけでなく、全体のどの部分が記録・残存するのか、資料の性格を理解しながら当該期の社会理念に近づ

くことが出来るであろう。また、『小記目録』など古記録（日記）を類聚する際に、年中行事などの恒例の儀や天皇即位（一代一度）・立后などの特別な大行事とは違って、「着座」「着陣」のような不定期に起こる臨時の事柄については、記事の採取や載録基準の設定が難しかったと想像される。そのような類聚の方法や有効性を探る上でも、このような作業の集積が出来るデータベースの完成が求められるのである。

本稿の書下し文や「首書」記号は、前稿（「摂関期の立后関係記事」と同様で、以下の通りとした。平安時代の研究や古記録の学習にも役立てていただければ幸甚である。

『小右記』（藤原実資の日記）

*…長元四年条の底本（伏見宮本）と同じB系本の写本にあるもの。

+…尊経閣文庫（前田家）本などA系本の写本にあるもの。

▼…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◆…底本になく『小記目録』に記事があるもの。番号は編目順。

★…逸文。

『御堂関白記』（藤原道長の日記）

※…底本にあるもの。

▲…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

・追加記号のアルファベットは小文字

『権記』（藤原行成の日記）

△…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは大文字

『左経記』（源経頼の日記）

※…底本にあるもの。

▽…底本に首書が無く、新たに見出しを作成したもの。

◇…底本に本文がなく、巻頭の目録だけに項目があるもの。

☆…逸文。

・追加記号のアルファベットは小文字

【事例】

①『公卿補任』貞元元年（九七六）条

・参議藤原顕光「二月一（＝九日）、丙午。丑刻、着座す。」

・藤原顕光、天延三年（九七五）十一月廿七日、任参議。

②①『公卿補任』貞元元年条

・参議藤原為輔「二月十九日、丙辰。着座す。」

・藤原為輔、天延三年十一月廿七日、任参議。

③①『公卿補任』天元二年（九七九）条

・右大臣藤原兼家「四月十九日、丁卯。未刻、着座す。」

・藤原兼家、天元元年（九七八）十月二日、任右大臣。

②『公卿補任』天元二年条

・権大納言藤原朝光「四月十九、丁卯。巳刻、着座す。」

・藤原朝光、貞元二年（九七七）四月廿四日、任権大納言。

③『公卿補任』天元二年条

・権中納言源保光「四月十九、丁卯。巳刻、着座す。」

・源保光、天元元年十月二日、任権中納言。

④①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

・永観二年二月廿五日（＝丙午）、右大将済時（＝藤原）の着座の事。

・藤原済時、永観元年（九八三）八月廿三日、任権大納言。

⑤①『公卿補任』永延元年（九八七）条

・参議源時中「八月廿日、庚戌。巳刻、着座す。」

・源時中、寛和二年（九八六）十月十五日、任参議。

⑥①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

・永延元年十一月十五日（＝甲戌）、着座の日、衰日（すいじち）を避けざる事。

⑦①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

・同（＝永延）二年二月十九日、公卿の着座の事。

②『公卿補任』永延二年（九八八）条

・権中納言藤原道長「二月十九日、丙午。酉刻、着座す。」

・藤原道長、永延二年正月廿九日、任権中納言。

③『公卿補任』永延二年条

・参議藤原佐理「二月十九日、丙午。丑時、着座す。」

・藤原佐理、天元元年十月十七日、任参議（永観二年（九八四）八月九日、叙従三位）。

⑧①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

・同（＝永延）三年（＝永祚元年）三月十三日、新任の公卿等の着陣の事。

②『小右記』永祚元年（九八九）三月十三日条（▼a）

▼a「新任の公卿等の着陣の事」（目）

▼b「石清水臨時祭の事」（目四・三月・臨時祭・石清水）

▼c「北野三位遠度（＝藤原）の出家の事」（目一六・出家事）

・十三日、甲午。

・初めて宜陽殿・左仗（＝陣座）の座に着するの日也。辰時に参入す。化徳門より入（々）る。巳時、吉時。暫く陣（＝陣座）の辺を徘徊（徘徊す。此の間、権大納言道兼（＝藤原）参入す。巳一点、先づ宜陽

殿に着し、次いで陣座に着す。了りて、余（＝藤原実資、宜陽殿に着し、次いで陣座に着す。〔此の間、大納言（＝道兼、陣座に在り。申文の事有るべきに依る。〕頃之、起座し、射場に向かふ。藏人等直（＝藤原）を以て、昇殿の慶を奏せしむ。拜舞了り、雲上に候ず。内大臣（道隆（＝藤原））、已二点、初めて陣に参る。申文有りと云々。射場に参り、昇殿の慶を奏せしむ。新中納言伊陟（＝源）、已三点に着陣す。申文無しと云々。

▼b 是の日、石清水臨時祭。其の儀、恒の如し。摂政（＝藤原兼家）参入せられず。去る十一日、彼の殿、馬の斃（又故起）るること有り。其の穢に依りて参られずと云々。〔御馬を馳せられ、門の扉に当たりにて斃ると云々。〕御禊の間、内大臣、御後に候ず。祭使は藏人頭公任朝臣（＝藤原）。余催さる。上達部、重盃を執りて参入す。公卿、内大臣・大納言〔重信（＝源）・朝光（＝藤原）・道兼（＝源）・中納言〔顕光（＝藤原）・重光（＝源）・保光（＝源）・伊陟・道長（＝藤原）・参議〔安親（＝藤原）・余〕。未終、事了り、公卿、各退出す。〕今夜、北野三位遠度（＝藤原）出家すと云々。

- ・藤原道兼、永祚元年二月廿三日、任権大納言。藤原実資、同日、任参議。藤原道隆、同日、任内大臣。源伊陟、同日、任権中納言。
- ・源伊陟の権中納言初任着陣・着座…[8]・[10]
- ・藤原実資の参議初任着陣・着座…[8]・[11]・[12]・[14]・[15]・[16]

⑨①『小右記』永祚元年八月廿一日条（▼b）

- ▼a 「門を造る事」（目一五・造宮事）
- ▼b 「左大弁（＝藤原懷忠）の着座」

廿一日、己巳。

▼a 参内す。藤中納言（＝藤原顕光）・源中納言（＝源保光）・春宮大夫（＝藤原公季）・源中納言（＝源伊陟）・修理権大夫（＝藤原安親）・春宮権大夫（＝藤原誠信）等参入す。源大納言（＝源重信）・修理大夫（＝藤原懷平）、右近陣に在り、承明門等の造作を催行なふと云々。

▼b 左兵衛督（＝源時中）・左大弁（＝藤原懷忠）早出す。左大丞（＝懷忠）、今日、初めて結政（＝結政所）及び宜陽殿・陣（＝陣座）等の座に着すと云々。申時許、余（＝藤原実資）罷出づ。摂政（＝藤原兼家）、南院（＝東三条第）に、聊か食事有り。晩景に出づ。

- ・藤原懷忠、永祚元年七月十三日、任参議。

⑩①『公卿補任』正暦元年（九九〇）条

権中納言源伊陟「二月十日、丙辰。着座す。」

⑪①『小記目錄』（第一五・公卿着座事〔付着陣〕）

永祚二年（＝正暦元年）九月二日、着陣の事。

②『小右記』正暦元年九月二日条（+1）

- ▼a 「慶を申す事」
- ▼b 「除目の下名」

+1 「着陣の事」（目）

二日、甲戌。

所々に慶を申す。

▼a 参内す。仗座（＝陣座）に着す。右兵衛督（＝源伊陟）・左兵衛督（＝源時中）、陣（＝陣座）に在り。「今日、除目の下名に候ずべし。」者り。

今日、左將軍（＝藤原濟時）云はく「三位宰相、初めて陣に参るの時、先づ南座に着し、次いで例の座に着す。若し上臈無からば、南

座に着するが宜しき歟。」者り。然而、上臈、已に陣座に在り。又、思慮を廻らし、例の座に着す。更に何事か有らむ。一階を叙するの後の初参の事、参議の初参に似るべからず。只、宜しき日を撰びて参入する所也。更に納言の座に着するは然るべからざる歟。

・藤原実資、正暦元年八月卅日、叙従三位。

12 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同(「永祚二」年(「正暦元年」十一月八日、着座を催さるる事。

②『小右記』正暦元年十一月八日条(+1)

+1「着座を催さるる事」(目)

+2「改元有る事」

▼a「後院の中対の事」

八日、己卯。

外記国定(「多米」来たりて云はく「大外記致時(「中原」、左府(「源雅信」)の仰を伝へて云はく『参議(「藤原実資」)着座せざるに、公事稽留す。着座すべきの由を伝示せ。』者り。去今の兩年、其の日無きの由を申さしめりぬ。

+2 又、云はく「昨日、改元有り。〈正暦〉」大辟以下の赦を詔す。」

者り。

▼後院の中対の直の四百石の下文、頭中将(「藤原公任」)の許に遣はし奉る。明日、実録せしむべし。兼ねて又、壞運はしむべし。又、東の地の雑舎等実録せしめりぬ。

13 ①『公卿補任』正暦二年(九九一)条

参議藤原伊周「三月廿八日、丁卯。巳時、着座す。」

・藤原伊周、正暦二年正月七日(廿六日)、任参議。

14 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

正暦二年九月廿八日、公卿の着座の事。

②『公卿補任』正暦二年条

権中納言藤原道頼「同(「九月」廿八日、甲子。戌時、着座す。」

・藤原道頼、正暦二年九月七日、任権中納言。

③『公卿補任』正暦二年条

参議藤原実資「廿八日(「九月」、甲子。着座す。」

15 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(「正暦二年」)十月一日(「丙寅」、着座の後、第四日、必ず政(「外記政」)に着すべき哉否やの事。

16 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(「正暦二年」)同月(「十月」)五日(「庚午」、着座の後、吉日を撰び、政(「外記政」)に着する事。

17 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(「正暦二年」)同月(「十月」)八日(「癸酉」、公卿の着陣の事。

18 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(「正暦二年」)十一月廿三日(「戊午」、陣(「陣座」)に於いて、上官、例に違ふ事。

19 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝正暦二年）十二月八日、公卿、深履を着して着陣する事。

20 ①『公卿補任』正暦三年（九九二）条

中納言藤原公季「十月四日、甲子。着座す。」

・藤原公季、正暦二年九月七日、任中納言（転正）。

21 ①『小右記』正暦四年（九九四）二月廿五日条（▼a）

+1「春日祭の事」（目三・二月・諸社祭事・春日祭）

▼a「権大納言（＝藤原伊周）に着座の事を注送る事」

廿五日、癸未。

権大納言伊周（＝藤原）登山す。祖父陀観（＝高階成忠）の受戒の事に依ると云々。明日、春日祭。而るに今日、登山するは、奇しむべし奇しむべし（×寄々々）。右衛門督道頼（＝藤原）、春日祭に参ると云々。近衛府使は左中将正光（＝藤原）。

▼a「権大納言「伊周」の使正言（＝大江カ）示されて云はく「廿八日に着座すべし。其の間の事等、云々同じからず。各の所、故殿御日記（＝清慎公記）注送るべし。」者り。然而奉らざる也。

22 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝正暦）四年二月廿八日、惟仲卿（＝平）の着座の事。

②『小右記』正暦四年二月廿八日条（+1）

▼a「宰相中将（＝藤原道綱）の母氏（＝藤原倫寧女）の病悩の事」

▼b「證空阿闍梨の假の事」

+1「惟仲卿（＝平）の着座の事」（目）

廿八日、丙戌。

▼a「宰相中将（＝藤原道綱）の母氏（＝藤原倫寧女）の病悩、正頼を以て、中将（＝道綱）を訪ふ。」

▼b「證空（×澄空）阿闍梨、修理大夫（＝藤原懷平）の御消息に依り、其の假を免ず。去夜より、重病有る者と云々。」

+1「今日午時、大納言伊周（＝藤原）・参議（＝）惟仲（＝平）着座すと云々。」

・藤原伊周、正暦三年八月廿八日、任権大納言。平惟仲、同日、任参議。

・藤原伊周の権大納言初任着座：21・22

23 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝正暦四年）四月九日、参議公任（＝藤原）の着座の事。

②『小右記』正暦四年四月九日条（+1）

+1「参議公任（＝藤原）の着座の事」（目）

九日、丁卯。

藤宰相（＝藤原公任）、巳時、着座す。午上、小雨。午後、大雨。弘遠朝臣（＝源）云はく「着座の間、雨ふらず。」者り。

・藤原公任、正暦三年八月廿八日、任参議。

24 ①『日本紀略』正暦五年（九九四）二月廿三日条

廿三日、乙巳。

権大納言道長卿（＝藤原）着座す。

②『本朝世紀』正暦五年二月廿三日条（・23）

・1「仁王会の闕請」

・ 2 「着座」

・3 「いし倚子をてつ撤せざる堂のしょうごん莊嚴」

廿三日、乙巳。

天晴。諸卿遅参す。政まつりごと（＝外記政）無し。午後、中納言藤原顕光卿・参議右大弁平惟仲卿、左仗座さだりやうざ（＝陣座）に着す。明日の仁王会の闕請僧の事を定めらる。

又、権大納言道長（＝藤原）
□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

3	
くだん	
い	
し	
なが	
なが	

此の度、倚子を撤せざる堂の莊嚴。

③『公卿補任』正暦五年条

権大納言藤原道長「二月廿三日、乙巳。着座す。」

・藤原道長、正暦二年九月七日、任權大納言（正暦三年四月廿七日、叙從二位）。

・藤原道長の権大納言初任着座：24・25

・『水左記』 承暦四年（一〇八〇）八月廿六日条に「（前略）御堂、正暦二年九月七日、任権大納言、同月十六日壬子、着左仗座、（從同月四日土用也、仍十六日壬子氣日也、）（後略）」と見える。

〔25〕①『日本紀略』正暦五年二月廿四日条

廿四日、丙午。

仁王會。にんのうえ 大納言(藤原道長)の着座に依り、倚子いしの装束しょうそくを撤せざる也。

26 ①『小右記』長徳元年（九九五）六月十九日条（▼a）

* 1 「任大臣の事」

▼ a 「中納言懷忠（＝藤原）の着陣」

▼b「新任の大臣（＝藤原道長）の奏慶そうけい」

＊2 「新任の大臣の廂の饗の事」

十九日、甲午。

今日、大臣召。午刻許、参内す。先是、権大納言顕光卿（＝藤原、陣（＝陣座）に在り。宣命の事を承はる。〔大納言道長（＝藤原）を以て、右大臣と為し、中納言公季（＝藤原）を以て、大納言（×権大納言）と為す。但し、権大納言顕光・権中納言時中（＝源・懷忠（＝藤原）等、正（＝正官）に転ず。〕草を奏す。又、清書を奏す。南殿（＝紫宸殿）の御装束、恒の如し。諸卿、外弁に出づ。〔大納言（×権大納言）公季（＝藤原）、中納言時中・懷忠、参議余（＝藤原実實）・惟仲（＝平・公任（＝藤原）。今日、輕服の人、皆、吉（＝吉服）を着す。近代の例に依る。顕光・惟仲は、無文帶を着す。自余は隱文（×穩文）の所司開門す。〔承明・建礼。腋門は開かず。例也。〕大納言公季云はく「建礼門は開かず。」者り。太在意を得ず。闔司居す。次いで召すこと、節会の如し。諸卿参入す。各、標に就く。諸大夫見えず。内弁（＝顕光、左大弁惟仲（＝平）を召す。称唯す。作法を知らず。立ち乍ら、案内を問ふ。余、指示する也。列を離れて参上し、宣命を給はる。右廻して還降り、〔左廻すべき歟。〕軒廊の西二間に立つ。内弁、列に加はる。宣命使（＝惟仲）、版に就く。宣制一段。余・藤相公（＝公任）再拜す。自余、或は新任、或は転任なり。仍りて拜せず。又、宣制す。再拜、初の如し。宣命使、本列に復し了りぬ。余退出す。次いで惟仲・公任出づ。自余は留立ち、拜舞して出で、陣に帰参る。

▼^a 懷忠着陣す。諸卿云はく「正に転ずるの人、又、吉日を扶び、宜陽殿・陣（＝陣座）等に着する也。」已に思忘るるに似る。自余は着せず。

▼^b 新任の大臣（＝道長）、階下を度りて奏慶す。又、東宮（＝居貞親王）に参る。

其の後、陣腋に帰る。「或云はく「東宮使、退出せらるべき歟。」諸卿相率る、敷政門を出で、左衛門陣（＝建春門）の外に出づ。上官前行す。下藤の参議を以て、前と為す。近衛、門の儀、例の如（×在）し。

*² 右大臣（＝道長）の里第（＝土御門第）に向かふ。廂の饗、例の如し。公卿以下の祿、例の如し。弁・少納言・外記・史の録事（×祿事）。史生の録事（×祿事）無し。是、例也。庭前に於いて、史生に祿を給ふこと、又、例也。秉燭、事了りぬ。

今日、中納言・参議を任ぜられず。或云はく「叡慮不快なり。仍りて任ぜられざる所也。」

・藤原懷忠、長徳元年六月十九日、任中納言（転正）。

27①『御堂御記抄』長徳元年六月廿三日条（▲A）

▲A「着陣」

廿三日、戊戌。

▲^A 初めて着陣す。昇進の後、初めて宿す。

・藤原道長、長徳元年六月十九日、任右大臣（五月十一日、蒙内覧宣旨）。

・藤原道長の右大臣初参着陣・着座：27・28

・『台記』久安三年（一一四七）三月廿二日条に「（前略）長徳元年六

月廿三日、大臣後初着陣、件日、直着三南座、是則被行二上之事也、（後略）」と見える。

28①『御堂御記抄』長徳元年七月廿二日条（▲A）

▲A「椅子を立てしむる事」

▲B「維摩会の講師の事」

廿二日、丙寅。

▲^A 今日、新しく椅子を立てしむ。

▲^B 又、参内す。又、寺（＝興福寺）の解文に依り、観照法師を以て、維摩会の講師に請用ふべきの由、仰下されりぬ。

29①『小右記』長徳二年（九九六）三月四日条（*23）

*1「中宮（＝藤原定子）、里亭（＝二条北宮）に出御する事」

*2「大納言顕光（＝藤原）の着座の事」

*3「春の辰の着座、大凶の事」

四日、甲辰。

*¹ 参内す。今夜、中宮（＝藤原定子）、二条北宮（＝左京三条三坊八町）に出御す。外記申して云はく「左馬寮、怠状を進るに依り、供奉すること能はず。」者り。仍りて事由を奏するの処、仰せて云はく「今日、免じ給ひ了りぬ。早く供奉せしむべし。」者り。即ち外記に仰せ、中宮に参る。「職御曹司に御坐す。」時々（×之、雨降る。入夜、弥倍す。左大弁惟仲（＝平）・右兵衛督俊賢（＝源）扈従す。自余の公卿、皆、悉く障を申す。御輿を用ひず、檳榔毛の御車に御す。戊剋、陽明門より出御す。里第、饗無し。公卿以下立ち、各分散す。

*2 大納言顕光卿（＝藤原）、子二剋に着座す。件の時、衰時と云々。
*3 一説に、又、云はく「春の辰の着座、罪を得て、大凶なり。」者り。

②『公卿補任』長徳二年条

右大臣藤原顕光「三月四日、甲辰。着座す。」

・藤原顕光、長徳元年四月六日、任権大納言、六月十九日、任大納言（転正）。

③①『公卿補任』長徳二年条

大納言藤原公季「五月十七日、丙（丙辰カ）。着座す。」

（注1）三条西家本は「五月八日」とする。八日は丁未。

・藤原公季、長徳元年六月十九日、任大納言。

③①『小右記』長徳二年七月廿日条（*3）

▼a「陣物忌」

▼b「諷誦」

*1「任大臣の事」

*2「正（＝正官）に転ずる納言、拝せざる事」

*3「正に転ずる納言、着陣せざる（×更）事」

▼c「慶賀」

▼d「大臣（＝藤原顕光）の退出の事」

▼e「大臣大饗」

廿日、戊午。

▼今明、陣物忌。

▼諷誦を三ヶ寺に修す。

*1 参内す。是の日、大臣を任ず。物忌に依り、陣座に着せず。陣の後及び南殿（＝紫宸殿）の辺を徘徊（徘徊）す。中納言時中（＝源）、宣命の草を奏（×答）す。左大臣正二位道長（＝藤原）、（今日、正二位に叙す。右大臣の下臈為るべきに依る也。）右大臣從二位顕光（＝藤原）、大納言時中、中納言（々納言）余（＝藤原実實）、（正（＝正官）に転ず。）権中納言惟仲（＝平）、参議忠輔（＝藤原）。其の後、清書を奏す。左衛門督懷忠（＝藤原）・余・参議輔正（＝菅原）・惟仲・公任（＝藤原）・誠信（＝藤原）・扶義（＝源）・斉信（＝藤原）・俊賢（＝源）、敷政門より出で、外弁の座に着す。（時は申（×申）。良久之開門す。大舍人を召す。少納言参入すること、節会の如し。懷忠以下相率ゐて参入し、各の標に就く。内弁時中卿、公任を召す。（其の声、太だ高し。先例に似ず。）称唯し、列を離れて参上す。軒廊の東二間より入る。宣命を受けて退く。帰りに軒廊の西二間に立留まる。時中卿退下し、軒廊の東二間より出で、列に加はる。
*2 ついで宣命使（＝公任）、宣命の版に就き、宣制一段。大納言時中・中納言（々納言）余・権中納言惟仲拝せず。任人に依る也。自余は再拝す。又、宣制一段、初の如し。（諸大夫見えず。）宣命使、列に復す。（列の西より、列に復し了りぬ。）任人（□）の外、次第に退出す。時中卿、中納言の標を離れ、大納言（□）の標に加（×也）はる。惟仲、中納言の標に加はる。余跪き、笏を置き、剣を解く。大納言以下拜舞す。次第に退出す。（権（＝権官）、正に転ずるの時、剣を解く儀、『天徳の故殿御日記（＝清慎公記）』に見ゆ。師氏卿（＝藤原（＝天徳四年八月廿二日、中納言）、正に転ずるの時の例也。（時）代々の恒佐（＝藤原（＝延長五年正月十二日、中納言）・師尹（＝藤原（＝天曆五年正月卅日、中納言）等の例を勘へらるる也。而るに左少弁説孝朝臣（＝

藤原、頗る難の氣有りと云々。仍りて大饗所に於いて、此の由を相示す。殊に避くる所無し。既に積面（×敷面）有りと云々。」

皆、陣座に還る。余、正に転ずるに依りて着せず。

此の間、右大臣・参議忠輔、射場に進み、慶賀を奏す。又、右大臣・大納言時中・忠輔、相共に女御（＝藤原義子）（内に御す）・東宮（＝居貞親王）に啓す。

大臣、東宮より退出すべきの由、左中将正光（×元）（＝藤原）を以て、上達部に指示す。仍りて上達部、化徳門（×他徳門）より出で、温明殿（×門）の北の頭に徘徊（徘徊）す。此の間、大臣、左衛門陣（門×）（＝建春門）より退出す。上官及び上達部前行し、陽明門に到る。其の儀、恒の如し。「今日、内御物忌に依り、出御せざる也。左大臣、直廬に候ず。前例は、左に転ずるの時、物忌の由を称し、候ぜざる所也。若しくは公事を奉はるの人に依りて候ずる所歟。先日、此の議有る也。」

黄昏、大臣（＝道長カ）の第に到る。（二条と洞院東大路（×東院東大路）と也。播磨守（×幡戸守）相方朝臣（＝源）の宅なり。因縁に依りて行なふ所と云々。」公卿の座は、南廂に在り。雑事、又、例の如し。階の前に於いて、管絃有り。先是、録事（×使）を召仰す。「弁・少納言の座、史・外記の座。」史生の禄（×録）、庭中に於いて、之を給ふ。子剋許、事了りぬ。

今日の第一の納言時中の作法、言ふに足らず。此の度（×座）の公卿召、天下、甘心（心×）せずと云々。

・藤原実資、長徳元年八月廿八日、任権中納言。同二年七月廿日、任中納言（転正）、右衛門督。

・藤原実資の中納言初任着陣・着座：[31]・[32]・[35]・[37]・[38]・[39]・[40]

[32]①『小記目錄』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

長徳二年七月廿九日、転任の公卿の着陣の事。

②『小右記』長徳二年七月廿九日条（*1）

*1「正（＝正官）に転ずる後、初めて陣（＝陣座）に参る事」

*2「相撲の事」

▼a「相撲の抜出の事」（目六・七月・相撲事）

▼b「公卿、瓜を給はる事〈相撲節〉」（目六・七月・相撲事）

▼c「太皇太后宮（＝昌子内親王）の御仏供養の事」

廿九日、丁卯。

*1「辰終、参内す。正（＝正官）に転ずるの後、今日、初めて参る。

巳二点、宜陽殿に着す。（先是、装束司に仰せ、座を敷かしむ。）次いで陣座に着す。藏人行資（＝橘）、宣旨を下す。「右中将経房（＝源、当年の位禄請申し了りぬ。又、吉書（吉×）、兼ねて儲けしむる所也。」次いで殿上（＝殿上間）に参上す。本陣（＝右衛門陣・宜秋門）の座に着して請印せしむ。

*2「小選、内に帰入り、暫く殿上に候ず。公卿参らず。午終、仗座

（＝陣座）に復す。此の間、公卿参入す。未終、左右大臣（＝藤原道長・藤原顕光）参入す。左大臣（＝道長、御簾の中に候ず。内侍、人を召

す。右大臣（＝顕光、先づ参上す。「大将（＝右大臣）を兼ねる儀に依

る。」公卿、次第に参上す。次いで出居参上す。召に応じ、右大臣、簾の下に候ず。左右の相撲長、各、円座一枚を取り、壇の上に敷く。

（或説は、幕の下より指出だす。）次いで出居着座す。先例は、居し乍ら、幕より出でて着座す。而るに幔を褰げて立ち、之に着す。失

也。次いで左の相撲人列参す。先づ北に向かふ。大臣（＝顕光）云は

く「南むき。」次いで云はく「西むき。」先例の詞に似ず。(或は又、云はく「北向け。」次いで「西向け。」次いで「南向け。」今日の儀は失也。)次いで還入る。其の後、右の相撲人の列参すること、左の如し。但し、東を以て、西に替ふ。

▼御覧じ了るの後、大臣云はく「よし。」者り。満座属目す。或は咲ひ、或は奇しむ。「古例を尋ねるに、已に此の詞有り。咲ふべからず。近代は、「罷入れ」と召仰する也。」大臣、先づ右の相撲人の名を召す。「其の詞に云はく「某丸進め。」者り。」次いで左の相撲を召す。人々奇驚す。須く先づ左(左×)の相撲人を召すべし。失誤、之、甚だし。然而、右、先に存し、相撲を進む。理、然るべき也。一番は、左(×右)勝つ。へ左論。大臣、先づ左の相撲人を召す。次いで右を召す。驚奇する許なり。須く負方を召すべし。右例に存し、相撲人を進む。二番は、右勝つ。三番は、左勝つ。次いで白丁・陣直。追相撲の人なり。次いで散楽あり。相撲、此の間、公卿、簀子敷に下居す。菰を公卿に給ふ。先例は、水を加ふ。而るに見えず。左右次将、母屋(□屋)の御簾の中より、件の菰を給ふ。是、例也。今日、穀倉院の衝重を居えず。太だ奇し、太(こ)だ奇(こ)し。西剋、事了り、公卿退下す。

33 ①『公卿補任』長徳二年条

権中納言平惟仲「八月十二日、庚戌。着座す。」
・平惟仲、長徳二年七月廿日、任権中納言。

34 ①『公卿補任』長徳三年(九九七)条

参議源扶義「正月廿九日、甲午。着座す。」
・源扶義、正暦五年八月廿八日、任参議、九月八日、任右大弁(長徳二年八月廿八日、任左大弁)。

35 ①『権記』長徳三年十一月廿二日条(△C)

- △A「賀茂臨時祭試楽」
- △B「舞人を改むる事」
- △C「未だ着座せざる公卿、早く着すべきの由を仰する事」
- △D「策判の外任の儒者の事」

廿二日、癸未。

今日、賀茂臨時祭試楽也。早速、左府(藤原道長)に詣づ。頃之、参内す。西剋、出御す。仰に依り、諸卿を召す。「参らざる者は、右大臣(藤原顯光)、藤・平両中納言(藤原実資・平惟仲)也。」次いで又、余(藤原行成)を召す。重家(藤原)・道方(源)に、一舞を奉仕すべきの由を仰せらる。即ち滝口の廊を出で、之を仰す。先是、申剋、左近少将相経(藤原)、親母の病重く、万死一生にして、舞人を供すること能はざる由を奏せしむ。左兵衛佐能通(藤原)に仰改む。即ち出納允政(惟宗)をして、行事蔵人に伝告せしむ。(蔵人々々)左近将監泰通(藤原)。時に樂所に在る也。又、仰に依り、未だ着座せざる上卿(公卿)に、早く着すべきの由を仰(々)す。源大納言(源時中)・右大將(藤原道綱)・民部卿(藤原懷忠)・太皇太后宮大夫(実資)、各、年中、吉日無きを申す。仰せて云はく「日を勘へしめて行(×)給なふべし。」
△D 式部大輔(菅原輔正)奏せしめて云はく「来たる廿五日、策判の

事を行なふべし。儒（＝儒者）信順朝臣（＝高階）を召すべきに、已に外任（＝伊豆権守）也。先例、外任の者は、宣旨を待ちて召す所也。勅定に随ふべし。仰せて云はく「請に依れ。」

・源時中、長徳二年七月廿日、任大納言。藤原道綱、長徳三年七月五日、任大納言。藤原懷忠、長徳三年七月五日、任権大納言。藤原実資、長徳二年七月廿日、任中納言（転正）。

36 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝長徳）四年二月十八日（＝丁未）、中納言時光（＝藤原）・惟仲（＝平）の着座の事。

・藤原時光、長徳三年七月五日、任中納言。平惟仲、長徳四年正月十五日、任中納言（転正）。

37 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

長保三年六月十日（＝庚戌）、五墓日の公卿の着座の例の事。

②『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同日（＝長保三年六月十日）、着座の日時を撰ばしむる事。

38 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年同月（＝長保三年六月）廿八日（＝戊辰）、着座の事。

39 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝長保三年）七月二日、着座の後の三箇日、精進・念誦すべからざる事。

40 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年同月（＝長保三年七月）十三日、着座の後、初めて政（＝外記政）に参る事。

②『権記』長保三年（一〇〇一）七月十三日条（△B）

△A「小除目」

△B「藤中納言（＝藤原実資カ）、着座の後、初めて政（＝外記政）に参る事」

十三日、壬午□□。

△A「小除目也。」

△B「藤中納言（＝藤原実資カ）、着座の後□□□□□□。」

41 ①『権記』長保三年九月七日条（△BCF）

△A「参衙の事」

△B「着陣の事」

△C「陣申文」

△D「勅語を賜わる事」

△E「頭中将（＝源経房）、初めて文を奏する事」

△F「宰相中将（＝源俊賢）の着座」

七日（日×）、乙亥。

△A「参衙。晴。内に入る。床子に着すること、例の如し。」

△B「先是、右金吾（□金吾）（＝藤原公任）初めて参る。午二刻、宜陽殿に着す。〈西座〉此の間、金吾（□）（＝公任）起座し、壁後に佇立す。

予（＝藤原行成）、宜陽殿より、暫くして陣座に着す。又、壁後に立ち、金吾に謁す。金吾（々々）着座す。予、亦、之に着す。

△C「金吾、申文せしむべきの（×金）気色示さる。仍りて予、起座し、

脇の床子〔子〕に於いて、申文を見ること、例の如し。金吾、南座に就くの後、予、着座す。申文、例の如し。事了りて起座す。金吾、北に就く。右中弁（＝藤原朝経）、一に解文を結（×治）ね、金吾に覽ず。奏聞す。又、宣下す。

次いで殿上（＝殿上間）に参る。召に依り、御前（＝一条天皇）に候ず。仰せて云はく「顧問の職（＝藏人頭）を避くと雖も、猶、聞得る所の事を奏すべし。」

△E 頭中将（＝源経房）、今日、初めて文を奏すと云々（＝長保三年八月廿五日、任藏人頭）。

△F 帰出づるの間、花徳門に、宰相中将（＝源俊賢）に相逢ふ。今日、申剋（＝）、着陣すと云々。帰宅す。

・藤原公任、長保三年八月廿五日、任中納言。藤原行成、同日、任参議。源俊賢、長徳元年八月廿九日、任参議。

・藤原公任の中納言初参着陣・着座…〔41〕・〔45〕・〔46〕
・藤原行成の参議初参着陣・着座…〔41〕・〔45〕

〔42〕①『小記目録』（第一五・公卿着座事〔付着陣〕）

同年（＝長保三年）九月十四日、始めて着陣する事。〔申文有り。〕

②『権記』長保三年九月十四日条（△A）

△A「右大将（＝藤原実資）、初めて宜陽殿に着し給ふ事」

△B「院（＝東三条院藤原詮子）の御八講」

△C「式部丞（＝源忠孝）の宅の焼亡の事」

十四日、壬午。

△A

早朝、院（＝東三条院藤原詮子）に参る。左府（＝藤原道長）に詣づ。参内す。午剋、右大将（＝藤原実資）、初めて宜陽殿に着し給ふ。次

いで陣座に於いて、大臣の座の間に於いて、申文有り。是、先例歟。左大弁（＝藤原忠輔）、申文の後、亦、右近陣に就く。余（＝藤原行成）殿上（＝殿上間）に候じ、罷出づ。

△B 彈正宮（＝為尊親王）に詣づ。

△C 亦、院に参る。御八講也。記、別に在り。朝（＝朝講）、参り了りぬ。

△D 深更に及び、西方に、焼亡有り。式部丞忠孝（＝源）の宅と云々。夕講の後、罷出づ。

・藤原実資、長保三年八月廿五日、任権大納言、兼任右近衛大将。

〔43〕①『権記』長保三年九月廿一日条（△B）

△A「物忌」

△B「中宮権大夫（＝藤原齐信）の着陣」

廿一日、己丑。

△A 昨今、物忌。

△B 午時のとき

午時、中宮権大夫（＝藤原齐信）、消息を示されて云はく「今、着陣すべし。申文せしむべし。参るべし。」者り。奉平宿禰（＝泉）をして（×今）覆推せしむ。軽き耳。仍りて参内す。申二剋、史忠国

（＝坂本）申文す。右少弁輔尹（＝藤原）。帰宅す。

・藤原齐信、長保三年八月廿五日、任権中納言（十月三日、任右衛門督、十月十日、叙正三位）。

・藤原齐信の権中納言初参着陣・着座…〔43〕・〔46〕・〔52〕〔46〕・〔52〕は加階後初参着座か）

〔44〕①『権記』長保三年十月十九日条（△AC）

△A 「加階の後、初めて参衙する事」

△B 「還昇の奏慶」

△C 「陣申文」

△D 「弓場始」

△E 「院（＝藤原詮子）に院司還補の慶を申す事」

十九日、丙辰（丙辰×）。

参衙す。加階の後、今日参る也。新任の者、猶、三日を過ぎざず着すべし。何ぞ況や、加階の後の参衙に至りては延引すべからざるをや。然而、慮外の障敷。仍りて今日に延及す。事、已に違例なり。

左大弁（＝藤原忠輔）、同じく今日参らる。

時移りて後、内に入る。左大弁と共に、階下を経て、弓場殿に参る。

蔵人実房（＝藤原）をして殿上を免さるるの慶を奏（奏×）す。

史為孝（＝惟宗）、内大臣（＝藤原公季）参らるるの由を申す。仍りて

共に陣（＝陣座）に赴く。左大弁、申文に候じ了りぬ。春宮大夫（＝

藤原道綱）、余（＝藤原行成）に示すと云々。仍りて申文に候す。

△D 今日、弓場始也。

申剋、左近中将頼親朝臣（＝藤原）、膝突に就き、召の由を仰す。

下より起座し、壁後に於いて、笏を置き、弓矢（×筈）を執り、階

下を経て参着す。先是、頼親（＝藤原）・成房（＝藤原）両将、出居の

座に候ず。卿等着し訖りぬ。頼親起座す。成房、右将監保信（＝播

磨）を召し、的、懸替ふべきの由を（可）仰す。此の間、大臣（＝公

季）、気色を候ず。蔵人実房・忠隆（＝源）等をして、御（＝一条天皇）

及び臣下の射席等を撤せしむ。次いで内豎、西に渡り、能射の者を

召す。五・六人射訖りぬ。所掌を召す。右近少将公信（＝藤原）、

硯・簡等を弓に取副へ、大臣の前に参候じて書分く。以後の作法、

例の如し。右方の宰相中将（×宰相少将）（＝源俊賢）、後に参り、一番

を為す。此の間、実房、懸物を執り、辰巳の角の柱に着く。忠隆・

貞光（＝藤原）等、射分物を同じ柱の東下に昇立つ。「次の射手、未

だ立たざるの前に、之を置く也。違例と云々。」次いで侍臣、饌を

勧む。一献の間、御膳を供す。此の間の作法、例の如し。三度。停

めらるる後、勝の方、再拝すること、例の如し。的付の道濟（＝源、

此の間に遅参す。違例也。事了りて入御す。大将（＝公季）、蹕を称

ふ。還御す。中将と共に退出す。

△E 院（＝藤原詮子）に参る。院司還補の慶を申す。宰相中将参らる。

同じく以て慶の由を啓せしむ（令同以啓慶也）。弁命婦（＝橘良藝子）を

して、兩人（＝俊賢・行成）に位記を給はしむ。罷出づ。

此の夜、心神、例に乖く。暁に及び、常に復す。

・藤原行成・藤原忠輔、長保三年十月十日、叙従三位。

45①『権記』長保三年十月廿一日条（△C△E）

△A 「東宮（＝居貞親王）に還昇の慶を啓する事」

△B 「外記政」

△C 「参議に任ずる後、初めて南所（＝侍従所）に着する事」

△D 「陣申文」

△E 「左衛門督（＝藤原公任）、本陣（＝左衛門陣・建春門）に着する事」

△F 「中宮（＝藤原彰子）の御読経始」

△G 「教静閣梨を夜居と為す事」

廿一日、戊午（戊午×）。

△A 東宮（＝居貞親王）に参る。蔵人保任（＝源）をして慶の由を啓せし

む。

△B殿上（＝殿上間）に候ず。還升の後、初めて参る也。結政（＝結政所）に着す。外記、政（＝外記政）有り。藤中納言（＝藤原時光・宰相中将（＝源俊賢）、之を聴く。庁の事了りぬ。官掌の作法。

△C余（＝藤原行成、南所（＝侍從所）に就く。参議に任ずるの後、今日、初めて之に着す。門を出で、外記・史に揖し、及び五位の弁に揖す。非参議の儀に同じ。局（＝南所）の屋の北廂の東第一間の戸より入りて着座す。左中弁（＝藤原説孝）以下、又、着座すること、例の如し。史伊遠（＝美努）申文す。所（＝藏人所）の預、右少弁（＝藤原輔尹）の後より、次第に大舍人候ぜざる由を申上ぐ。下官（＝行成）の許に趨来たりて暫く居す。下官、箸を置（×抜き、箸を把り、上卿の気色を候ふ。許容するに随ひ、内豎を召すべきの由を仰す。食了り、未だ箸（×置）を置（□）かざる間、所の預、菜料を取り、下より次第に見せしむ。之を左中弁に付す。中弁（々々）（＝説孝）、之を執りて見る後、箸を置き、笏を執る。（文を執副ふ。）上（＝上卿）に申すこと、例の如し。了りて、内に入るの儀、例の如し。

△D右衛門督（＝藤原齊信、初より陣（＝陣座）に候ぜらる。気色を候ぜらる。中納言（＝時光、暫く壁後に立出づ。了りて退出せらる。此の間、左衛門督（＝藤原公任、又、参らる。納言（＝時光、花徳門の辺を徘徊（徘徊）す。又、申文有り。左金吾（＝公任）示されて云はく「上臈の納言、壁後に佇立するの間、申文せしむるは、甚だ礼無き事也。」と云々。

△E左金吾、今日、本陣（＝左衛門陣・建春門）に着すと云々。南座に、着すべきの由示さる。罷出づ。

△F中宮（＝藤原彰子）に参る。御読経始也。悩に依り、行香せず退出す。

△G今夜より、教静闇梨を請じ、夜居と為す。

△46①『権記』長保三年十月廿七日条（△B）

△A「東三条院（＝藤原詮子）、石山寺に参り給ふ事」

△B「左・右金吾（＝藤原公任・藤原齊信）の着座」

廿七日、甲子。

△A東三条院（＝藤原詮子）、石山寺に参り給ふ。之に依り、出車を奉らしむ。余（＝藤原行成、御共に祇候す。左大臣（＝藤原道長）・春宮大夫（＝藤原道綱）・宰相中将（＝源俊賢）・修理大夫（＝平親信）候ぜらる。黄昏、寺に到る。秉燭の後、大臣（＝道長）帰り給ふ。余・将作（×持作）（＝親信）、並びに御共に候ず。

△B今日、左・右金吾（吾々）（＝藤原公任・藤原齊信）着座すと云々。

△47①『権記』長保四年四月十日条（△B）

△A「諸国申請雑事定」

△B「公卿着座例」一卷を左大臣（＝藤原道長）に返奉する事」

十日、乙亥。

△A参内す。左大臣（＝藤原道長、春宮大夫（＝藤原道綱）、左衛門督（＝藤原公任、右衛門督（＝藤原齊信）、大弼・中将両相公（＝源俊賢・藤原兼隆）等、若狭守至道（＝藤原の申す三箇条、備前守清通朝臣（＝大江・周防守為理（＝菅原・伊予守（伊与守）明順朝臣（＝高階）等の申請する事を定申さる。

若狭守の申す一条の給復の事、及び莊園を制する事は、請に依る。今年、官・諸司に納むる物、漸に進済する事は、許さず。備前国の申す給復（×役）の事は、一任の間に、官に納むる封家

の調の絹の代、足別に、六百文を充つる事、八百を充つると裁許せらるべき歟。碎塩の代の事は、請に依る。

周防守の申す給復の事は、許さるべし。調庸の絹の代に、六十文を充つる事は、請に依る。宇佐使・大貳・唐物使・上下の諸使、駅鈴の剋に任せ、食・馬を勤むるの法の事は、件の事、縦ひ申請を経ずとも、法に任せて行なふべし。請に依り、裁許せらるべし。

伊予守(伊与守)の申す給復の事は、彼の国は元来、給復を申すの例無し。而るに前司(前々司)知章朝臣(藤原)の任中の疫癘に依り、人民死亡し、田畝減少す。仍りて前司兼資朝臣(源)の申請するの日、殊に裁許を賜ふ。任の間、漸く治術を施し、殊に亡弊の聞無し。偏に前任の例有るを以て、必ずしも申請すべからざる歟。前司の任終年の事、今明日、漸に進済する事、其の例無きに依り、許さるべからざる歟。兼官の事は、左右、勅定に随ふべしと云々。事了りぬ。

△B「宿所(道長の宿所)に参り、先日借り給ふ所の『公卿着座例』一卷を返奉す。又、故文忠朝臣(平)の男文明(平)の愁文を奉る。

一宮(敦康親王)の御方に参る。罷出づ。

48①『小記目録』(第一五・公卿着座事(付着陣))

同(長保)四年五月十四日、弼(彈正大弼)宰相有国(藤原)の着座の事。

②『権記』長保四年五月十四日条(△C)

△A「一宮(敦康親王)の御封物の相折勘文の事」

△B「官奏」

△C「彈正大弼(藤原有国)の着座」

十四日、己酉。
△A 左府(藤原道長)に詣づ。一宮(敦康親王)の御封物の相折勘文の事を申す。

△B 官奏有りと云々。右大臣(藤原顯光)。
△C 彈正大弼(藤原有国)着座すと云々。

③『公卿補任』長保四年条

参議藤原有国「五月十四日。巳時、着座す。」

(注1) 三条西家本・九条家本は「巳時」を「己酉」とする。

・藤原有国、長保三年十月三日、任参議。

49①『権記』長保四年十月三日条(△C)

△A「御八講の料の法花経を書き奉る事」

△B「枇杷殿の立柱上棟」

△C「新中納言(藤原隆家)の着陣」

△D「家印の鑄造の事」

三日、甲子。

△A 法花経第三巻を書き奉る。金字。御八講(十月廿二日)の料なり。

△B 枇杷殿、立柱上棟すと云々。

△C 新中納言(藤原隆家)、始めて陣(陣座)に参ると云々。申文無しと云々。

△D 伊遠(美努)来たり、道順朝臣(高階)の消息を示す。

早朝、淑光朝臣(大江)、「成」の字の印文を持来たる。即ち茂方を差はし、内匠属服時方の許に遣はす。家印、未だ鑄ず。九条殿(藤原師輔)の例、宰相に任じ給ふ(承平五年二月廿三日)の後、此の

事有り。

・藤原隆家、長保四年九月廿四日、更任權中納言。

・藤原隆家の權中納言初參着陣・着座：49・58

50 ①『權記』寛弘元年（一〇〇四）四月十二日条（△A）

△A「方違」

十二日、乙丑。

△A

此の夕、前尾張守知光朝臣（＝藤原）の宅に向かふ。明日、着座なり。官（＝太政官庁）、吉方に当たる為を以て也。

・藤原行成、長保五年十一月十五日、叙正三位。

・藤原行成の正三位初參着座：50・51

51 ①『權記』寛弘元年四月十三日条（△A）

△A「着座の事」

十三日、丙寅。

△A

午二点、官庁（＝太政官庁）に着す。三点、外記庁に着す。子細は、

『着座日記』に在り。

②『公卿補任』寛弘元年条

參議藤原行成「四月十三日、丙寅。着座す。」

52 ①『公卿補任』寛弘元年条

權中納言藤原齊信「六月四日、丁丑。子刻、着座す。」

（注1）六月四日は丁巳、六月廿四日は丁丑。

53 ①『權記』寛弘元年十月廿五日条（△B）

△A「外記政」

△B「右金吾（＝藤原齊信）の着陣」

△C「東宮（＝居貞親王）の御読経結願」

廿五日、乙巳。

△A

參衙す。政（＝外記政）有り。中宮權大夫（＝源俊賢）、日上為り。右金吾（＝藤原齊信）、加階の後、宜陽殿に着す。亦、陣座に於いて、申文有り。

△C

東宮（＝居貞親王）の御読経結願也。

・藤原齊信、寛弘元年十月廿一日、叙従二位。

・藤原齊信の従二位初參着陣・着座：53・55

54 ①『權記』寛弘元年十一月五日条（△C）

△A「清涼殿東廂の御障子の色紙形を書く事」

△B「冷泉院・四条宮（＝藤原遵子）、偷兒有る事」

△C「大藏卿（＝藤原正光）の着陣」

五日、乙卯。

△A

今朝、清涼殿東廂の御障子の色紙形を書く。

△B

頭中将（＝源経房）と同車し、左府（＝藤原道長）に參る。亦、御共に候じ、冷泉院に參る。次いで、余（＝藤原行成）と經通少将（＝藤原）と、四条宮（＝藤原遵子）に參る。兩處、偷兒の事有る也。入夜、家に帰る。

△C

大藏卿（＝藤原正光）、三位の後、今日、初めて着陣す。

・藤原正光、寛弘元年十月廿一日、叙従三位。

55 ①『權記』寛弘元年十一月七日条（△A）

△A「右金吾（＝齊信）、始めて外記（＝外記序）に参らるる事」

△B「直物」

△C「小除目」

七日、丁巳。

△A参内す。右金吾（＝藤原齊信）、加階の後、今日、始めて外記（＝外記序）に参らる。政（＝外記政）有り。

△B今日、直物の事有り。

△C次いで信濃守（信乃守）濟政（＝源）辞退す。佐光（＝藤原）任ず。小除目也。

△A参内す。右金吾（＝藤原齊信）、加階の後、今日、始めて外記（＝外記序）に参らる。政（＝外記政）有り。

56 ①『小記目録』（第一五・慶賀事〈付初参〉）

同年（＝寛弘二年）六月廿六日、新任の中納言（＝藤原忠輔）・参議（＝源経房）の初参の事。「敷政門を出入するは、先例に非ずと云々」。

②『小右記』寛弘二年（一〇〇五）六月廿六日条（+1）

▼a「左頭中将（＝源頼定）、宣旨を下すべき事」

+1「新任の中納言（＝藤原忠輔）・参議（＝源経房）の初参の事（敷政門を出入するは、先例に非ずと云々）」（目）

▼b「雷鳴」

▼c「右頭中将（＝藤原実成）悩煩ふ事」

廿六日、壬寅。

▼a左頭中将（＝源頼定）云はく「明日、文書を奏すべし。又、宣旨を下すべし。右中弁経通（＝藤原）、明日、初めて結政（＝結政所）に着すべし（＝寛弘二年六月十九日、任右中弁）。又、宣旨を給ふ。」者り。

▼b未刻許、雷鳴あり。但し、雨降らず。幾に非ず、雷公、声を収む。仍りて隨身を差はし、障の由を蔵人の許に示送る。

△A大外記善言朝臣（＝滋野）云はく「今日、宰相中将経房（＝源）、初めて参る。敷政門より出入す。其の次に、権中納言忠輔（＝藤原）参入す。同じく敷政門を用ふ。」甚だ奇怪の事也。右中弁経通朝臣云はく「左府（＝藤原道長）、宰相中将に、件の門を出入するを命ず。」者り。古今、此の例有らず。

△A右頭中将（＝藤原実成）、一昨より、悩煩ふ由と云々。仍りて将監興光（＝三善）を以て、之に問送る。即ち内府（＝藤原公季）の御返事有り。「煩ふ所、太だ重し。」と云々。内府、彼の宅に渡り給ふと云々。

③『権記』寛弘二年六月廿六日条（△AB）

△A「初めて結政所に参る事」

△B「新中納言（＝藤原忠輔）・宰相中将（＝源経房）の着陣」

△C「中納言（＝忠輔）、昇殿の慶を申す事」

廿六日、壬寅。「右大弁（＝藤原説孝）の初参。巡方を着す。」

今日、已刻、初めて結政所に参る。右大弁（＝藤原説孝）と相共に着す。右大弁、巡方帯を着す。左少史隆範（＝船）、申文を結ぬ。右少史博愛（＝惟宗）、文を余（＝藤原行成）に申す。永明、右（＝右大弁）に申す。訖りて吉書に署す。左中弁（道（＝源道方）・権左中弁（朝（＝藤原朝経）、共に着す。同じく吉書に署す。晴儀。立出・参内の儀、例の如し。

△A今日、新中納言（＝藤原忠輔）・宰相中将（＝源経房）、初めて宜陽殿に着す。余、同じく着す。転任の人「左大弁（＝行成）は必ずしも着すべからず。然而、今日、事の便有り。仍りて着する也。新中納言、陣（＝陣座）に於いて、初めて申文有り。左少史公節（＝源）、之に候す。新中納言・宰相（＝経房）の参入・退出の路、敷政門を用ふ。

△B今日、新中納言（＝藤原忠輔）・宰相中将（＝源経房）、初めて宜陽殿に着す。余、同じく着す。転任の人「左大弁（＝行成）は必ずしも着すべからず。然而、今日、事の便有り。仍りて着する也。新中納言、陣（＝陣座）に於いて、初めて申文有り。左少史公節（＝源）、之に候す。新中納言・宰相（＝経房）の参入・退出の路、敷政門を用ふ。

△C「殿上間」

殿上（＝殿上間）に参るの間、中納言（＝忠輔）、昇殿の慶を申す。

中将（＝経房）、早く退出して申さず。今日、殿上を免さるる也。

・藤原忠輔、寛弘二年六月十九日、任権中納言。源経房、同日、任参議。藤原行成、同日、任左大弁。藤原説孝、同日、任右大弁。

・源経房の参議初参着陣・着座：56・58

57 ①『権記』寛弘二年七月十一日条（△A）

△A「始めて庁（＝外記庁）並びに南（＝南所）に就く事」

△B「相撲召仰」

△C「施米使の事」

十一日、丁巳。

△A「参着す。政（＝外記政）有り。慶（＝六月廿日）の後、今日、始めて

庁（＝外記庁）並びに南（＝南所）に就く。晴儀。

△B「内に入る。今日、相撲召仰有るべしと云々。」

△C「左府（＝藤原道長）に詣づ。申す。「奉親（＝小槻）申さしむ。『慥なる使（＝施米使）の事を勤めむが為に、重ねて僧の数等を取らむと欲するの間、独身、奉仕し難し。今二人を加へ、将（＝持）に奉仕せむとす。』仰せて云はく「公節（＝源）・博愛（＝惟宗）等を加遣はすべし。」又、任符（＝府）を申す所、権左中弁（＝藤原朝経）、奉仕すべきの由、之を召仰す。」

58 ①『権記』寛弘四年三月九日条（△B）

△A「臨時祭（＝石清水）」

△B「権中納言（＝藤原隆家）・宰相中将（＝源経房）の着座」

九日、丙午。

△A「臨時祭（＝石清水）」

臨時祭（＝石清水）。御物忌。使は業遠朝臣（＝高階）。見物す。

東宮（＝居貞親王）に参る。退出す。

△B「権中納言（＝藤原隆家）・宰相中将（＝源経房）着座すと云々。」

②『公卿補任』寛弘四年条

権中納言藤原隆家「三月九日、丙午。着座す。」

③『公卿補任』寛弘四年条

参議源経房「三月九日。着座す。」

・藤原隆家、長保四年九月廿四日、更任権中納言（寛弘四年正月廿日、叙従二位）。源経房、寛弘二年六月十九日、任参議。

59 ①『御堂関白記』寛弘五年（一〇〇八）二月八日条（▲A）

▲A「右中将（＝藤原教通）・新宰相等（＝藤原兼隆・藤原実成）の着陣」

八日、己亥。

▲A「道方朝臣（臣×）（＝源）、初めて申文す。教通（＝藤原）着陣す。新宰相等（＝藤原兼隆・藤原実成）着すと云々。先づ納言の座に着す。座を立ち、陣の腋の辺に立つ。而る後に、又、参議の座に着すと云ふ。是、一条院に於いては、宜陽殿の座無し。」

女方（＝源倫子、宮（＝藤原彰子）に参る。

・源道方、寛弘二年六月十九日、任左中弁、同五年正月廿八日、任蔵人頭。藤原教通、同日、任右近衛中将。藤原兼隆、同日、任参議。藤原実成、同日、任参議。

△A「着座の日時勘申」

60 『権記』寛弘六年（一〇〇九）三月六日条（△A）

△A「着座の日時勘申」

六日、辛酉。

△A 奉平宿禰（＝県）、初めて参るべきの日を勘申す。（来たる十四日、巳・午・未）

61 ①『御堂関白記』寛弘六年三月十四日条（▲ABC）

▲A 「新任の公卿の着陣」

▲B 「左衛門督（＝頼通）の本陣（＝左衛門陣）着陣」

▲C 「初めて結政所に参る事」

十四日、己巳。

▲A 新任の公卿、陣座に着す。大中納言四人（＝藤原公任・藤原齊信・藤原

行成・藤原頼通）。申文の事有り。皆、宣旨を下す。

▲B 左衛門督（＝頼通）、又、本陣（＝左衛門陣）に着す。

▲C 左右大弁（＝左大弁正四位下藤原説孝・右大弁正四位上源道方）、右（＝道方）、

位階上臈也。結政、常の如し。座を立つ時、右大弁（＝道方）、先づ

立つ。出立つ所は、東に立つこと、常の如し。次いで、左大弁（＝

説孝）立つ。西に立（々）つこと、又、常の如し。左大弁前行し、陣

の腋の例の床子に着す。右大弁の座定むるに、本座違はざる也。

行歩・着座（＝座）の所、尚、位階に依（×位）るべし。自余、常の

如し。是、気色に依りて定むる所也。

②『権記』寛弘六年三月十四日条（△ACDEGHJ）

△A 「四条大納言（＝藤原公任）の着陣」

△B 「昇殿を聴さるる事」

△C 「中宮大夫（＝藤原齊信）の着陣」

△D 「着陣、陣申文の事」

△E 「左金吾（＝藤原頼通）の着陣」

△F 「昇殿の奏慶」

△G 「初参の日の出入の門の事」

△H 「着陣の日の申文の有無の事」

△I 「大弁以下新任・昇晋の弁等、初めて結政所に参る事」

△J 「左兵衛督（＝藤原実成）の着陣」

十四日、己巳。

▲A 朝、猶、雨降る。午に及び、晴氣有り。仍りて参内す。暫く

御書所に在り。此の間、四条大納言（＝藤原公任）着陣す。申文の事

有り。（午刻也。）

▲B 右大弁（＝源道方）来示して云はく「昇殿聴さる。」者り。

▲C 大納言（＝公任）、宣旨を給ふの後に退出す。時は午四点也。仍り

て未二点を相待つの間、中宮大夫（＝藤原齊信）、敷政門より参入す。

申文の間、左衛門督（＝藤原頼通）、同門より参入す。上臈（＝齊信）の

座に在るに依り、暫く壁後に佇立すと云々。即ち御書所を出で、同

じく壁後に到る。中宮大夫、申文の後、亦、宣旨を給下し了りぬ。

▲D 壁後に出で、早く着すべきの由を示さる。時に未二点也。仍りて

陣（＝陣座）の北座に着す。頃之、未三点を打つ。申文の史伊岐善

政、文刺を捧げ、南に渡るの後に起座す。更に南座に着す。次いで

右大弁（＝道方）着座す。云はく「申文。」予（＝藤原行成）目す。大弁

（＝道方）称唯して左に顧る。右少史善政、申文の文刺（々刺）を捧げ

て趨出で、小庭に跪く。予目す。善政称唯し、膝突に就く。文刺を

指寄す。笏を右に置き、文を執る。「帯剣するに依り、右に置く

也。」史、揖する後、懸紙を展げ、文を見る。一枚は尾張の匙文、

一枚（二枚）は下野の匙文、一枚は左少史宣理（＝竹田）の馬料文

（×馬料文）。一々見了り、左手を以て、懸紙を引取り、左右を以て

引展げ、史に給ふ。「此の院（＝一条院）に因る儀なり。内裏に於い

ては、右手を以て取るべき也。」史(々)、之を取り、地に展置く。先づ尾張の文を給ふ。史、之を開きて見せしむ。仰す。「申し給へ。」次いで下野の文、亦、同じ。次いで馬料文、頓許し了りぬ。史、懸紙を巻き、立たむと欲するの間、予、笏を執る。史、次將の座の程に到るに比び、大弁(道方)揖して退く。「着座せむと欲すること有る也。」次いで右大弁、膝突に就き、宣旨一枚を給ふ。内藏寮の請奏也。子細は、目録に見ゆ。之を結ぬ。「請に依れ。」者り。大弁(道方)云はく「新任の左少弁為時朝臣(藤原、初めて宣旨を給ふべし。」と云々。即ち便に召すべきの由を示す。為時朝臣来たり、膝突に着す。笏を置き、宣旨を下す。為時、笏を置き、文を開きて見る後、押合せて結申(〇)す。(押合わせ、之(〇)を結めるは違例なり。」仰す。「請に依れ。」了りて為時、笏を取る。予、笏を執り、相揖して去る。予、又、起座し、壁後に到る。

△金吾(頼通、座に就く。此の間、未四点也。左大弁(藤原説孝)、申文に候ず。右大史永明、同じく候ずる也。頭中將(源頼定)、宣旨を下す。又、左中弁朝経朝臣(藤原)に下給ふ。弁(朝経)退くの後、金吾(頼通)、亦、起座し、壁後に来たる。

△頭中將、昇殿免さるるの由を告ぐ。即ち相共に御所の辺に参る。頭中將(頼定)をして慶の由を奏(×達)せしむ。殿上(殿上間)の座に着す。

△金吾(頼通)起座し、(左衛門陣に着せむが為と云々。)敷政門(敷政門代)を出づと云々。頃之、予、同門より退出す。去る天慶元年(六月廿三日)、九条殿(藤原師輔、中納言に任じ給ふ。初参の日、此の門より出で給ふ。例也。右將軍(藤原実資)・四条納言(

公任)は、此の道を用ひず。九条殿の一家の中宮大夫・左金吾の出入は、此の道を用ふ。当時の左府(藤原道長)の御説也。抑、予、此の一門に在り。須く参入するの時、此の道を用ふべし。然而、四條納言、先に陣座に在り。上(上卿)為るの外は、此の道を用ふべからず。仍りて花徳門代より参入する也。中宮大夫、未二点に着すべきの由、今朝、御消息有り。而るに午四点、亦、中宮大夫、陣に在るの間、金吾、敷政門代より参る。頗る不穩の事也。

△右將軍、正(正官)に転ずるの後、初参せらる。然而、申文無し。右大弁云はく「床子に着し、申文を見る。申文(々々)の史来たり、文を取るの間、中宮大夫退出せらるるの事不穩なり。」と云々。今日、大弁以下新任(右中弁藤原重尹・左少弁藤原為時)・昇晋(左大弁藤原説孝・右大弁源道方・左中弁藤原朝経・権左中弁藤原経通)の弁等六人、初めて結政に参る(寛弘六年三月四日任。結政(々々)了り、右大弁、先づ起座す。位次に依る也。陣腋の床子、左右、例の如しと云々。

△左兵衛督相公(藤原実成)、今日、陣(左兵衛陣力)の座に就くべしと云々。

・藤原公任、寛弘六年三月四日、任権大納言。藤原齐信、同日、任権大納言。藤原行成、同日、任権中納言。藤原実資、同日、任大納言(転正)。藤原頼通、同日、任権中納言・左衛門督。藤原実成、寛弘五年正月廿八日、任参議(同年十月十六日、叙従三位。同六年三月四日、兼左兵衛督)。

・藤原頼通の権中納言初参着陣・着座…60・61・62
 ・藤原齐信の権大納言初参着陣・着座…60・61・62
 ・藤原行成の権中納言初参着陣・着座…60・61・66・67

⑥2 『御堂関白記』寛弘七年（一〇一〇）二月廿六日条（▲B）

▲A 「東宮（＝居貞親王）、尚侍（＝藤原妍子）の方に渡り給ふ事」

▲B 「中宮大夫（＝藤原齊信）・左衛門督（＝藤原頼通）の着座」

▲C 「饗祿の事」（裏書）

廿六日、丙午。

▲A 東宮（＝居貞親王）、尚侍（＝藤原妍子）の方に渡り給ふ。候ずる上卿

（＝公卿）、内府（＝藤原公季）・皇太后宮大夫（＝藤原公任）・侍從中納言

（＝藤原行成）・源中納言（＝源俊賢）・尹中納言（＝藤原時光）・修理大夫

（＝藤原有国）・右衛門督（＝藤原懷平）・右宰相中将（＝藤原兼隆）・大藏卿

（＝藤原正光）・左宰相中将（＝源経房）・左兵衛督（＝左兵衛門督）（＝藤原実

成）・源宰相（宰相×）（＝源頼定）等也。西渡殿（＝一条第）に、座を儲く。

酒食有り。入夜、還り給ふ。

▲B 中宮大夫（＝藤原齊信）・左衛門督（＝藤原頼通）着座す。左衛門督は

酉時。我（＝藤原道長）の中納言の着座（＝永延二年二月十九日、⑦）も、

此の日（＝丙午）也。時も、同時なり。中宮大夫は丑時。雨下ること、

通夜。

▲C 廿六日。東宮の殿上（＝殿上人）・女方・藏人所・帶刀陣（＝刀帶

陣）・庁（＝東宮庁）等に、屯物を送る。（殿上は侍從中納言。女方は

源中納言。）女方に、物を送る。御宣旨乳母には、女装束・織物の

褂・打褂・宮・袋・絹十五疋。右衛門には、打褂を加へず。冷泉院

宣旨も、之に同じ。絹は十疋。進命婦には絹八疋。自余の女方には

六疋。博士（＝博士命婦）には三疋。采女・得選には二疋。自余の女

方等には足絹（＝見）。

② 『権記』寛弘七年二月廿六日条（△F）

△A 「三宮（＝敦良親王）の政所始」

△B 「藏人を補し、殿上を聴す事」

△C 「右少弁（＝菅原宣義）、初めて結政に参る事」

△D 「宣旨」

△E 「東宮（＝居貞親王）、尚侍（＝藤原妍子）の御曹司に渡り給ふ事」

△F 「左金吾（＝藤原頼通）・中宮大夫（＝藤原齊信）の着座」

△G 「伊予介（＝藤原広業）、赴任を東宮に申さしむる事」（頭書）

廿六日、丙午。

▲A 参内す。三宮（＝敦良親王）の政所始と云々。

▲B 左大臣（＝藤原道長）の御宿所に詣づ。

▲C 右兵衛佐能信（＝藤原）、藏人と為す。右衛門佐知光（＝藤原）は殿

上。

▲D 右少弁宣義朝臣（＝菅原）、今日、初めて結政に参る（二月十六日、任

右少弁）。

▲E 四条大納言（＝藤原公任）着陣し、宣旨を給ふ。「宣義、先づ絹の解

文を申す。奏せらる。即ち下す也。」

▲F 左大臣、東宮（＝居貞親王）に参る。東宮（々々）、今日、初めて

尚侍（＝藤原妍子）の御曹司に渡り給ふ。内大臣（＝藤原公季）・四条大

納言・源納言（＝源俊賢）・有国（＝藤原）・懷平（＝藤原）・兼隆（＝藤

原・正光（＝藤原・経房（＝源）・実成（＝藤原・頼定（＝源）等の相

公、同じく参る。東宮の殿上の料の煕飯は、予（＝藤原行成）調ふ。

大盤所の料は源納言。菓子廿合は左宰相中将（＝源経房）。又、所々

（□々）の煕飯あり。

▲G 今日、酉刻、左金吾（＝藤原頼通）着座す。今日、甚雨暴風。亦、

丑刻、中宮大夫（＝藤原齊信）着座す。

▲H 伊予介（伊与介）広業（＝藤原）、赴任を宮（＝東宮）に申さしむ。即

ち御前（＝居貞親王）に於（□）いて、御馬を給はる。（帶刀引く。）広業進み、笏を搦み、馬を給はり、一拜（□拜）して引出だす。学士（×生（＝東宮學士））を以て、此の恩有る歟。

- ③『日本紀略』寛弘七年二月廿六日条
廿六日、丙午。

酉時、權中納言頼通着座す。丑時、權大納言齊信着座す。

- ④『公卿補任』寛弘七年条

權大納言藤原齊信「二月廿六日、丙午。着座す。」

- ⑤『公卿補任』寛弘七年条

權中納言藤原頼通「二月廿六日、丙午。着座す。」

- 63①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

寛弘七年二月廿七日、新任の公卿の着座の事。

- 64①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年同月（＝寛弘七年二月）廿九日（＝己酉）、椅子を立つる事。

- 65①『御堂関白記』寛弘七年十二月十日条（▲A）

▲A「三位中将（＝藤原教通）の着陣」

十日、甲寅。

▲A 雨下る。巳時を以て、三位中将（＝藤原教通）、初めて宜陽殿並びに陣座に着す。

・藤原教通、寛弘七年十一月廿八日、叙従三位。

- 66①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝寛弘）八年二月二日、行成卿（＝藤原）の着座の事。

- ②『御堂関白記』寛弘八年（一〇一一）二月二日条（▲B）

▲A「京官の除目相違する事」

▲B「侍従中納言（＝藤原行成）の着座」

二日、丙午。

▲A 辰時許、除書の聞の事有り。国々は、昨日の如し。京官は、頗る相違す。宜しからざる事有り。是、臨時の不意の事歟。

▲B 侍従中納言（＝藤原行成）、酉時を以て着座す。

- ③『權記』寛弘八年二月二日条（△A C）

△A「除目議」

△B「女房の重服」

△C「慶賀の人々來たる事」

二日、丙午。

▲A 卯剋、除目議了りぬ。兵部卿（＝藤原忠輔、下名の所に着す。余（＝藤原行成）、早く行なはるべきの由を相示すに因る。酉剋に着座すべきに依る也。

▲B 辰二剋、内（＝一条院）より退く。女房、小兒を將ゐ、桃園（＝世尊寺）に赴く。重服に依る也。

▲C 慶賀の人々來たる。申二剋、庁の事了りぬと云々。史部來告ぐ。

子細は「着座卷」に在り。

- ④『公卿補任』寛弘八年条

權中納言藤原行成「二月二日、丙午。着座す。」

- 67①『權記』寛弘八年二月七日条（△A）

△A「着座の後、始めて外記（＝外記序）に参着する事」

七日、辛亥。

着座の後、始めて外記（＝外記序）に参着す。子細は、「着座記」の奥に在り。

68 ①『小右記』寛弘八年八月廿三日条（▼c）

+1 「政始の事」（目一四・臨時政始事）

▼a 「悠紀・主基所の印等の事」

▼b 「女御（＝藤原妍子・藤原城子）の宣旨を下す事」

▼c 「左衛門督（＝藤原頼通）・左三位中将（＝藤原教通）の着座」

+2 「故花山院の宮達（＝昭登親王・清仁親王）の元服の事」

▼d 「藤大納言（＝藤原道綱）の子（＝藤原兼経）の元服」

廿三日、甲子。

外記 政始。〔御讓位（＝御講位）（＝寛弘八年六月十三日受禪）の後、

今日、政を始む。〔極〕文、未だ聞かざる事と云々。〕

▼参内す。陣頭（＝陣座）に於いて、左右の弁（＝藤原朝経・藤原重尹）、

悠紀・主基所の請申す印の文、〔各、文印一面・木印一面。〕

用途料の正税稲一万束の文、官（＝太政官）の東庁に於いて、行事所

を始むる日時、〔今日の申刻。〕主典代を定むる文、合せて四

枚を進る。右中弁（＝重尹）の進る主基所の定むる主典代の文、行事

所始の文、主典代の文等、各見りて下給ふ。印・稻等の文二通

は、左中弁（＝朝経）を以て奏せしむ。即ち宣旨、同弁に下す（々々）。

悠紀・主基行事所を始むべきの時、勘申せしむべきの由を仰す。

即ち吉平（＝安倍）に仰す。中弁、結政に営ぎ着するは、今日、故花

山院の宮（＝昭登親王・清仁親王）の元服所に参るべし。若し彼の政

了る時刻を待たば、自から過ぐす歟。今日、勘申せしめ、明日、見

るべきの由、相示して退出す。

▼頭弁（＝源道方、資平（＝藤原）を以て申さしめて云はく「今日、

女御（＝藤原妍子・藤原城子）の宣旨を下す。上達部四・五人参入す。

其の事有るべきの由、仰事有り。又、左府（＝藤原道長、只今、参

入せらるべし。〕者り。重ねて案内を取らむと欲す。右大弁（＝源道

方、結政所に在り。仍りて事由を資平に云置きて退出す。〔午終。〕

▼c 今日、宜陽殿、座席を敷くに、陣官に問ふ。申して云はく「左衛

門督（＝藤原頼通）・左三位中将（＝藤原教通）、今朝、着しりて退出

す。」「左金吾（＝頼通、正二位に叙し、始めて着す。三位中将（＝教

通、正三位に叙し、始めて着す。〕

+2 今日、故花山院の宮達の御元服。（先年、冷泉上皇の皇子（々々）

と為る（＝寛弘元年四月廿五日）。即ち親王と為り（＝寛弘元年五月四日）、

五・六親王（＝昭登・清仁）と号す。〕仍りて未終に参入す。藤原納言

〔隆家（＝藤原）・尹中納言（時光（＝藤原））、同じく参る。〕御元服の

時刻は申。〕者り。寝殿の母屋の三間に、両親王の座を敷く。〔西第

一間・東第一間、各の座を敷く。縹綱端畳二枚。其の上に、茵を

敷く。各の座の坤の方に、二階（＝二階棚）を立て、冠・巾・櫛の

具を置く。各の座の巽の方に、唐匣・泔坏等を立つ。各、脇息（＝

腋息）有るべし。而るに其の実無し。後聞く。「公誠朝臣（＝平）申し

て云はく『思失して置かず。』者り。〕南廂に、上達部の座を敷き、

〔土敷を敷く。頗る定まらず。〕東廂に、殿上人の座を敷く。時刻至

り、〔刻限、頗る過ぐ。〕各、座に着し給ふ。〔童装束を着す。〕仮に

東の母屋の御簾を下ろし、御屏風を立つ。〔童装束を着す。〕菅円座を以てす。輔

頼、先（＝光）づ剣（＝叙）を解き、簀子敷に置く。〕帰出で、簀子敷

に居す。周頼、巾子（×巾子）に入れず。仍りて案内を示す。更に進み、巾子に髻を入れる。其の後、秉燭す。「灯台を立つ。打敷無し。太だ不便也。」次いで下官（＝藤原実資）参進む。先づ五親王（＝昭登）に冠を加ふ。次いで退出す。東一間より入り、第六親王（＝清仁）に冠を加ふ。了りて退出し、東渡殿に候ず。兩卿（＝隆家・時光、同じく此の座に在り。次いで東の母屋の御簾を巻かしむ。了りて兩親王（＝清仁・昭登）帰入る。須く理髪（せいはつ）の雑具（ざつぐ）を撤すべき歟。然而、其の事無し。前跡を失し了りぬ。次いで余（＝実資）及び兩卿着座す。此の間、茵（いん）を敷く。次いで殿上人（×）着座す。（経通（＝藤原）・周頼・資平（＝藤原）の三人也。）上達部の座の上の頭に、加冠の座を敷く。（畳・土敷・茵。北面。東面に敷くべし。例を失し了りぬ。）前物。（高坏十二本。打敷。）次いで上達部の前物。（高坏四本。）次いで上達部の座の末、殿上人の座の上に、畳一枚を敷き、理髪（せいはつ）の人の前物を居う。各、机二脚。次いで殿上人の前に机を立つ。余、加冠の座に着す。一献は藤中納言。其の後、余、上達部の座に着す。《本座》。次いで尹納言勸盃す。次いで藤納言（＝隆家）起座し、祿を執り、下官に被く。「女装束。織物の掛・紅染の打掛を加ふ。」次いで加冠の祿は、薄物の掛・袴。余、起座して退出す。乗車の間、剣を与ふ。（螺鈿（らでん）の野剣。囊（ふくろ）に納む。）隨身（みづから）に足絹（あしきぬ）を給ふ。次いで左府に詣づ。上達部の座、西对（＝土御門第）の南又廂（みなまたびと）に在り。南北（南×）相對す。《東上》。雲上人の座、絶席、末に在り。主人（＝道長、即ち客亭に出づ。卿相已下着座す。（大納言道綱（＝藤原）、中納言頼通・隆家・時光、参議懷平（＝藤原）・経房（＝源）・実成（＝藤原）、三位中将教通（＝藤原）。）諸大夫の座、西中門の北廊に在り。饗膳・盃酌ありと云々。亥刻に臨み、菅円座二枚、上

達部の上首（じょうしゅ）に敷く。冠者、（藤大納言（＝道綱）の子（＝藤原兼経）。左府の戸に入ると云々。）円座に着す。（童装束を着す。是、即ち上童也。）先是、雲上人、理髪（せいはつ）の具を執り、円座の左右に置く。次いで四位二人、脂燭（しろう）を執り、（左近少将忠経（＝藤原）・中務大輔周頼。）円座の左右に居う。左中弁朝経、円座に進居す。理髪（せいはつ）了りて退居す。脂燭、又、退く。左府の目するに依り、余、冠者の許に進寄りて加冠す。本座に復す。次いで左中弁理髪す。了りて退出す。次いで冠者退く。理髪（せいはつ）の雑具を撤す。右大弁道方（頭（＝藏人頭）、座の後に来たり、下官（＝実資）に仰せて云はく「藤兼経、従五位上に叙すべし。」者り。（左府の子に依ると云々。）内記候ぜず。仍りて位記（いぎ）の事を召仰（めしおほ）ぜず。冠者、位袍（いはう）を着し、庭中に進みて拝礼（はいらい）す。次いで加冠の座、冠者の円座の所に敷く。（畳二枚・土敷・茵等。）前物を居う。（高坏十二本。）次いで下臈（げらう）の上達部の座の前の高坏を撤す。理髪（せいはつ）の前に机二脚を立つ。左府の劔（けん）に依り、加冠の座に着す。次いで相府（×座）（＝道長、勸盃して流巡（りゅうじゆん）す。次いで藤大納言勸盃す。余受く。左相府進みて受く。流巡（りゅうじゆん）了り、余、箸を立て、本座に復す。又、左兵衛督（＝実成）勸盃す。余受け、藤大納言に擬（×）擲（な）す。頻（しきり）りに左府、便無かるべきに依り、相府（＝道長、其の意を得。三位中将教通に仰（×）可）せ、祿を取り、之を被く。引出物（ひきだすもの）の馬二足。起座して退出す。隨身（みづから）に足絹（あしきぬ）を給ふ。垣下（かきだ）の上達部已下、祿無し。又、立明（たちあかし）。祿無き歟。

・藤原頼通、寛弘八年六月九日、叙正二位。藤原教通、寛弘八月十一日、叙正三位。

69 ①『小記目錄』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝寛弘八年）九月五日、左大臣（＝藤原道長）の着陣の事。〔内覧宣旨を奉はり、初めて参る。〕

②『小右記』寛弘八年九月五日条（＊1、▼a b）

▼a「右三位中将（＝藤原頼宗）の着陣」

＊1「左府（＝藤原道長）、内覧の後、始めて陣（＝陣座）に参る事」

▼b「左府の退出の御前（＝前驅）の事」

▼c「除目の儀を止むる事」

五日、乙亥。

参内す。宜陽殿に、座を敷くに、案内を問ふ。彼は云はく「右三位中将（＝藤原頼宗）、今朝、初めて参る。」者り。

＊1 左・右大臣（＝藤原道長・藤原顕光）、大納言齊信（＝藤原）・公任（＝藤原）、中納言俊賢（＝源）〔鈍色を着するに依りて着陣せず。今日、左府（×符）（＝道長）、官中の雑事を奉行するの後、初めて参る。仍りて鈍色の人は候ぜず。然るに、今日、俊賢一人、鈍色を着す。宣旨に依り、除服早くし了りぬ。而るに、鈍色を着して参内するは如何未だ意を得ざる事也。〕・隆家（＝藤原）、〔以茂剋先〕参議（×了）・懷平（々）（＝藤原）・実成（＝藤原）。左府（×符）申文せしむ。右大弁道方（＝源）、陣座に候ず。申文了り、彼の道方、宣旨を左府（×符）に下さす。

其の後、左府（×符）、敷政門より退出す。内府（×符）（＝藤原公季）已下、相従ふ。余（＝藤原実資）、弓箭を解き、同じく大臣（＝道長）に従ふ。左衛門陣（＝建春門）を出づるに比び、外記・史、大臣の左右より趨出づ。〔外記（＝少外記中原徳如カ）は右、史（＝右大史竹田宣理カ）は梨（×架）（＝梨壺・昭陽舎）の北の小道より出づ。然らざる事也。〕大臣、外記・史を留む。外記（々々）・史（々）、跪候ず。外記、更

に立ち、外記門に到る。立ち乍ら、召使（々使）を召す。召使（々□）称唯す。外記跪候ず。大臣已下、次第に退出す。兩丞相（＝道長・公季）、門（＝陽明門）の砌に到り、相揖して退出す。〔左府（×符）、南に立ち、内府（×符）、北に立つ。共に西面す。〕次いで、内府（×符）揖し、已次出づ。余、更に列を離れ、砌の下に到り、西に向き、揖して出づ。〔弁（＝左少弁高階積善カ）・少納言【南に向く。】・外記【東に向く。】の列立の儀、尋ねべし。其の説、定まらず。〕右大臣、陣

（＝陣座）の壁後に留まり、相従はず。

今日の除目の儀止む。内々に奏せしむる所也。

右大弁、宣旨を下す。〔侍従の厨の申す饗料米三十石。東三条院より内裏に幸する日の上達部・侍従の饗料なり。〕

③『御堂関白記』寛弘八年九月五日条（▲A）

▲A「着座の事」

▲B「御前（＝前驅）の事」

▲C「女方（＝源倫子）、鳴瀧に解除する事」

五日、乙亥。

左仗（×丈）（＝陣座）に着す。申文せしむ。吉服を着す。余（□）（＝藤原道長）、文書を見るべき宣旨を承はる後、初めて着座（×度）する也。人々、多く参る。時は申。宜陽殿に着せず退出す。

御前（＝前驅）の事有り。陽明門に到る間なり。余、門内、南方に立つ。内府（＝藤原公季）、北方に立ち、西面すること、例也。諸卿、左兵衛（＝左兵衛府）の小門（＝北小門）より雁行し、東面して立つべき也。而るに、多く東に寄りて立定まらず。案内を知らざるに似る。右大将（＝藤原実資）・春宮大夫（＝藤原齊信）・皇太后宮大夫（＝藤原公任）・中納言（＝藤原隆家・藤原行成）、〔供〕多く有り。

▲C「源倫子、鳴瀧にて解除す。」

陽明門に至るの間、弁等、公卿の立つ列の末にあり。直さざる事、宜しからず。上官の前に列し、東面北上に立つべき也。

④『権記』寛弘八年九月五日条(△B C)

△A「吉服を着する事」

△B「左府(＝藤原道長)、内覧の後、初めて陣(＝陣座)に参らるる事」

△C「御前(＝前驅)の事」

五日、乙亥。

吉服(服×)を着し、参内す。」「鈍色を着

す。

今日、左大臣(左□□(＝藤原道長)「」後、

今日、初めて陣(＝陣座)に参らるる也。」と云々。申二廻、大臣(＝

道長)着座す。」「□□此の座を退く。」右大弁道方朝臣(□□朝臣

(＝源)・右大史竹田宣理、申文に候ず。宣理、須く敷政門(敷□□

の北掖に立つべし。大弁(＝道方)と眼を合はすの後、参進むべき也。

而るに、年来の一条院(×□□院)に習ひ、南掖に立つ。仍りて、

大弁、面を顧みると雖も、之を知らず。又、警固の間に依り、陣座

の前(□)の小庭に、平張(□)有り。平張(々々)の中に、胡床を立て、

官人等候すべき也。宣理、平張より参進む。又、出入の時、

石橋を二・三足踏む。先例は、片足(□)□を踏む。失錯、一に非

ず。

事了り、大臣(＝道長)、敷政門より退出す。右大臣(＝藤原顯光、

壁後(□後)に留まる。内大臣(＝藤原公季)、共に出づ。(違例と

云々。)左大臣、宣仁門の下に於いて□□を示さる。是、出づと雖

も、御「」止む。「」趨出づるの時、「」

「」を仰せらる。「」外、此の由を仰せらる。

少外記中原徳如・右大史竹田宣理(□□、左右に在り。仰を奉はり、

共に跪きて称唯す。徳如、更に起ちて趨進み、外記門(外□□)に立

ち、喚使を召すこと、二音。喚使、門内に在りて称唯す。時に、徳

如跪候(□)ず。行歩(□歩)過ぐるの後、更に起つ。宣理は、北

屏の下に立つ。官掌・喚使(喚□)等(□、御前(＝前驅)に候するこ

と、例の如し。陽明門の下に到りて跪候ず。左大臣、門の南第二間

(□□)に当たりて立(□)つ。〈西面〉内大臣、第三間に当たりて

立つ。(又、西面)右大将(＝藤原実資)以下、(東面東上)雁行(□

□す。右中弁(□中弁)重尹(＝藤原)・左少弁積善(＝高階、同じく

雁行し、公卿の列の末に立つ。□□□□(少納言(□□□同(□)じ。

之)外記(□記)・史、南上東面。」「南二間、

揖す。或は「」東宮(＝敦成親王、

一宮(＝敦康親王)等。

・藤原頼宗、寛弘八年八月十一日、叙従三位。藤原道長、寛弘八年八

月廿三日、内覧宣旨。

⑦①『御堂関白記』長和二年六月廿七日条(▲A)

▲A「大納言(＝藤原頼通)・中納言(＝藤原教通)の着陣の時勘申」

▲B「外記の物忌」

廿七日、丁亥。

▲A 光榮朝臣(＝賀茂)を召し、兩人(＝藤原頼通・藤原教通)、着陣すべき

日を問ふ。申して云はく「来たる廿二日(＝七月廿二日壬子)。」是、大

納言家(＝頼通)申す所也。「来月三日(＝癸巳)は宜しき日也。

如何。」問ふ。申して云はく「彼の日は大禍日(＝七月の大禍日は巳の

日也。」仰す。「大禍日は忌むべきに非ず。二月丙午の日、是、着座の吉日也（＝二月の大禍日は午の日）。着座と初参とは同じ事也。而るに彼（＝二月の大禍日）を忌まず、是の事（＝七月の大禍日）を忌むは奇しき事也。」と云々。太皇太后宮大夫（＝藤原公任・源中納言（＝源俊賢）・侍従中納言（＝藤原行成）等来会ふ。光栄の申す所は、「余（＝藤原道長）の云ふ事、尤も理也。」と云々。仍りて彼の日に、参るべき由を仰す。又、受領の初めての下向（×匂）は、三月丁未の日、吉日として用ゐたる。又、是、同じく大禍日（＝三月の大禍日は丑の日）也。件の日、唯、三宝を忌むべき歟。自余の事、忌むべきに非ざる歟。

▲明日・明後日は、外記の物忌なり。年に当たらずと雖も、参内すべきに非ざるに依り、入夜、参入して退出す。

⑦①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）
長和二年六月廿八日（＝戊子）、公卿の着陣、太禍日を忌むべからざる事。

②『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同日（＝長和二年六月廿八日）、着陣の間の作法の事。

③『小右記』長和二年六月廿八日条（▼de）

▼a「故大式（＝藤原高遠）の六七日」

▼b「右金吾（＝藤原懷平）の別当（＝検非違使別当）の事」

▼c「法興院の御八講の事」（目一〇・諸寺八講事）

▼d「公卿の着陣、太禍日を忌むべからざる事」（目）

▼e「着陣の間の作法の事」（目）

▼f「異魚の図の事」（目一六・怪異事）

廿八日、戊子。

▲今日、故大式（＝藤原高遠）の六七日（目×）に当たる（＝五月十六日薨去。仍りて諷誦を修す。〔信濃（信乃（＝信濃布）百端。〕七々日は復日（＝七月節の復日は庚・甲の日）にして、修すべからざるの故なり。

▼b 右金吾（＝藤原懷平）示送りて云はく「別当（＝検非違使別当）の事、去夜、左宰相中将（＝源経房）を以て、左府（＝藤原道長）に申さしむ。許すべき氣有り。但し、疑ふ所、猶、然る歟。」者り。

▼c 今日、法興院八講始。参入するの間、雨脚俄かに降り、門を出でて幾ならざるの程に依り、家に帰る。小時、天晴る。即ち参入す。

彼の院（＝法興院）、焼亡（寛弘八年十月六日・長和元年閏十月十七日）の後、近日、堂舎漸く以て結構す。上達部・殿上人の饗、北堂の東廂に設く。即ち是、法興院の本堂なり。「本堂と謂ふは、是、本願堂也。

誠に焼亡すと雖も、只、本名を称する而已。」但し、其の処相改む。諸大夫の座、同堂の北廊に在り。予（＝藤原実實、未だ参らざる前、大納言公任卿（×饗（＝藤原・参議正光（＝藤原）参入す。次いで参議通任（＝藤原）。一剋許を経て、左府及び参議経房・道方（＝源）参入す。食了りて、相府（＝道長、鐘を打たしむ。件の講演する所は三昧堂也。〔東。〕此の堂一字は焼遺り、自余は尽く以て焼亡す。

講説の後、行香了りぬ。酉剋許、退出す。

▼d 今日、大納言（公（＝公任）云はく「来月三日、新大納言頼通（＝藤原、午剋に初めて陣（＝陣座）に参る。新中納言教通（＝藤原、同日申剋に参入す。光栄朝臣（＝賀茂）云はく『彼の日は太禍日なり。忌避くべし。』者り。左府云はく『二月丙午は大禍なり。而るに貞信公（＝藤原忠平）着座せしめ給ふ（＝延喜八年）。其の例を以て、次々に人々着座す。今、彼の例に依り、敢へて忌むべからず。』者り。

今日、大納言（公（＝公任）云はく「来月三日、新大納言頼通（＝藤原、午剋に初めて陣（＝陣座）に参る。新中納言教通（＝藤原、同日申剋に参入す。光栄朝臣（＝賀茂）云はく『彼の日は太禍日なり。忌避くべし。』者り。左府云はく『二月丙午は大禍なり。而るに貞信公（＝藤原忠平）着座せしめ給ふ（＝延喜八年）。其の例を以て、次々に人々着座す。今、彼の例に依り、敢へて忌むべからず。』者り。

今日、大納言（公（＝公任）云はく「来月三日、新大納言頼通（＝藤原、午剋に初めて陣（＝陣座）に参る。新中納言教通（＝藤原、同日申剋に参入す。光栄朝臣（＝賀茂）云はく『彼の日は太禍日なり。忌避くべし。』者り。左府云はく『二月丙午は大禍なり。而るに貞信公（＝藤原忠平）着座せしめ給ふ（＝延喜八年）。其の例を以て、次々に人々着座す。今、彼の例に依り、敢へて忌むべからず。』者り。

今日、大納言（公（＝公任）云はく「来月三日、新大納言頼通（＝藤原、午剋に初めて陣（＝陣座）に参る。新中納言教通（＝藤原、同日申剋に参入す。光栄朝臣（＝賀茂）云はく『彼の日は太禍日なり。忌避くべし。』者り。左府云はく『二月丙午は大禍なり。而るに貞信公（＝藤原忠平）着座せしめ給ふ（＝延喜八年）。其の例を以て、次々に人々着座す。今、彼の例に依り、敢へて忌むべからず。』者り。

今日、大納言（公（＝公任）云はく「来月三日、新大納言頼通（＝藤原、午剋に初めて陣（＝陣座）に参る。新中納言教通（＝藤原、同日申剋に参入す。光栄朝臣（＝賀茂）云はく『彼の日は太禍日なり。忌避くべし。』者り。左府云はく『二月丙午は大禍なり。而るに貞信公（＝藤原忠平）着座せしめ給ふ（＝延喜八年）。其の例を以て、次々に人々着座す。今、彼の例に依り、敢へて忌むべからず。』者り。

命ずる所然るべし。」者り。

▼今朝、大納言（＝公任）、初参の作法を問送る。婿納言（＝教通）の爲に問ふ所歟。中納言は、東の間、或は二間等の間に着座する也。故左大将済時卿（＝藤原）云はく「大中（＝大納言・中納言）を論ぜず、第二間に着す。」者り。彼の間、人甘心せず。中納言は、猶、東の間を用ふべしと云々。近代、東の間を用ふる耳。又、宜陽殿より陣に移着するの後、先づ奥座に着し、了りて更に外座に移り、申文せしむる歟。将、先づ外座に着して申文せしめ、後に奥座に着する歟の間の事也。左府云はく「先づ奥に着し、次いで外座に着す。」者り。予、中納言に任ずる後の初参の例（＝長徳二年七月廿九日、³²）、左府の命の如し。当時に、思慮を廻らすに、宜陽殿より、先づ外座に着し、申文せしむるの後、奥座に着するが便宜有るべき歟。抑、又此の如きの時、定事無し。予、彼の時、定めて前跡を尋ねて着する所歟。此の趣を以て報ず。又、問ひて云はく「上達部の帯剣、若しくは兵部（＝兵部省）の充文を待つ乎否や。」待たざるの由を報ず。又、公卿の充文の有無、覚えざる耳。

▼美濃の河の異魚の絵図、右兵衛督（兵×）（＝源憲定）の許より、之を送る。魚の長さ六尺六寸、尾を除きて定む。忠重朝臣（＝源）図かしむる所なり。彼の朝臣（＝忠重）の宅の辺の河に、此の魚有り。郎等射取る所と云々。魚の頭、水を吹出すの穴有り。鱗無く、色黒し。魚の頭の如くば、人魚に非ざる歟。魚、頭の穴無しと云々。

・藤原頼通、長和二年六月廿三日、任権大納言。藤原教通、同日、任中納言。

・藤原頼通の権大納言初参着陣・着座：70・71・72
・藤原教通の中納言初参着陣・着座：70・71・72

72 ①『小記目錄』（第一・公卿着座事〈付着陣〉）

長和二年七月三日、頼通（＝藤原）・教通（＝藤原）等の卿の着陣の事。

②『小右記』長和二年七月三日条（+3）

+1「御読経の間の御盆供の事（議有り）」

▼a「御読経の内覧の使の事」

+2「齋宮（＝当子内親王、藤原輔尹の六角町尻宅）の南の小路を渡るに、飛

礫（×礫）を以て打たるる事」（目一七・濫行事）

▼b「御読経の僧名を覽ずる使の事」

+3「権大納言頼通（＝藤原）・新中納言教通（＝藤原）の着陣の事」

三日、癸巳。

御読経の中間の御盆供の事、所見無し。殿上日記を見るべし。彼の日記、藏人頼祐（＝藤原）の許に在り、引見すること能はず。但し、『邑上忠和三年七月十四日御記（＝村上御記）』に云はく「此の日、孟蘭盆。拜せず。内藏寮より醍醐・法性両寺に送る。明日、伊勢大神宮に奉幣すべきの齋を以て也。」相准すべき例歟。但し、『承平元年七月十四日記』に云はく「此の日、秋季（×冬）御読経始。」者り。若しくは御盆供了りて、御読経を始めらるる歟。『貞元三年七月十四日』に「臨時御読経の結願。」者り。結願の後、御盆の事有る歟。

▼御読経の内覧の使の事、『天慶九年三月八日故殿御記（＝清慎公記）』に云はく「季御読経の僧名を定奏す。並びに陰陽寮を召し、吉日を勘申せしむと云々。僧名を相加へ、例に依り、殿（＝藤原忠平）に覽ぜしむ。数刻を経るの後、左少弁在躬朝臣（＝菅原）還来たる。」と云々。件の記等写取り、大納言（＝藤原公任）に遣はし奉る。

内覧は摂政・関白。当時は左僕射（＝藤原道長）、差別無き由、同じく申達す。²²

報じて云はく「昨日の申刻許、右大弁（＝藤原朝経）の許より、今日定申すべきの由を示送る。仍りて即ち参入す。斎宮（＝当子内親王、藤原輔尹の六角町尻宅）の南の小路を度るの間、飛礫（×礫）、雨の如し。縦ひ門前を度るとも、猶、打たるべからざる歟。況や門無きの所、何ぞ其の制有らむ乎。口舌の物忌を破るは、大いに益無き事也。」²³

▼^b「御読経の僧名定申すこと、已に了りぬ。右大弁云はく『奉親（＝但波）云はく「官奏は摂政・関白の時、弁を以て、之を覽ず。而るに当時、史を以て、覽すべきの由命ぜらる。』者り。即ち奉親を召し、之を問ふ。申して云はく『弁を以て覽ぜしむ。』事、已に相違す。奇思ひ侍り。右少弁（＝藤原資業）を以て、覽ぜしめりぬ。発願は十日。三ヶ日也。仍りて十四日に及ぶべからざる歟。』

権大納言頼通（＝藤原）、午刻、宜陽殿・陣座に着す。新中納言教通（＝藤原）、申刻、之に着すと云々。

衛府の督、本陣に着するの時、文書に署する乎否や。請印せしむる乎。如何。人々の説、相異なる。示送るべきの由、四条大納言（＝公任）問送る。文書に署し、印の政を行なふの由、相答へりぬ。計也。教通卿、左衛門陣（＝建春門）に着する歟。

③『御堂関白記』長和二年七月三日条（▲A）

▲A「大納言（＝藤原頼通）・中納言（＝藤原教通）の着陣」

三日、癸巳。

▲A 皇太后（＝藤原彰子）並びに内（＝三条天皇）に参る。暴雨。大納言（＝藤原頼通）、宜陽殿並びに陣座に着す。「申文有り。又、宣旨を下す。」者り。中納言（＝藤原教通）、又、同じく着す。申文等、之に同

じ。昇殿す。仍りて殿上（＝殿上間）・御前（＝三条天皇）等に参る。又、本陣（＝左衛門陣・建春門）に着す。時、申時に、陣に着す。上達部の座の北に、膝突を置く。官人等、文書・硯等を持来たる。名を加ふと云々。□請印。

73①『小右記』長和二年七月十四日条（▼b）

▼a「盆を拝する事」

▼b「新納言（＝藤原懷平）の着陣の事」

▼c「四条納言（＝藤原公任）、定頼（＝藤原）の服假を問ふ事」

十四日、甲辰。

▼a 盆を拝し、寺々（東北院・道澄寺・勧修寺（×観修寺）・禅林寺・仏性院・天安寺・清水寺）に頒送る。諷誦を珍皇寺に修す。皆是、例也。

▼b 新納言「懷平（＝藤原）（＝右衛門督）、明日、初めて陣（＝陣座）に参る。先づ奏慶せしむべし。但し、宜陽殿並びに陣に着する、亦、申文せしむる作法、問送らる。一々、答対し訖りぬ。「車及び雑具等を借送らむ。下簾に至りては、右相府「顯光（＝藤原）」、人を以て示送られて云はく『右大將「実資（＝藤原）」、任中納言の日（＝長徳二年七月廿日。着陣は廿九日）、予（＝顯光）の下簾を用ふ。彼の例を思ふに依りて送るべし。』者り。仍りて彼の下簾を用ふべき」の由、納言（＝懷平）の消息有り。「車及び雑具等は、明日、送り奉るべき也。牛に至りては用ふべからず。」者り。

▼c 四条納言（＝藤原公任）の消息に云はく「定頼（＝藤原）、相撲に参らむと欲するの心有り。外祖父（＝昭平親王）の假の内也（＝六月廿八日薨去。半減して、召有らば、参るべき乎。祖父（＝昭平親王）、山林に

在り、其の穢来たらざるの故なり。」者り。予(＝実資)報じて云はく「外祖父母の服は三月、假は卅日也。母、必ず穢るべきに依り、子、又(×父)、穢を忘(×忌)るべからず。仍りて卅日の假を給ふ。又、半減の召無し。縦ひ謬りて半減の召有りとも雖も、参入すべからざるの者也。又、外祖父、深山幽谷に在るの時(×使)と雖も、其の穢を忘(×忌)るべからず。其(々)の穢(々)、子、又、忘(×忌)るべからず。若し、内に、穢を禁めしめば、外聞、便無かるべし。不義と謂ふべし。文法に背くに似る歟。参らざるを以て、善と為すべし。必ず謗難有る歟。如何。」者り。大納言(＝公任)報じて云はく「尤も然るべし然(々)るべし(々)。」者り。

(注1) ▼c 「子父不可忌穢」「不可忌其穢」「々々子又不可忌」の「忌」を大日本古記録本は「忘」とする。

74①『小記目錄』(第一五・公卿着座事(付着陣))

同年同月(＝長和二年七月)十五日、懷平卿(＝藤原)の着陣の事。

②『小右記』長和二年七月十五日条(+1、▼c)

+1「懷平卿(＝藤原)の着陣の事」(目)

▼a「中宮(＝藤原妍子)の御座・養九夜の祿の事」

▼b「中宮の御座・養九夜の雑物等の事」

▼c「中納言懷平の着陣の事」

今日已刻、新納言(＝右衛門督「懷平(＝藤原)」参内す。巳・午時の間、宜陽殿・陣(＝陣座)等に着すべし。車並びに雑具・厩の馬二疋、彼の御消息に依りて遣はし奉る。下簾、右相府「顕光(＝藤原)」より志すべきの由と云々。仍りて下簾を奉らず。新納言、右府(＝顕光)の下簾を見送りて云はく「太だ別様にして懸用ふべからず。」

善き下簾を送るべし。」者り。仍りて付廻して遣はし奉る也。

▼a 資平(＝藤原)云はく「昨日の中宮(＝藤原妍子)の御座・養太后宮(＝藤原彰子)儲けしむる所也。左相国(＝藤原道長、祿を加ふ。一日、思失して行なはざるの祿歟。」と云々。「殿上人の太樹、皇太后宮の上達部の料の祿を以て給ふ所歟。」と云々。管絃・和歌等有り。諸卿の参入、三夜の如し。

▼b 中宮属良明(＝宇治)云はく「昨日の皇太后宮の御養座の雑物。御膳は、銀の筥一口、汁器二口、水埥一口、窪器八口、四種四口、馬頭盤に箸四枚・匕二枚、盤廿四枚。御盞の懸盤は沈香。」御膳物は、大夫俊賢(＝源)、料の銀を給はりて奉仕す。皇子(＝禎子内親王)の御衣・襦袢、沈香の龜二に納め、机二脚に居う。権大夫教通(＝藤原)奉仕す。絹二百疋、紙千帖、大樹若干、所々の饗、屯食(＝純食)卅具。十具に盛る。」

▼c 資平(＝)来たりて云はく「中納言(＝懷平)初めて参る。先づ階下を経て奏慶す。午刻を以て、宜陽殿・陣に着す。先づ奥座。申文の事に臨み、外(＝外座)に着して申文せしむ。左大弁(＝源道方)了りて宣旨を給ふ。外座。除目(＝六月廿三日)の後、数日に及ぶ。仍りて慶賀を所々に申すべからざるの由、左府(＝道長)の命有り。仍りて只、内(＝三条天皇)に奏し、皇后宮(＝藤原城子)・東宮(＝敦成親王)に啓せず。何ぞ況や陣外においてを乎。明日、只、左府の許に参る也。拜礼を致すべからず。」者り。此の事、意を得ず。奏慶し、何ぞ他処に申さざらむ乎。況や宮中の宮々においてをや。此の如く、万事、相府(＝道長)の命に随ふ歟。今日、平安にして、風雨の妨無し。参内せらるるの事、申達し了りぬ。

・藤原懷平、長和二年六月廿三日、任權中納言。

・藤原懷平の權中納言初參着陣：73・74

75 ①『小記目錄』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝長和二年）十一月十日（戊戌）、左中將資平（＝藤原）、初めて陣に參る事。

・藤原資平、長和二年十月廿三日、任左權中將。

76 ①『小右記』長和三年（一〇一四）四月廿日条（▼d）

▼a「借物等を返す事」

▼b「來月の行幸の事」

▼c「解陣」

▼d「新中納言（＝藤原賴宗）の着陣」

廿日、乙亥。

▼a 左中弁（＝藤原經通）・皇后宮亮（＝源方理）等來たり、借物等（＝賀茂

祭で用いたものか）を返す。

▼b 中將（＝源雅通カ）云はく「來月の行幸（＝土御門第の競馬行幸）定まら

ずと云々。東宮（＝敦成親王）の辺に於いて聞く所也。」

▼c 右衛門督「懷平」（＝藤原）示送られて云はく「昨日酉剋許、召有

りて參内す。解陣（＝賀茂祭解陣）の事を行なふ。」者り。

▼d 今日、新中納言賴宗（＝藤原）、初めて陣座に着すと云々。

・藤原賴宗、長和三年三月廿八日、任權中納言。

77 ①『小右記』長和三年六月三日条（▼b）

▼a「内府（＝藤原公季）の物忌」

▼b「左大弁（＝源道方）の着座」

三日、丁巳。

▼a 資平（＝藤原）云はく「内府（＝藤原公季）に參る。御物忌に依り、門外に於いて、事由を申しさしむ。物忌を過ぎして參入すべき由を命ず。」者り。

▼b 大外記敦賴朝臣（＝菅野）云はく「昨日午剋、左大弁道方（＝源）着座す。」

②『公卿補任』長和三年条

參議源道方「六月二日、丙辰。午時、着座す。」

・源道方、長和元年十二月十六日、任參議。

78 ①『小記目錄』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝長和）三年八月廿一日（＝甲戌）、公卿の着陣の事。

79 ①『小右記』長和五年（一〇一六）三月廿三日条（▼a）

▼a「參議朝經（＝藤原）の着座」

▼b「犬死穢」

▼c「帶刀試に參議公信（＝藤原）を召遣はす事」

▼d「一夜の濫行の事」

+1「帶刀試の事」

▼e「上皇（＝三条）、寢殿に移御すべき事」

+2「來たる廿六日の山陵使、内裏の穢に依りて延引する事」

廿三日、丁卯。

▼a 參議朝經（＝藤原）着座す。「右大弁。巳剋。」

▼b 頭中將（＝藤原資平）云はく「昨日、犬死穢有り。左衛門陣（＝建春門）なり。」

▽c 齋院の修理等の事を申す次に云はく「今日、右近馬場に於いて、帶刀試有るべきの由、宮（＝東宮敦親王）より奏せらる。」其の所に遣はさむが為に、参議公信（＝藤原）を召遣はしりぬ。余（＝藤原実資）退出す。途中、公信宰相、相（々）遇ふ。

▽d 院（＝三条太上天皇）に参る。摂政（＝藤原道長）、大納言斉信（＝藤原）・頼通（＝藤原）、中納言俊賢（＝源）・懷平（＝藤原）・教通（＝藤原）・経房（＝源）・実成（＝藤原）、参議道方（＝源）祇候す。摂政、殿上（＝枇杷殿）に於いて、雑事を談ぜらるる次に、一夜（＝三月廿日）の濫行の事有り。重く戒めらるべきの気色有り。少将命婦（＝檢非違使左衛門尉藤原宗相の妻、皇太后宮藤原彰子の女房）は、引落とされず、只、車の簾を引落とす。子童・陪従の女、車より落つ。車に付するの男の頭を打破る。

又、云はく「今日の帶刀試、亮（＝藤原周頼）一人の外、人無し。大進二人は任国なり。馬場に於いて執筆し、並びに帰参す。本宮（＝東宮）、兵等給ふ事、大進の最たる也。如何。」者り。按察斉信云はく「兵に至りては、先日、給ひ了りぬ。」と云々。

▽上皇（＝三条）、戌・亥時の間、寢殿（＝枇杷殿）に移御すべし。寢殿（々々）の御装束の事、摂政及び院司等行事す。下官（＝実資）、思ふ所は、院司に非ず、亦、近習に非ず。時刻を待候ずるは、抛る所無かるべし。仍りて一兩の院司に触れ、晩景に罷出づ。（殿上の饗、居うる間也。）

外記文任（＝巨勢）云はく「廿六日の山陵使（＝即位奉告使）、内裏の穢に依りて延引す。」者り。

②『左経記』長和五年三月廿三日条（▽d）

▽a 「帶刀試の事」（目）

▽b 「院（＝三条太上天皇）、寢殿に遷らしめ給ふ事」

▽c 「左府（＝藤原道長）、故業遠朝臣（＝高階）の宅に渡らしめ給ふ事」

▽d 「右大弁（＝藤原朝経）の着座」

廿三日、丁卯。

△a 参内す。東宮亮周頼朝臣（＝藤原）、摂政殿（＝藤原道長）に参る。頭（＝藏人頭藤原資平）をして、帶刀試を奉るべきの由を奏せしむ。即ち、宰相一人（＝藤原公信）を召し、其の所（＝右近馬場）に遣はすべきの由を仰せらる。（内豎を差はし、藤宰相（＝公信）を召さしめ（×）之、帶刀の手番の所に罷るべきの由を仰（□）す。）

▽b 晩景に及び、（案）院（＝三条太上天皇）に参る。今日、北台（＝枇杷殿北対）より、寢殿に遷らしめ給ふ。仍りて上達部・殿上人、多く院に参入す。庁、饗・屯食（×長飯）・衝重等を儲け、殿上・女房・所々等に給ふ。暗に及び、内に帰参る。

▽c 左府（＝道長）、故業遠朝臣（＝高階）の土御門宅に渡らしめ給ふ。件宅、彼の後家、左府に転ずること、已に畢りぬ。而るに吉日為るに依り、今度、始めて渡り給ふ也。但し、饗饌の用意等無（無×）し。御共に参る。即ち内に帰参る。

△d 伝聞く。「右大弁（＝藤原朝経）、今日已剋、着座せらる。」と云々。

大弁（＝朝経）退出せらるるの後、権左中弁（＝藤原重尹）並びに史等、結政所に参着す。官掌等、大弁の御共に参入す。仍りて史生時成（＝伴力）、官掌代と為し、結政を始めらると云々。件の事、頗る不快なり。大丞（＝朝経）の御着座は已剋也。已後、結政を始めらるるは如何。

③『公卿補任』長和五年条

参議藤原朝経「三月廿三日、丁卯。巳時、着座す。」

・藤原朝経、長和四年二月十八日、任参議。

80 ①『御堂関白記』長和五年五月十三日条(▲C)

▲A「官所充」

▲B「祈年穀奉幣使定」

▲C「親信宰相(≡平)の着陣」

十三日、丙辰。

▲A 右府(≡藤原顯光)、陣(≡陣座)に参る。官所充の文を申さしむと云々。

▲B 祈年穀奉幣使を定申すべき由を仰す。経頼(≡源、使の定文並びに日時勘文等を持来たる。即ち下給ふ。其の日は、廿一日・廿七日等也。廿一日を用ふべき由を仰す。

▲C 戌時を以て、親信宰相(≡平)、初めて陣に参ると云々。「腰病有り、人に扶けらる。」者り。

②『左経記』長和五年五月十三日条(▽c)

▽a「官所充」

▽b「祈年穀奉幣使定」

▽c「平宰相(≡平親信)の着陣」

十三日、丙辰。

参内す。右府(≡藤原顯光)、左仗(≡陣座)に於いて、所充の文を申さしめらると云々。

▽b 摄政殿(≡藤原道長)仰せられて云はく(々々)「祈年穀奉幣使定めらるべき由、右府に示すべし。」者り。仍りて陣(≡陣座)に出で、仰旨を申す。即ち命を蒙り、陰陽寮に問ひ、日時勘文を進らしむ。入夜、定められり、余(≡源経頼)をして之を奏せしむ。奏し了り、

即ち下して奉る。「廿一日(×筈)を以て行(×仰)なふべし。」者り。仰せて云はく「使々、故障を申さしめず、慥に以て催行なふべし。」者り。

▽c 戌刻、平宰相(≡平親信)、始めて陣座に参着すと云々。

・平親信、長和四年十月廿八日、任参議。

81 ①『御堂関白記』寛仁元年(一〇一七)十二月十日条(▲AC)

▲A「摄政(≡藤原頼通)の着陣の申文の事」

▲B「車を返送する事」

▲C「摄政の着陣」

十日、甲戌。

▲A 摄政(≡藤原頼通)来られて云はく「今日、着陣すべし。」者り。余(≡藤原道長)云(云々)はく「早く着せらるべからば、唯、申文無きが宜しき歟。後日、有るべからば、摄政と為すべき官符、引きて宣するは如何。」

▲B 車を送ること、今日あり。昨日の記に有り。

▲C 摄政、宜陽殿(≡一条院東対)に着す。次いで陣(≡陣座)の奥の小畳の座に着すと云々。

(注1) ▲Bは、藤原道長が尾張国に下向する中宮藤原妍子の御乳母中務(藤原儼子力)に贈った車を返却してきたことをいう。

②『左経記』寛仁元年十二月十日条(▽ab)

▽a「摄政殿(≡藤原頼通)着陣せしめ給ふ事」(目)

▽b「御前(≡前驅)の事」

▽c「御元服(≡後一条天皇)の日時勘申」

十日、甲戌。

▽早旦、摂政殿（＝藤原頼通）に参る。次いで結政所に参る。事（□）、未だ畢らざる以前、召有りて参内す。申剋、摂政殿着陣せしめ給ふ。〔今朝、仰有り、宜陽殿に御座を敷かしむ。西屋の東西南端を以て、宜陽殿と為す。〕大納言以下の座、東西に相分け、之を敷かしむ。

〔南上对座。〕摂政殿の御座、両面の半畳を以て、北面に敷かしむ。〔横座。皆、長筵を以て、下敷と為す。〕先づ宜陽殿に着す。頃之、左仗座（＝陣座）に移着す。〔奥座に着す。申文無し。〕

頃之、敷政門より退出す。公卿、相従ひて退出せらる。〔摂政、着座せしめ給（給×）ふ間、他の公卿、陣腋に立たる。〕右衛門陣より出で給ふ間、外記・史等進出づ。御前（＝前驅）、行なふ気色有り。外記・史等留まり、右衛門陣の座の前に跪く。外記、召使（々使）を召す。史、官掌を召す。各留まり畢りぬ。召使・官掌の御前、常の如し。又、門内の列立、大臣召の日の儀の如し。

△今日、頭右中弁（＝藤原定頼）、仰を蒙り、吉平（＝安倍）・文高（＝惟宗）・吉昌（＝安倍）等を召し、明年の御元服（＝後一条天皇）の日時を勘申す。奏聞す。正月三日。時は申二剋と云々。

③『日本紀略』寛仁元年十二月十日条

十日、甲戌。申刻、摂政内大臣（＝藤原頼通）、始めて着陣す。

・藤原頼通、寛仁元年三月四日、任内大臣。同月十六日、補摂政。
・藤原頼通、摂政の初参着陣・着座：⑧1・⑧2・⑧3

⑧2①『小右記』寛仁元年十二月十一日条（▼a）

+1「御元服（＝後一条天皇）有るべき由の伊勢奉幣（伊世奉幣）の事」
「御元服有るべき由の伊勢奉幣（伊世奉幣）の事（御元服の間、

宴会有るべき哉否やの事」（目二・御元服事）
+2「御元服の間、宴会有るべき哉否やの事」
▼a「摂政（＝藤原頼通）の着陣」

十一日、乙亥。

+1御元服（＝後一条天皇、寛仁二年正月三日）の由を伊勢（＝伊勢大神宮）に申さる。今日、月次祭使に付せらる。前例有りと云々。

+2太相府（＝藤原道長）、章信朝臣（＝藤原）を以て、正暦の御元服（＝正暦元年正月五日、一条天皇の元服）の事を問はる。其の中の宴会の有無の事也。輕服に依りて参らざるの由を申さしむ。彼の時、気色を撰政（＝藤原兼家）に候ぜしむ。参るべからざるの命を承はるに依る也。但し、朝拝無し。又、宴会を聞かず。七日節会に、賀表の由、承はる所也。又、此の由を申さしめ訖りぬ。

△大外記文義朝臣（＝小野）云はく「昨日、摂政（＝藤原頼通）着陣す。〔申剋〕退出する間、御前（＝前驅）有り。別宮（＝一条院）に御すの間、例無きの由を申す。仍りて相計りて奉仕す。」者り。

⑧3①『御堂関白記』寛仁元年十二月廿七日程（▲A）

▲A「官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）に、椅子を立つる事」

▲B「服御・常膳を減する詔の覆奏」

▲C「摂政（＝藤原頼通）の上表」

▲D「右近陣の公卿の座を左近陣に遷す事」

▲E「尚侍（＝藤原威子）を御匣殿別当に補する事」

廿七日、辛卯。

▲A内より罷出づ。午時を以て、官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）に、椅子を立つ。

服御(×御服)・常膳を減ずる詔(十二月廿二日)の覆奏に、判を加ふ。

摂政(藤原頼通)、表(辞内大臣上表)を献ると云々。中務(中務省)に付す。

此の日、右近陣の上卿(公卿)の座、左近陣に遷す。是、御元服

(後一条天皇、寛仁二年正月三日)の儀に依る也。

尚侍(藤原威子、御匣殿別当に補するに依り、女官等来たる。禄を賜ふ。

②『左経記』寛仁元年十二月廿七日程(▽d e)

▽a「摂政殿(藤原頼通)の上表」

▽b「外記 政」

▽c「右近陣の座を左近陣に移さる事」(目)

▽d「摂政殿(藤原頼通)の着座」

▽e「太政大臣(藤原道長)の椅子を立つる事」(目)

廿七日、辛卯。

摂政殿(藤原頼通)に参る。(申剋を以て、上表(辞内大臣上表)の事有るべしと云々。)

次いで結政所に参る。政(外記政)有り。(上(上卿)は侍従中

納言(藤原行成)。

事畢り、上官等を率ゐ、陣に参らる。今日未剋、右近陣の上達部の座を左近陣に移さしむ。漏刻の具、鈴印・鎰等の辛櫃を同じ左近陣の方に運置かしむ。筵・畳等の類、本陣、之を儲く。件の陣、東方に移さる事、是、明年の御元服(後一条天皇、寛仁二年正月三日)の事に依る也。(以)織部司の南門に下り、車より下(一)り、司の中を通り、東門より出で、左衛門陣より入る。

申剋を以て着座す。官厨家、饗饌を儲く。(内豎等、兼ねて大盤を立て、肴物を居う。)先づ申文有り。(解由・鎰の文等。)次いで余(源経頼)、勸盃す。(史、瓶子を取る。)次いで御汁物を羞む。

「外記・史等、之を役送す。」事畢り、各分散す。今日、摂政殿、上表せしめ給ふ。仍りて此の座に於いて、宣旨を下されず。

今日午剋、大殿(藤原道長)の御椅子、官(太政官庁)・外記庁に立つ。並びに南所に、御座を敷くと云々。是、本家の仰に依り、敷立つる所也。太政大臣、椅子を立て、座を敷くの時、已次の大臣の椅子・座、皆、北列(×例)に加ふる也。

藤原道長、寛仁元年十二月四日、任太政大臣。

④①『御堂関白記』寛仁二年(一〇一八)三月十一日程(▲B)

▲A「試案(石清水臨時祭)」

▲B「源大納言(源俊賢)の着座」

▲C「土御門第に渡るべき雑事を定むる事」

十一日、甲辰。

此の日、試案(石清水臨時祭)。仍りて参入す。申時許、事初む。候宿す。

源大納言(源俊賢)、申時を以て着座すと云々。

土御門に渡るべきに、雑事を定む。

(注1)▲Cは、女御藤原威子が十月五日に内裏から土御門第に退出すること指す(十六日に立后)。

②『公卿補任』寛仁二年条

権大納言源俊賢「三月十一日、甲辰。申時、着座す。」

・源俊賢、寛仁元年三月四日、任権大納言。

85 ①『御堂関白記』寛仁二年三月十三日条(▲B)

▲A「臨時祭(＝石清水臨時祭)」

▲B「右衛門督(＝藤原実成)・新中納言(＝藤原能信)の着座」

▲C「小式部(＝美濃守藤原泰通の妻、藤原嬉子の乳母)、下向の由を申す事」
十三日、丙午。

▲臨時祭(＝石清水臨時祭)、常の如し。使は知光朝臣(＝藤原)。摂政(＝藤原頼通)、庭座に着す。盃を取らず、花(＝挿頭花)を取る。申時、使立つ。見物す。摂政・按察(＝藤原齊信)等同車す。

▲此の日、酉時、右衛門督(＝藤原実成)着座す。丑時、新中納言(＝藤原能信)、又、着座すと云ふ。

▲小式部(＝美濃守藤原泰通の妻、藤原嬉子の乳母)、下向の由を示すに依り、千子(＝藤原嬉子)、手宮等を授く。母々(＝源倫子)、物を給ふ。

②『公卿補任』寛仁二年条

権中納言藤原能信「三月十三日、丙午。丑時、着座す。」

③『公卿補任』寛仁二年条

権中納言藤原実成「同日(＝三月十三日)。酉二点、着座す。」

・藤原能信、寛仁元年八月卅日、任権中納言。藤原実成、長和四年十月十八日(廿八日)、任権中納言、同五年十一月、服解、寛仁元年正月廿四日、復任。

86 ①『左経記』寛仁三年(一〇一九)十二月廿八日条(▽a b d g)

▽a「衰日に、始めて結政所に参る事」

▽b「外記政」

▽c「南所申文」

▽d「摂政殿(＝藤原頼通)、関白の宣旨を蒙り、始めて参内する事」

▽e「官奏」

▽f「関白殿(＝頼通)、土御門殿に渡らしめ給ふ事」

▽g「大納言(＝藤原教通)・新宰相(＝藤原経通)の着陣」

廿八日、庚戌。天晴。

▽a 転任の後、始めて結政所に参る。今日、衰日也。然りと雖も、侍従中納言(＝藤原行成、左中弁と為るの時(＝長徳二年八月五日)、衰日に着座せらる。又、左大弁(＝源道方、権左中弁に転ずるに(＝長保三年八月廿五日)、衰日に初めて参る。此等の例に依りて参着する也。先是、吉書あり。次いで吉書に署す。

▽b 頃之、侍従中納言、庁(＝外記庁)に着し、申文を行なはる。

「左大弁参着せらる。納言(＝行成、帥を兼ねる(＝寛仁三年十二月廿一日後、始めて着せらるる也。余(＝源経頼)並びに少納言・外記一人・史三人、庭中に列立す。(先例は、弁一人を立つるの時、外記上(＝上卿)の許に請申す。仍りて之に立つ。而るに、今日、定有り、請申(＝法申)さず。右少弁(＝藤原義忠)参ると雖も、新任(＝寛仁三年十二月廿一日)に依りて立たざる歟。」申文畢り、請印有り。

▽c 次いで南(＝南所)の申文等有り。

▽d 次いで引きて陣(＝陣座)に参る。摂政殿(＝藤原頼通)、去る廿二日を以て、関白の宣旨を蒙る。今日、始めて参内す。奏慶せず、御前(＝後一条天皇)に参らしめ給ふ。「是、前例と云々。」次いで頭弁(＝藤原定頼)、御宿所(＝頼通の直廬)に於いて、吉書を申す。「祭の請奏と云々。」陣に進み、上卿に下す。「主上(＝後一条天皇)の御前に奏せず。」

次いで官奏有り。「御宿所に於いて、此の儀有り。更に御所に進

らず。只、摂政の時の如し。」

▽a 関白殿（＝頼通）、晩に及び、退出せしめ給ひ、土御門殿（土×）に渡らしめ給ふ。

今日、大納言（左大将（＝藤原教通）・新宰相（＝藤原経通）、着陣せらる。

（注1）増補史料大成本は、▽aに「付衣成道方仍」と傍書がある。

（注2）源経頼は寛和元年（九八五）の出生で、この年は三五歳であり、衰日は辰・戌の日。

・藤原教通、寛仁三年十二月廿一日、任権大納言。藤原経通、同日、任参議。藤原頼通、同日、補関白。源経頼、同日、任右中弁。

87①『左経記』寛仁四年（一〇二〇）二月十一日条（▽a）

▽a「加階の後、先づ官（＝太政官）の結政に着する事」

十一日、癸巳。天晴。

▽a 官司（＝太政官庁）に参る。列見に依る也。加階の後、須く外記の結政に参るべきの後、官（＝太政官）の結政に着すべき也。而るに去る六日、慮外に穢に触る。仍りて前日、侍従中納言（＝藤原行成）に申合せて云はく「穢、十日に及ぶべし。十一日は宜しき日為りと雖も、列見に依り、官の結政を装束す。仍りて外記の結政に参るべからず。之を如何為む。」命ぜられて云はく「結政は□、吉日に着すべき也。先づ官の結政に着するの後、更に日を並び、外記に着すべき也。」者り。仍りて参入する所也。

西廊に着して結政す。少納言、請印の文を見る。次いで史、庭中の床子に於いて、申文を結ぬ。一々、南方に渡る。次いで外記一人、南に渡り了りぬ。次いで余（＝源経頼）、起座せしめ□、□に渡る。

〔五位の弁、申文に立つれば、少納言、先づ起座すべき歟。〕次いで

少納言基房（＝藤原）立つ。次いで右少弁義忠（＝藤原）立つ。次いで少納言、版位に進立つ。余、次いで右少弁。次いで外記・史等、後の版に立つ。上（＝上卿）、弁・少（＝少納言）を召す。共に唯す。次

いで外記、共に唯す。次いで余、堂の床子に進着す。次いで少納言、次いで右少弁。（三段。揖すること、例の如し。）云々了りぬ。次第に退出す。次いで請印す。次いで二省（＝式部省・兵部省）列見すと云々。次（×）いで朝所に着す。一献は左大弁（＝源道方）。二献は

右大弁（＝藤原朝経）。三献は左中弁（＝藤原定頼）。四献は余。次いで宴座に着す。一献は右大弁（大將）、次酌は左中弁。二献は右大弁、次酌は余。三献は少納言信通と云々。穩座に着す。一献は左大弁。二献は右大弁。三献は左中弁。皆、常の如し。

・源経頼、寛仁四年二月五日、叙従四位上。

・源経頼の従四位上加階後初参結政所：87・88・89・90

88①『左経記』寛仁四年二月十六日条（▽a）

▽a「加階の後、始めて結政所に着する事」

▽b「始めて陪膳する事」

十六日、戊戌。降雨。

▽a 加階の後、今日、始めて結政所に着す。〔吉書を見る。又、着す。〕

次いで陣に参る。次いで殿上の方に参る。今日、始めて陪膳す。晩に及び、帰宅す。

89①『小記目録』（第一五・公卿着座事〔付着陣〕）

寛仁四年二月廿三日、大納言教通（＝藤原）の着座の事。

②『左経記』寛仁四年二月廿三日条（▽a b c d）

▽a「太政官庁の着座」

▽b「左大将（＝藤原教通）の着座」

▽c「官掌・使部等に饗禄を賜ふ事」

▽d「外記庁の着座」

廿三日、乙巳。陰雪。

▽a「早旦、頼方（＝藤原）の宅に渡る。〔中御門（＝中御門大路）より南、堀川（＝堀川小路）より西に、宅有る也。〔少門〕未剋に及び、天氣清明なり。西二剋、主計頭吉平（＝安倍）、反問に來向す。〔吉平に薄色の織物の褂一重を被（×散く）。〕官司（＝太政官庁）に参る。〔所々の辻々、使部等、各分立ち、往還の雑人を追却す。〕中御門（＝待賢門）より入り、八省（＝朝堂院）の東の道を経て、官司の西門より入る。西庁の北の壇の下に於いて、靴を着す。西面の南戸より入り、立部の南、並びに少弁の兀子の後を経て、兀子の下方より着座す。〔西三剋。〕有暫、起座して揖す。」

▽b「本道より退出するの間、左大将（＝藤原教通）着座せむが為に、西門より参入し給ふ。仍りて暫く使所に留立ち、過ごし奉りて退出す。〔使部等、所所に分立ち、雑人を追掃ふこと、始の如し。〕官掌等、大将（＝教通）の御共に供奉す。仍りて余（＝源経頼）の共に來たらず。」

▽c「使所に於いて、官掌・使部等に、饗禄を賜ふ。〔官掌四人・弁侍二人・時申す使部二人の饗、各一前。〕官掌四人は白絹各一疋。弁侍二人は赤絹各一疋。時申（×持申）す使部二人は信濃布（信乃布）各二段。使部等の中、屯食二具。米十石。」今日、巡方を用ふ。左大

▽d「將、八省の東廊に、御休幕を儲け、暫く休息す。」

次いで庁（＝外記庁）の座に着す。

③『公卿補任』寛仁四年条

権大納言藤原教通「二月廿三日、乙巳。酉二点、着座す。」

・藤原教通、寛仁三年十二月廿一日、任権大納言。

・藤原教通の権大納言初参着陣・着座：89・90

90①『左経記』寛仁四年二月廿八日条（▽a）

▽a「外記政」

廿八日、庚戌。

▽a「結政所に参る。政（＝外記政）有り。〔左大将（＝藤原教通）、御着座の後、今日、始めて政に着す。余（＝源経頼）、又、始めての結政等に参る。先づ申文、次いで請印。次いで、南所に着す。次いで、陣（＝陣座）に参る。次いで退出し、入道殿（＝藤原道長）に参る。晩に及び、帰宅す。」

91①『左経記』寛仁四年十二月十日条（▽a b）

▽a「着座の事」〔目〕

▽b「源中納言（＝源道方）・権大納言（＝藤原行成）の着陣」

十日、丙戌。晴。

▽a「結政所に参る。〔転任の後、今日、始めて参る。両大弁（＝藤原朝経・藤原定頼）已下、今日、皆参る。〕政（＝外記政）無し。事畢り、余（＝源経頼）、陣（＝陣座）に参る。」

▽b「源中納言（＝源道方）・権大納言（＝藤原行成）、今日、陣座並びに宜陽殿に着せらると云々。〔先づ宜陽殿に着し、次いで陣座に着す。〕

余並びに右中弁（＝藤原章信）・左少弁（＝藤原義忠）、相共に南所に着す。食了り、各退出し了りぬ。

・源経頼、寛仁四年十一月廿九日、任権左中弁。源道方、同日、任権中納言。藤原行成、同日、任権大納言。

・源道方の権中納言初参着陣・着座：[91]・[96]

・源経頼の権左中弁初参着座：[91]・[92]・[93]・[94]

92 ①『左経記』寛仁四年十二月廿六日条（▽c）

▽a「上卿一人、政を行なふ事」（目）

▽b「故中務親王（＝具平）の御二男（＝源師房）の元服の事」（目）

▽c「宣旨に依る着座の事」（目）

廿六日、壬寅。晴天。
結政所に参る。政（＝外記政）有り。〔上（＝上卿）は左大将（＝藤原教通）。安和以後、上卿一人、政を行なふの例無し。然而（×而然）、進る書有るに依り、先例を尋ね、一人行なはる。〕政畢り、上（＝教通）、南所に着せず。〔物忌と云々。〕内に入る。五位の弁、出納の如し。上、一揖す。弁・少納言・外記・史、一同に答へ、之に揖す。官掌、本座に帰る。上卿の御出の由を申す。了りて左中弁（＝藤原重尹）並びに余（＝源経頼）、次第に起座す。弁の前に到りて出立ち、一揖す。〔五位の弁は、上卿、内に入るの後、左衛門陣（＝建春門）の北の架の戸の前に列立す。外記・史等は、屏の前に列立す。弁・少納言、先に立つ所也。〕弁・史・外記、一同に答へ揖す。了りて次第に内に入る。腋の床子に着す。

次いで関白殿（＝藤原頼通）に参る。故中務卿宮（＝具平親王）の二男（＝源師房）元服す。〔関白殿の養子也。今日、字を改名し、並びに姓

（×経）（＝源）を給ふ。〕主客着座す。盃酌、両三巡了りぬ。剋限に及び、〔亥と云々。〕冠者・理髪の座等を敷く。〔昔円座。冠者は、地下の四位、之を取る。理髪は、地下の五位、之を取る。〕次いで冠者（＝師房）着座す。〔直衣束帯。〕次いで調度等を置く。〔冠、柳宮に入れ、右方に置く。泔坏、柳宮に入れ、同じ方に置く。櫛巾並びに本結・紙・刀等、宮蓋一合に入れ、左方に置く。五位三人、各、之を取る。〕次いで理髪着座す。〔大宮亮済政朝臣（＝源）。〕次いで指燭の者二人進居す。〔殿上の五位二人（＝源隆国・藤原良頼）。〕次いで理髪すと云々。例の如し。先づ指燭の者立つ。次いで冠者。調度を撤す。次いで円座を撤す。〔翦合。〕次いで加冠〔右大将（＝藤原実資）〕の前物を居う。〔高坏。地下の五位、陪膳す。〕理髪の前物を居う。〔机二。〕加冠・理髪着座す。〔此の間、冠者、衣を改め、庭に進み、之を拝す。〕三坏畢り、本座に帰る。一両巡の後、被物、差有り。次いで牽出物あり。〔馬一疋。〕事畢り、冠者、御堂（＝藤原道長）に参らる。人々退出す。

余、明日、仰に依りて着座すべし。方忌を避けむが為に、〔住宅より官司（＝太政官庁）、西方に当たる。仍りて近來、大將軍の遊行の方也。〕室町の宅に渡る。

93 ①『左経記』寛仁四年十二月廿七日条（▽a）

▽a「着座の事」

廿七日、癸卯。降雨。

辰三刻、八省（＝朝堂院）の東廊に着す。休幕、所司、之を儲くと云々。門を出づるの間、並びに待賢門（×泰賢門）の中、往還の雑人等を掃はしむ。但し、途中は制止せず。宣旨に依りて着座するの時、

重き慎を致さざる故也。有頃、右中弁〔章信（＝藤原）〕・右少弁〔頼明（＝藤原）〕参会す。有頃、已二刻を打つ。官〔太政官庁〕の西門より入る。廊の下に於いて、靴を着す。壇上より行く。西庁の西面の北戸より入る。立部の北の妻、並びに少弁の元子の後を経て、元子に着す。座席温まらざるの間、起ちて揖す。本道より退出す。室町に帰る。次いで高倉に帰りて宿す。官の官掌並びに使部五六輩陪従す。然りと雖も、宣旨に依りて着座するの時、物を給はずと云々。仍りて、之を給はず（不）。明日、朝庁に着すべきの由、下部等に仰せ、供奉の所司等を催さしむ。

94 ①『左経記』寛仁四年十二月廿八日条（▽a）

▽a「朝庁の事」（目）

▽b「内侍所の御神楽の事」（目）

廿八日、甲辰。晴。

未明、官司〔太政官庁〕に参る。靴を着し、西廊の床子に着す。

〔西上北面〕所司具し了りぬ。史、先づ着座す。〔西面の南戸より入る。〕次いで、余〔源経頼〕着座す。次いで、右中弁〔藤原章信〕

着座す。民部録、南門の前の屏の東を経て、版位に進立ち、云々と

申す。堂上の作法、例の如し。事了り、起座す。出立ち畢り、各

退出す。次いで、関白殿〔藤原頼通〕に参る。頃之、帰宅す。

今夜、内侍所の御神楽有りと云々。召す人は十六人。〔地下の

殿上人、歌笛に堪ふる者（一）〕近衛司の者は七人。〔人長、此の中

に在り。〕内侍は二人。〔一人は典侍、一人は掌侍。〕博士は〔士

二人。〕閹司は六人。女官は十六人。下は四人。賢所の御前物は十

二盃。〔菓子四盃、干物四盃、飯四盃。〕已上の物、本自、御前に有

り。八足の机に居う。御酒、酒殿を召し、之を用ふ。内侍陪膳す。博士、御盤を取ると云々。御幣十帖、折櫃〔×柳櫃〕に納れ、之を奉る。先例は四帖と云々。饗は、内侍二人の前、〔衝重各二合。二種物。〕博士〔士〕二人、〔前に同じ。〕閹司並びに女官等、〔各衝重一合。一種物。〕召す人〔人×〕近衛司等。〔衝重各二合。二種物。〕然るべき人々の禄は、殿上人、之を取る。禄は、典侍、〔白の褂一領〕掌侍、〔白の単衣一領〕博士〔×侍〕二人、〔命婦は白の単重一領、六位は白の単衣一領。〕女官は足絹、下は手作〔＝手作布〕各一端。所の布を以て、之を給ふ。召す人、〔白の単衣各一領。〕近衛司の者は足絹。

95 ①『小右記』治安元年（一〇二二）正月廿六日条（*2）

*1「賭の間の事」

*2「假文を奉る事」

▲a「伯耆守〔藤原資頼〕、慶を申す事」

▲b「賭射の手結」

廿六日、壬寅。

今日、賭射。五箇日の假〔産穢に触る。〕を請ひて参入せず。

*2 匠作〔藤原資平〕来たる。即ち参内す。〔着座の間の事、注送るべ

き由、四条大納言〔藤原公任〕、消息有り。〔是、右大弁定頼〔藤

原〕の着座の料なり。〕者り。〕未時許、内豎来たりて云はく「頭

中将〔左〕〔藤原朝任〕仰せて云はく『只今、参るべし。』者り。

今朝、触穢有るに依り、假文を奉り了りぬ。仍りて此の由を申さし

め了りぬ。

▼^a 伯州の吏（＝伯耆守藤原資頼）来拝す。臨昏、入道殿（＝藤原道長）・関白殿（＝藤原頼通）に参らしめ、相次いで参内すべきの由、相含めたりぬ。両殿（＝道長・頼通）の指南の者は懐信朝臣（＝源）なり。又、永頼朝臣（＝菅原）を以て、大内に送らしむ。入夜、資頼帰来たりて云はく「入道殿に参る。休息せらるる間、暫之、申返し了りぬ。関白殿参内せらる。賭射の事に依る。候する者に云置きて参内（×答内）す。藏人弁章信（＝藤原）の宿所に候ず。先是、奏聞し了りぬ。」今朝、匠作を以て、指示（×朝示）せしむる（×今）也。就中、賭射に依り、出御の間に申す也。

▼^b 夜深く、陣より、賭射の手結を進る。三度了りぬ。左勝つ。

96 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝寛仁）五年（＝治安元年）二月一日、大納言斉信卿（＝藤原）〈正（＝正官）に転ず。〉・権中納言道方（＝源）・参議定頼（＝藤原）等の着座の事。

②『小右記』治安元年二月一日条（*2）

- ▼^a 「石塔供養」
- ▼^b 「匠作（＝藤原資平）、銀の宮を関白殿（＝藤原頼通）に贈る事」
- ▼^c 「伯耆守（＝藤原資頼）の給官の事」
- ▼^d 「尚侍（＝藤原嬉子）、東宮（＝敦良親王）に参入し給ふ事」
- *1 「簀を執る事」
- *2 「着座の事」

一日、丙午。

▼^a 石塔、例の如し。

▼^b 匠作（＝藤原資平）来たりて云はく「前日、給はる所の銀の宮に、

銀の葉子を納め、〔草子、彩色（×採色）し、心葉を置く。〕今朝、関白殿（＝藤原頼通）に持参す。内に候じ給ふに依り、四位侍従（＝藤原経任）に付す。」

▼^c 「無量寿院（＝藤原道長）に参り、雑事を談ぜらるる次に、伯耆（＝藤原資頼）の事等有り。謁する所、極めて猛なり。『今年の第一の国なり。』者り。其の間、興言を命せらる。』者り。

臨昏、匠作来たる。即ち尚侍（＝藤原嬉子）の宮（＝皇太弟敦良親王）の所に入るに参る。尚侍は、関白（＝頼通）の養子為りと云々。

*1 今夜、式部卿宮（＝敦儀親王）、前帥隆家（＝藤原）の女に通ふ。『太娘。大炊御門の家に於いて、婚礼を行なふと云々。』臨夜、前帥左衛門尉為親（＝藤原）を以て、脂燭の火の縦横の説の事を問送る。

子細、之を報ず。

*2 今日酉時、大納言斉信（＝藤原）着座す。〔正（＝正官）に転じ、亦、着す。〕権中納言道方（＝源）、丑剋に着す。参議定頼（＝藤原）、酉時に着す。

③『公卿補任』治安元年条

大納言藤原齐信「二月一日、丙午。酉時、着座す。」

④『公卿補任』治安元年条

権中納言源道方「二月一日、丙午。丑時、着座す。」

⑤『公卿補任』治安元年条

参議藤原定頼「二月一日、丙午。酉時、着座す。」

・藤原齐信、寛仁四年十一月廿九日、任大納言（転正）。源道方、同日、任権中納言。藤原定頼、同日、任参議。

・藤原齐信の大納言初参着座…96・97

・藤原定頼の参議初参着座…95・96・97

97 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(＝治安元年)二月七日、斉信(＝藤原)・定頼(＝藤原)、着座の後、始めて政(＝外記政)に従ふ。外記の法申、非例の事。

②『小右記』治安元年二月七日条(＊4)

▼a「中御門・室町の焼亡の事」(目一九・所焼亡事)

▼b「皇后宮(＝藤原城子)の御消息」

＊1「簪を執る事(重服)」

＊2「奉幣定」

「春日に行幸し、諸社に奉幣することを定めらるる事」(目八・諸社行幸事)

▼c「東宮(＝敦良親王)、尚侍(＝藤原嬉子)の直廬に渡り給ふ事」

＊3「行幸の舞人定」

▼d「位記請印の事」(目一四・請印事)

＊4「着座の後、申文無き事」

七日、壬子。

▼辰時許、侍賢門大路(＝中御門大路)の北辺、室町小路の以西に、

焼亡あり。但し、洞院大路(＝東院大路)・東洞院大路、並びに室町小

路の際に及ばず。東西の辺の宅、頗る遺る。左中弁重尹(＝藤原)・

前美作守則理(＝源)・中務大輔方理(＝源)・大舍人頭守隆(＝源)等

来たりて云はく「火、頗る近々なり。仍りて来たる所也。」者り。

匠作(＝藤原資平)来たらず(不×)。「居所(＝小野宮第の北宅)、火の怖

有り。仍りて来たらず。」者り。

皇后宮亮為任(＝藤原)来たる。宮(＝藤原城子)の御消息を伝へて

云はく「一日、不覚の間、来訪ふ。其の悦(悦)、今に示さざる所な

り。」者り。恐、承はる由を啓せしむ(×今)。

今夜、右三位中将兼経(＝藤原)、前帥(＝藤原隆家)の女に合ふ。

二娘。大炊御門宅の北宅に於いて合ふと云々。三位中将は、重服

の人也。朔日(＝敦儀親王と長女の結婚)・今夜、頻りに簪取り有り。

＊2参内す。中宮大夫齐信卿(＝藤原)、春日の御祈の諸社奉幣使を定

む。(廿一社。来たる十五日、使、立(×之つ)。修理大夫資平、

之を書く。左大弁朝経(＝藤原)参入す。彼(×後(＝朝経))を以て書

かしむべき歟。行事なるを以て、資平をして書かしむる歟。大弁

(＝朝経)候ずれば、他に及ぶべからざる歟。右大臣(＝藤原公季)参入

するも着陣せず、東宮(＝敦良親王)に参る。卿相、陣(＝陣座)に候

ず。

▼関白(＝藤原頼通)の御消息に云はく「東宮に参るべし。」者り。仍

りて参入す。諸卿同じく参る。青宮(＝敦良親王)、尚侍(＝藤原嬉子)

の直廬に渡り給ふ。関白及び右大臣(＝傳)、已次、御共に候ず。関

白已下、彼の直廬に候ず。饗饌有り。「上達部・殿上人。」一巡の間、

乗燭す。両三巡し、纏頭せらるること、差有り。「上達部・殿上人。

主殿(啓)所の者立明す。疋絹。」禄了りて還り給ふ。御共に候じて

罷出づ。関白、右大臣、大納言齐信・公任(＝藤原)・教通(＝藤原)、

中納言頼宗(＝藤原)・経房(＝源)・実成(＝藤原)・道方(＝源)、参議

公信(＝藤原)・経通(＝藤原)・朝経(＝藤原)・広業(＝藤原)・(某(＝藤

原資平)・定頼(＝藤原)。

＊3今夜、行幸(＝春日行幸)の舞人・陪従等を定めらると云々。

▼d太皇太后宮(＝藤原彰子)、去る寛仁三年の御給の爵、高田牧司宗

形信遠に給ふ。今夜、位記に請印(×仰)す。件の事、帥中納言(＝

経房)承行なふと云々。位記請印の所司、余(＝藤原実資)、内々に

催さしむ。

*1 今日、大納言・参議・着座の後、初めて御政（＝外記政）に従ふ。申文せしむる後、外記、管文を進るべし。而るに、法申するは、是、怪也。往古聞かざるの失也。外記行頼の失と謂ふべからず。初めて着する為、兩人（＝齊信・定頼）、若しくは大怪敷と云々。外記、政（＝外記政）無き由を申すは、極めて不便の事也。今日、齊信卿、彼是を談ずと云々。後日、関白（＝資平）に談じて云はく「上卿一人為らざる歟。宰相為るは、宜しからざる事也。彼の人（＝定頼）然るべからず。以後、験とすべし。」

98 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

治安元年二月十一日、関白（＝藤原頼通）、宜陽殿并びに陣座に着せらるる事。二位の後。列見に依り、申文無し。」

②『小右記』治安元年二月十一日条（*13）

▼a「家印を始むる事（改元の後）」（目一八・雑部）

*1「関白（＝藤原頼通）の着陣の事」

*2「左大将（＝藤原教通）の宿廬（×慮）の事」

*3「関白の着陣の事」

十一日、丙辰。

▼a 今日午時、家印を始む。改元（＝二月二日）の後、吉日を扨びて始

むる所なり。

*1 今日、関白（＝藤原頼通）、宜陽殿并びに陣座に着せらると云々。

一位の後、初めて参らるる歟。昨日、匠作（＝藤原資平）云はく「一日、命ぜられて云はく『相共に参入すべし。』者り。仍りて相従ふべき也。又、曰（×四）はく『申文せしむべし。』者り。今に至

りては、一上の儀を用ひらるべき歟。左大臣（＝藤原顕光）、猶、外座に着すべし。参るや否や、最も疑慮有るべき歟。

*2 「又、曰はく『左大将教通（＝藤原）、宣耀殿を以て、宿所と為す。其の装束、我（＝頼通）が宿廬に勝る。宿廬より参上する道、彼の宿所を通る。縋綱端を敷く。我、只、高麗端を用ふ。』又、曰はく『殿（＝宣耀殿）を以て、宿所と為すべからず。但し、制すべからず。只、彼の心に任すも、或云はく「故栗田相府（×符）（＝藤原道兼）の作法の如し。」と云々。』者り。又、『曰はく「近習の者等、皆、悪人なり。我（＝頼通）、更に従類を以て、悪事を致さしめず。』」者り。申、剋許、匠作来たりて云はく「午時、関白、宜陽殿・陣座に着す。卿相、相（々）従ふ。退出せらるるの間、外記・史前行す。気色せざるに進止す。今日、申文せしめ給はず。列見に依る歟と云々。吉日に依り、宣旨を下すべきの気色（氣×）有り。而るに両頭（＝藤原朝任・藤原公成）候ぜず。仍りて直に退出し給ふ。」者り。

原朝任・藤原公成 候ぜず。仍りて直に退出し給ふ。」者り。

③『日本紀略』治安元年二月十一日条

十一日、丙辰。

列見。

午刻、関白内大臣「頼通（＝藤原）、従一位に叙するの後、始めて宜陽殿に着す。弁・少納言以下、御前（＝前驅）を為す。

・藤原頼通、治安元年正月六日、叙従一位。

99 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝治安元年）三月廿七日、史貞致（＝坂合部）、陣の床子より墮つる事。

②『小右記』治安元年三月廿七日条（▼ad）

- ▼ a 「史貞致（＝坂合部）、陣の床子より墮つる事」（目）
- ▼ b 「禊祭の宣旨に内蔵寮等に下さるる宣旨を加ふる事」
- ▼ c 「行事所に仰する由は奏聞を経べき事」
- ▼ d 「行事史を改むる事」

廿七日、壬寅。

▼ a 史忠信（＝宇治）云（×之）はく「昨日、禊祭の行事史貞致（＝坂合部）、陣腋（×陳腋）の床子より墮ち、面を突損じ、冠脱げて顛臥す下部等扶持して将入る。心神不覚なり。」

▼ b 藏人兵部丞教任（＝藤原）、宣旨を持来たる。（覆送する弁、宣旨等を下さしむ。）但し、内蔵寮・穀倉院に下さるるの宣旨等を諸加ふ。事由を示して返授く。然らざる事也。其の由を示し了りぬ。

匠作（＝藤原資平）来たりて云はく「今朝、無量寿院（＝藤原道長）並びに関白殿（＝藤原頼通）に参る。」

宣旨等、右少弁頼明（＝藤原）の許に遣はす。小選来たる。相遇はず。

▼ c 賀茂上御社司、申文を進る。是、祭（＝賀茂祭）に触るるの事等也。行事所に仰するの由は、申上ぐる時、奏聞を経べし。

▼ d 又、頼明朝臣来たる。大和守政職朝臣（＝源）を以て、雑事を伝へしむ。「史貞致、昨日、床子より（×目）落つるの後、尋常に従はず。他の史を以て、祭の事を行なはしむべし。」者り。

100 ①『小右記』治安元年八月一日条（▼ e）

▼ a 「石塔供養」

▼ b 「入道殿（＝藤原道長）、一切経を無量寿院に移運ばるる事」（目一

○・経論事）

- ▼ c 「禪門（＝道長）、石山寺に参らるる事」
- ▼ d 「府（＝右近衛府）、府生・近衛（＝隨身）を差進る事」
- ▼ e 「着陣等の日時勘申の事」

一日、甲辰。

▼ a 石塔、常の如し。

▼ b 匠作（作×）（＝藤原資平）・最円闍梨等来たりて云はく「今日、一切経、上東門院（＝土御門第）より無量寿院の経蔵に移運ぶ。衆人前行（×所行）す。僧綱已下、次いで歩む。四位・五位及び諸衛の官人の下僚、次第に運ぶ。願主（＝藤原道長）及び諸卿跪く。上達部・殿上人、相迎へ、経蔵に運置く。了りて大唐・高麗舞（舞あり。雲上の侍臣、衣を脱ぐ。只、僧綱等、被物有り。僧俗、皆、饗饌有り。関白（＝藤原頼通）・内府（×苅）（＝藤原教通）・両大納言（＝藤原頼宗・藤原能信）、慶賀に依りて参会せず。是、禪門（＝道長の御定也と云々（××）。

▼ c 仏事了り、石山（＝石山寺）に参らる。（騎馬。）御僧二人。或云はく「目の事を祈申されむが為なり。」と云々。

▼ d 今日、府生（×苅生・近衛一人（＝隨身）を差進る。（府生（×苅生・吉貞、近衛□□（□□××）。

▼ e 吉平朝臣（＝安倍）を呼び、初参等の日を勘へしむ。其の勘文等、裏（×裏）に注す。椅子を造るべき事、右中弁章信（＝藤原）に仰す。官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）の椅子、侍従所の前机等也。関白の椅子、若しくは後日、立てらるべき歟。吉平云はく「昨、只、初参し給ふの日を勘へらる。廿一日。椅子を立つべきの（□）日の事を仰せられず。廿一日の外、又、吉日無し。」者り。彼（×被）の廿一日に、同じく参入すべし。参らしめ給ふの時刻を承はりて参入すべし。

し。又、下官（＝藤原実資）の倚子（×綺子）は營立つべからず。彼（＝頼通）の倚子を立てらるるの後に立してしむべき也。縦ひ同日と雖も、彼の御倚子を立つるの後に立つべきの由、密々に気色を候すべき事、相示すの間、彼（×後）の殿（＝頼通）の命有り。仍りて参入す。計之、気色を候する歟。

宜陽殿・陣座に着御すべき日時を忖申す。

今月廿一日甲子。時は未・申。

御倚子を造るべき日時を忖申す。

今月十三日丙辰。時は午・申。

十六日己未。時は巳・未・申。

官・外記の倚子を立つべき日時を忖申す。〈侍従所の前机、同時に立（□）つべし。〉

今月（×旦）廿一日甲子。〈時は未・申。〉

勸学院歩の日時を忖申す。

今月十三日丙辰。時は午・申。

十六日己未。時は未・申。

山階寺（＝興福寺）、賀を申す日時を忖申す。

今月十六日己未。時は巳・午・未・申。

今案するに、勸学院歩・山階寺の賀、最たる吉日を勘ふべからず。又、時刻を勘ふべからず。只、坎日（×次旦）・衰日等を除く外の日が宜しかるべき歟。是、只、初参（×初歟参）の日等を勘へしむる次に、申さしむる所也。

本陣に着御すべき日時を忖申す。

九月廿八日庚子。時は午・申。

十月二日甲子。時は未・申。

請印（×官）を行なはるべき日時を忖申す。

八月十六日己未。時は午・未。

廿一日甲子。時は巳・□（□×）。

十月二日甲辰。時は巳・未。

廿二日甲午。時は巳・未。

・藤原実資、治安元年七月廿五日、任右大臣。

・藤原実資の右大臣初任着陣・着座：100・104・105・106・107・108・109

④①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝治安元年）八月七日、初参の日、晴儀（×議）を用ふべき事。

②『小右記』治安元年八月七日程（▼a b）

▼a「初参の日、晴儀（×議）を用ふべき事」（目）

▼b「勸学院歩」

七日、庚戌。

伝聞く。「今日、内大臣（＝藤原教通）の初参なり。」按察（＝藤原公任）示送りて云はく「公卿、初めて着陣する日、反閑（×拜）する歟。先例は如何侍（×傳）る乎。又、大臣参着する時、雨儀は、温明殿の砌より退出すべき歟。」報じて云はく「公卿、初参の時、反閑聞かざる事也。但し、大臣、初参の時、反閑有る歟。又、未だ知らざる事也。下官（＝藤原実資）、大納言・参議の時、初参の日、反閑せしめず。大臣の初参、他に異なる歟。閑白（＝藤原頼通）、初参せらるるの例、尤も佳とすべし。案内を申され、彼の例に従はるべきが吉也。又、内府（×苻）（＝教通）、大納言と為りて初参の時、反閑（×閑）の有無は如何。又、初参の雨儀、未だ知らざる事也。初参の日、自から敷政門、出入に用ふべき歟。然らば、猶、温明殿の壇を用ふ

べき歟。如何。」

▼晩頭(×次)、匠作(×候)(藤原資平)来たりて云はく「昨日の関白の命に依り、束帯して参入す。今日、勸学院歩なり。其の儲有るべきに依る。」者り。近代、上達部勸益すと云々。上古、専ら然らず。入夜、匠作来たりて云はく「勸学院の衆、秉燭の後、関白殿(＝頼通)に参る。兄弟の納言(＝藤原頼宗・藤原能信)及び彼是の卿相参入して勸益す。先づ見参を進る。拝礼の後、饗座(×府)に着す。三献の後、復飯を居う。朗詠あり。各、絹二疋を給ふ。先日(＝寛仁四年八月廿五日)、封(×封)を寄する時、学生の歩あり。所悩(×悩)有るに依り、禄を給はず。仍りて二疋を賜ふ。」者り。

・藤原教通、治安元年七月廿五日、任内大臣。藤原頼通、同日、任左大臣。

・藤原頼通の左大臣初任着陣・着座：100・101・102・103・104・105・106

102 ①『左経記』治安元年八月十一日条逸文(『葉黄記』寛元四年(一二四六)十月十七日条所引)

『経頼記(＝左経記)』に云はく「治安元年八月十一日。大外記文義朝臣(＝小野)云はく『昨、関白殿(＝藤原頼通)仰せられて云はく「太政大臣の下に列すべきの由、宣旨を下さしめ畢りぬ。官(＝太政官庁)・外記庁の椅子等、改立てしむべし。』」

103 ①『小右記』治安元年八月十六日(十七日(庚申))条(▼d)

▼a「祈年穀奉幣の事」(目三・二月・祈年穀奉幣事)

▼b「除目の事」

▼c「廢務の日、駒牽(＝信濃勅使牧)有る例の事」(目六・八月・駒引事)

▼d「関白(＝藤原頼通)の椅子を造るを停止する事」十六日、已未。

▼a 今日、諸社の使立つ。「年穀・天変等を祈らる。権大納言行成卿(＝藤原)之を行なふ。」

勅任の符(×符)、式部の史生安倍為義を召して預給ふ。匠作(＝藤原資平)来たり、即ち退出す。向晩、来たりて云はく「関白殿(＝藤原頼通)に参る。雑事を談(×談)ぜらるるの次に、(全衛府督(×衛符督)・關国等、晦の間、任ぜらるべし。京官召に至りては、其の後、心閑に行なはるべし。」者り。

▼c 大外記文義(＝小野)云はく「今日、駒牽(＝信濃勅使牧)。左衛門陣(＝建春門)の饗、例の如し。廢務(×廢務)の日、駒牽有る例なり。但し、権大納言(＝行成)、八省(＝朝堂院)より退出す。参入すべきの上卿(＝公卿)無し。」と云々。

▼d 又、云はく「今日、関白(＝頼通)の椅子を造るべし。而るに廢務(×廢務)に依り、俄かに停止せらる。」

(注1) 大日本古記録本は「大外記文義云」以下を十七日条かとし、『小記目録』は▼aを十六日、▼cを十七日とする。

104 ①『小記目録』(第一五・慶賀事(付初参))

同年(＝治安元年)八月十九日、初参の日、禁中の犬死穢を忌むべからざる事。

②『小右記』治安元年八月十九日条(▼a b c)

▼a「初参の時刈の事」

▼b「初参の日、禁中の犬死穢を忌むべからざる事」(目)

▼c「勸学院歩」

十九日、壬戌。

▼史公親朝臣（＝但渡 参来たる。前に召す。申して云はく「明後日、何時に参るべき乎。」仰せて云はく「未時、関白（＝藤原頼通）参るべし者れば、其の後に参入すべし。未・申、共に吉時也。」又、申文有るべきの由を仰す。又、大弁（＝左大弁藤原朝経・右大弁藤原定頼）並びに権弁（＝権左中弁源経頼）等に示すべき由、同じく之を仰す。

▼日来、弁等服す。只、権弁経頼、服に非ず。但し、章信（＝藤原）は、豊受宮の事を行なふに依り、内裏の穢に触れずと云々。内の穢に依り、関白参らるる事、定まらざるの由と云々。仍りて公親朝臣に問（×而）ふ。云はく「今朝、彼（×後）の殿（＝頼通）に参る。義通朝臣（＝橘）申して云はく「明後日の前駆を催仰すべき由、仰有り。」者り。其の後、懐信朝臣（＝源）来たりて云はく「明後日、関白参らるべし。」者り。匠作（＝藤原資平）、入道殿（＝藤原道長）に参り、来たりて云はく「穢の間の初参の事、気色を候ず。命じて云はく「更には忌むべからず。」者り。内の穢は廿一日許也。彼（×後）の日の早朝、左衛門・左兵衛陣（＝建春門・宣陽門）の簡（＝物忌簡）を取棄（×弁）つるが宜しかるべき歟。関白初参せられ、穢の簡を見給はば、便無（無×）かるべき由、公親朝臣に仰す。申して云はく「尤も然るべき事也。」者り。

▼今日、勸学院歩。（太相国（＝藤原公季）。饗禄を儲くと云々（々々）。後聞（×師）く。「東対の南廊の廂、簾に副ひ、屏風を立つ。」と云々。

・藤原公季、治安元年七月廿五日、任太政大臣。

・藤原公季の太政大臣初任着座：104・105・106

105 ①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝治安元年）八月廿一日、大臣の着座の事。〈申文の事〉

②『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同日（＝治安元年八月廿一日）、関白左大臣（＝藤原頼通）の着陣の事。

③『小右記』治安元年八月廿一日条（▼c d e f g h i j）

▼a「家司・侍所の職事を定むる事」

▼b「家の請印始」

▼c「椅子を立つる事」

▼d「着陣の事」

▼e「大臣の着座の事〈申文の事〉」（目）

▼f「宣旨を大弁（＝藤原定頼）に下す事」

▼g「昇殿の奏慶」

▼h「退出の間の事」

▼i「関白左大臣（＝藤原頼通）の着陣の事」（目）

▼j「大納言能信（＝藤原）の着陣」

廿一日、甲子。

▼匠作（＝藤原資平）来たる。家司・侍所の職事を定む。為成真人（＝清原）を以て書下さしむ。政所の別当政平朝臣、従木工允伴興忠、大書史典薬属足羽（×是羽）千平、少書史（×少属書史）右馬属茨田光忠、知家事左衛門府生（×苻生）紀真光・水取季武、案主身人部信武、侍所の別当重親朝臣（＝林）。

▼未時、始めて請印（×官）す。南庭に、案を立つ。（興忠・光忠昇立つ。須く案主を以てすべし。而るに参らざるに依る也。）光忠、印（×官）の櫃を持ち、案の上に置く。興忠、伊予（伊予）の返抄、覽筥に納めて持来たる。為成真人、先是に祇候し、取伝へ、之を

奉る。余（＝藤原実實）、寢殿の南階の廂間に居す。参内するに依りて束帶す。見了りて返給ふ。興忠伝給ふ。光忠（＝）、案に就き、開封の由を申す。捺印す。又、印を納むる由を申す。封を付す。又、印文を持来たる。為成取伝ふ。即ち返給ふ。興忠持ちて退出す。光忠、印の櫃を取りて出づ。次いで興忠・光忠等、案を撤す。

今日、左大臣（＝藤原頼通）の倚し、未刻に立つべしと云々。又、或云はく「戌時に立つべし。」同じ時に立つべき由、興忠を差はして仰遣はす。又、慥に見て、立てしむべき由、同じく仰せりぬ。今日未刻、左大臣、初めて参る。余、申時に参るべし。人を差はし、彼（＝頼通）の退出するを見せしむ。走來たりて云はく「只今、左衛門陣（＝建春門）を出づ。」者り。仍りて参入せむと欲するの間、小雨（＝雨）ふる。其の程を過ごして参入するの間、関白（＝頼通、堀川（＝堀川小路）の辺より帰らる。余、漸之参入す。「郁芳門（＝大炊御門大路）・大宮大路等を経。」関白の車、遙かに過ぎる。其の程、二町余許也。余、左衛門陣に到るに比（＝此）び、細雨ふる。然而、笠を指さず。史忠信（忠×（＝宇治）、匠作を以て申さしめて云はく「宜陽殿の座は、太政大臣（＝藤原公季）・左大臣は横座、余・内大臣（＝藤原教通）は連座。今日、定有り。又、官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）の座は、兩人（＝公季・頼通）の御座、横座に敷くべし。」者り。仍りて彼の定に依り、今日、敷く所なり。是、権左中弁経頼（＝源）定申す所也。敷政門より入る。匠作、相従ふ。即ち宜陽殿の座に着す。「申二刻。連座。東向。太政大臣の座、未だ意を得ず。内大臣初めて着する日、横座に敷く。今日（＝日）、座無し。怪也。皆、諸卿の座有り。又、事定有る歟。若しくは、不参の人（×人）の座を敷かず。太政大臣の座を敷くべからざる歟。」

極めて奇也。」

即ち起座し、仗座（＝陣座）に着す。陣官を召し、膝突を敷かしむ。右大弁定頼（＝藤原）を呼び、申文有るべき乎を問ふ。「申文せしむべし。」者り。即ち起座し、陣腋に向かふ。小時（＝）、復座（＝）して云はく「申文。」揖して称唯し、史に目（×目）す。史（々）斉通、書杖を執り、小庭に居す。余、目（×目）す。称唯して参来たり、膝突に着し、之（×之）を進る。取見る。「文三枚。」先の如く巻き、之を賜ふ。「板敷の端に置く。」一々、加太禰申す。「二枚は伊予（伊予・阿波の匙文。一枚は馬料文。）与奪（×察）す。」

「匙文は申し給（＝）。馬料文は目す。」史、退出す。

左頭中将朝任（＝源）、宣旨を下す。「大原野祭の御幣料の雑物の内蔵寮の請奏（×答）。」権左中弁経頼、是、源氏也。最初、氏社（×代社）の祭の宣旨を以て、異姓の弁に下すは、思慮有り。仍りて右大弁定頼に下す。宣旨を大弁に下すの例也。就中、大臣、他に異なる耳。大弁、宣旨を給はる。余、起座し（×起余座）、奥座に着す。小時、射場殿に進む。治部卿（＝藤原経通）・匠作（卿匠作）相従（從×）ふ。左頭中将を以て、昇殿の慶を奏せしむ。拜舞す。後に殿上（＝殿上間）に参上す。

祇候するの間、雨脚、太だ密（×宍）なり。申終剋に臨み、雨止み反照す。然而、雨湿（×湿雨）留まる。儀、敷政門より出づるは、頗る便宜無し。初めは、又、化徳門より出づるは如何。雨已に止む。敷政門より出づるに難無かるべき歟。先づ匠作を以て、大外記文義（＝小野）に問はしむ。申さしめて云はく「関白（＝）出（＝）で給ふの間、雨脚下る。仍りて左衛門陣に於いて、笠を指す。陽明門に於いて、彼の御笠并（×弁）びに卿相已下の笠等を撤す。何ぞ況や雨

脚已に止み、何事（×下乎）か有らむや。」者り。仍りて敷政門より出づ。参議（×儀）三人（経通・資平・定頼）・上官等相従ふ。左衛門陣の壇を下立つの間、外記行頼・史忠信等走出づ。（南は外記、北は史〔 〕）。余、陣（＝左衛門陣）を出で、北に向かふの間、扇〔 〕を以て、笏を鳴らす。史留居し、外記、外記門の下に到り、召使を喚ぶ。召使（々々）称唯して走出で、左右に前行〔 〕す。余、陽明門の西の辺に到りて留立つ。参議（×儀）、左兵衛府（兵×）の小門（＝北小門）に当たりて留立つ。弁・少納言・史・外記、又、留立つこと、例の如し。余、前駟等を隨身して出で了りぬ。余揖（×指）して退出（×退退出）す。

関白（左大臣）、未時、宜陽殿に着す。又、陣（＝陣座）に着して申文せしむ。殿（＝頼通）、宣旨を下すと云々。

大納言能信（＝藤原）、已刻、宜陽殿に着〔 〕すと云々（×立）。

- ④『小右記』治安元年八月廿一日条（局中宝）宜陽殿大臣座事所引）治安元年八月廿一日の『後小野宮右府記（＝小右記）』に云はく「太政大臣（＝藤原公季）・左大臣（＝藤原頼通）は横座。余「右大臣（＝藤原実資）・内大臣（＝藤原教通）は連座。官（＝太政官庁）・外記庁の座、之に同じ敷。」

- ⑤『左経記』治安元年八月廿一日条逸文（『葉黄記』寛元四年十月十七日条所引）

『経頼記（＝左経記）』に云はく「治安元年八月十一日。（中略：前掲）廿一日。関白殿（＝藤原頼通）仰せられて云はく『人々云はく「太政大臣有るの時、官（＝太政官庁）・外記庁・侍従所・宜陽殿等（之時）、左・右大臣の座、納言の上（上×）に立敷く。而るに摂政・関白を帯ぶる大臣、猶、他の大臣と別くべき敷。其の故は、除目の

時の御前の座、已に関白は横座也。況や他所の座においてをや。猶、議（×儀）有るべき也。」者り。（前日、按察大納言（＝藤原公任）、之を申す。近日、権大納言（＝藤原行成）、余（＝源経頼）を以て、又、申さるる也。此の由、御堂（＝藤原道長）に参りて申すべき也。』者り。即ち参上す。御消息の旨を申す。即ち仰せられて云はく『太政大臣の座の次に立敷くべきの由、兼ねて案ずる所（所×）也。一日、思失して聞せざる也。先例無しと雖も、他の大臣に准ずべからず。太政大臣の座の次（横座）に立敷くべき（×了）の由、仰下さるべき也。但し、右大臣・内大臣に至（×本）りては、猶、納言の座の上に立敷くべき也。』者り。即ち帰り、此の由を申す。即ち仰せられて云はく『官・外記の椅子並びに侍従所・宜陽殿等の座、仰の如く立敷くべきの由、仰下すべし。』者り。即ち大夫外記・史（×中）等に仰す。又、関白仰せられて云はく『貞信公（＝藤原忠平）、太政大臣に任せらるるの間、左大臣（小野宮（＝藤原実頼））・右大臣（九条殿（＝藤原師輔））、皆、子為り。仍りて父子の間、尤も列座を憚ること有り。仍りて納言の上に列する也。其の後、改めず。已に永例と為る也（×已）と云々。而らば、上古の例、更に納言の座の上に立敷かざる敷。』と云々。」

- ⑥『左経記』治安元年八月廿一日条逸文（『局中宝』宜陽殿大臣座事所引）

同日（＝治安元年八月廿一日）の『経頼卿記（＝左経記）』に云はく「関白殿（＝藤原頼通）に参る。「左大臣（×右大臣）に任せしめ給ふの後、今日、始めて着陣せしめ給ふべき也。」仰せられて云はく『人々云はく「太政大臣有るの時、官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）・侍従所・宜陽殿等、左・右大臣の座、納言の上に立敷く。而るに摂政・関白の大

臣、猶、他の大臣と別くべき歟。其の故は、除目の時の御前、已に
関白は横座也。況や他所の座においてをや。猶、議有るべき也。此
の由、御堂（藤原道長）に参りて申すべき也。」者り。仰せられて云
はく『太政大臣の座の次に立敷くべきの由、兼ねて案ずる所也。
先例無しと雖も、他的大臣に准ずべからず。太政大臣の座の次（横
座）に立敷くべき（×早）の由、仰下さるべき也。但し、右大臣・
内大臣に至りては、猶、納言の座の上に立敷くべき也。』者り。此
の旨を仰下されりぬ。又、関白殿仰せられて云はく『貞信公（藤
藤原忠平）、太政大臣に任ぜらるるの間、左大臣（小野宮（藤原実
頼）・右大臣（九条殿（藤原師輔））、皆、子為り。仍りて父子の間、
列座を憚ること有り。仍りて納言の上に列する也。其の後、改めず
已に永例と為る也と云々。然らば、上古の例、更に納言の上に立敷
かざる歟。』と云々。』

件等の座の事、本の日記、委細に、之を記す。今、省略し、之を
注す。彼の座、太政大臣は横座、左大臣已下は南北行に、之を敷
く。而るに治安、沙汰有り。摂関、大臣を帯びしめ給ふの時、
横切に、之を儲け、太政大臣に相並ぶ。近年、太政大臣闕き、并
びに摂関、大臣を帯びざるの時、左大臣已下の座、或は元の如く
南北行にし、或は横座にし、西上北面に敷く。且つは装束司（×
装之司）、上宣に随ひ、畳を用ひしむる歟。

106 ①『小記目錄』（第一五・公卿着座事（付着陣））

同年同月（治安元年八月）廿二日、官（太政官庁）・外記庁、椅子を
立てしむる事。

②『小右記』治安元年八月廿二日条（▼abc）

- ▼a「官（太政官庁）・外記庁、椅子を立てしむる事」（目）
- ▼b「勸学院歩」
- ▼c「見参」

廿二日、乙丑。

▲a 早朝、〔臣〕師重（中源）を以て、昨日の官（太政官庁）・外記庁の
座の事を公親朝臣（但波）に問遣はす。帰来たりて云はく「戸を閉
（×関）ぢ、物忌と称して相逢はず。申さしむるを伝へて云はく『昨
日未尅、関白（藤原頼通）の椅子を立つ。同じ時に、余（藤原実資）
の椅子を立てしむ。罷向かひて立てしむる所也。太政大臣（藤原公
季・左大臣（関白）は横座、余の椅子は連座。〔南向。納言の座の
上に立つ。〕興忠（×奥忠（伴）見給ふ所なり。〕而るに未だ申さざ
る由、極めて奇しき事也。』者り。其の後、師光朝臣申して云はく
「昨、内に（之）候ずるの（×々）間、興忠（×奥忠）参内す。未時に椅
子を立つる由を申す。太政官の椅子は、史公親朝臣、相共に立つ。
外記（記×）の椅子は、大外記文義朝臣（小野）、相共に立（□）てし
む（□）。次（□）いで侍従所（侍風所）の机、興忠（×奥忠）一人罷向
かひて立つ。』者り。

▲b 今日、勸学院歩。仍りて近代の例に任せ、西対（小野宮第）の東
廂に、座席を設く。座の後に、屏風を立つ。机廿前、礼部（藤原経
通・匠作（藤原資平）来たる。秉燭の後、学生来たる。見参を進ら
しむ。永信朝臣（藤原）執進（□進）る。（見参二枚。曆の裏に注
（×経）す。参入すべきの由を仰す。中門（西中門）より入り、庭中
に進む。（有官別当、無官別当。次いで学生等。）拝礼す。此の間、
隨身等、燎を執りて立つ。拝礼し畢り、有官别当民部丞敦舒（藤
原 已上十一人着座す。一献は治部卿経通（参議）・右大弁定頼

〈参議〉。二献は修理大夫資平（＝藤原）〈参議〉・民部大輔顕定（＝源）。次いで汁を居う。次いで三献は美濃守頼任（＝藤原）・四位侍従経任（＝藤原）。次いで箸を下ろす。四献は経任（然るべきの（×々）人（×人）無（無×）きに依り、両度役す。・右少将良頼（＝藤原）。其の後、左頭中将朝任（＝藤原）・右中弁章信（＝藤原）来たる。諸大夫等多く来たる。四献了り、復飯を居う。次いで饗を撤す。然而只、飯少々、撤せしめ、従者に賜はしむ。是、例也。先是、朗詠あり。万歳千秋を誦む。各、疋絹を給ふ。諸大夫、之を執る。知院事三人に、疋絹を給ふ。知院事・案主等、政所に、饗を給ふ。又、案主・雑色・仕丁に、布八十端を賜ふ。（勸学院）

勸学院政所

別当民部大丞敦舒進る知院事（知×）已下の見参

知院事大膳少属（局） 生江 為良

掃部少属 立野 正頼

安倍 為義

蔭子惟国（＝藤原）

学生恒頼 案主紀村景

方頼 大中臣吉光 長谷部為盛

忠信 壬生 有孝 安倍 為恒

季明 紀 景吉 小部 守信

有孝 雑色廿五人

有成

頼義 仕丁一人

守善 右、見参、進る所、件（×何）の如し。

清科善道

治安元年八月廿二日

知院事大膳属（×局） 生江（×江治） 為良

掃部属（×局） 立野（×顯） 正頼

①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同年（＝治安元年）九月十九日、未だ着陣せざる以前、月奏に署を加ふべからざる事。

②『小右記』治安元年九月十九日条（▼a）

▼a「未だ着陣せざる以前、月奏に署を加ふべからざる事」（目

十九日、辛卯。

▼a「月奏進る。見ずに返給ふ。未だ着陣（＝本陣）せざるに依りて署

（×着）せざる也。

①『小右記』治安元年九月廿九日条（▼c）

▼a「按察大納言公任卿（＝藤原）、辞退の状を上る事」

▼b「高陽院の造営の事」

▼c「着陣せざるに依り、月奏・考文に署を加へざる事」

廿九日、辛丑。

▼a「按察大納言公任卿（＝藤原）、辞退の状を上る。即ち返給はるの由、之を示送る。又、「重ねて上るべし。」者り。但し、状に随ひ、来月を過ごして出仕すべし。」者り。今朝、案内の趣を取る也。

▼b「宰相（＝藤原資平）来たる。頃之、退去す。亦、暗に乗じて、来たりて云はく「高陽院（＝藤原頼通）に参る。上達部多く会す。营造の由、山を作り、石を立つと云々（×公）。高大莊麗なること、比類す

べき(×丁) こと無し。諸大夫、手自洒掃(す)す。間毎に、人を充て、其の事を勤めしむ。桃を以て瑩(×瑩) かしめ(×人)、明鏡に異ならず。過差の(×々) 甚(×其) だしきこと、禪門(藤原道長) に倍すべし。又(×)、云はく(×)「五・六尺の立石を成さしめ、樹木を植ゑしむ。」と云々。

未だ着陣(×若陣) (本陣) せざるに依り、月奏・考文に署せず。

109 ①『小右記』治安元年十月二日条(+1、▼c)

▼a「高陽院の造作の事」

▼b「府生奏の事」

+1「太子傳を兼任する後、初めて内并びに東宮に参る(初参内)東宮事」

▼c「右仗(右近陣座)に着する事」

▼d「太皇太后宮(藤原彰子)に参る事」

▼e「外記(小野文義)を召し、公卿給を給ふ事」(目四・三月・京官除目事)

+2「関白(藤原頼通)、高陽院に移らるる事」(目一五・移徙事)

二日、甲辰。

宰相() 無恐。仍りて、三人の陰陽師をして() 来たりて云はく「高陽院(藤原頼通)に参り、上() 照耀、万人、目(×自)を以てする而已。

() 直物(物)、来たる八日、之を行なふ。甚() 不覚由、清武(武清(目下部))は、左近番長() 身歟。又、云はく「公忠(下

毛野)、還復すべきの気色有り。是、内々の事() 犯の後、未だ幾日を経ず、被補本() 政歟。」

+1 参内() 宰相() (藤原資平) 相従(×之徒) 余(藤原

実資、兼官(東宮傳)の後、今日、初めて参る。敷政門(入る。先づ左仗(左(陣座)に着す。弁(章信(藤原)、宣旨を下す。

「来月の吉田祭の御幣・内藏寮の請奏。」即ち同弁(章信)に給ふ。

▼c 次いで右仗(右近陣座)に着す。不() 将監(曹) 扶宣(高、硯并びに() 永解由(×田)を進る。「須く先づ解由を進る後に、硯を請来すべき者也。」解由(×田) 書朝臣、解由を撤せしむ。

▼d () 内御物忌に祇候す。仍りて不参() 大進季任朝臣(藤原)を以て、女房に達せしむ。此の間() 殿上に候するの間、即ち出御す。良久しく() 方。先是、又、以宰相()

() 右少弁(少弁 頼明(藤原(太皇太后宮大進)云はく「簾の下に候すべし。」者り。「預め、高麗端・讃岐円座を敷く。」即ち参上し、簾の下に候す。女房を以て、事由を啓せしむ。度々、仰有り、啓せしむ。小時、罷出づ。

大外記文義朝臣(小野) 下() 余、朝服を着す。前に召して下給ふ。其() 署所を書き、朝臣の字を加へ、返給はしむ。「伝燈() 東大寺去()」

+2 関白(白(藤原頼通)、高陽院に移らると云々。翌日、宰相(藤原資平) 云はく「権() 移徙の御共に従ふ。」と云々。

・藤原実資、治安元年八月廿九日、兼任東宮傳。

110 ①『小右記』治安元年十一月廿六日条 (▼a)

▼a「宰相(＝藤原資平)の着陣の事」

▼b「臨時祭(＝賀茂臨時祭)」

廿六日、丁酉。

▼a 宰相(＝藤原資平) 来たりて云はく「内豎来たり、参入すべき由を仰す。□有思悩之内、明日、初めて宜陽殿・陣(＝陣座)等に着すべし。彼の以前(□前)、又、参入すべからざる歟。但し、参入する由を申さしめたりぬ。」者り。

▼b □□臨時祭(＝賀茂臨時祭)、所労を称して参入せざる歟(×被)。小女(×少如)(＝藤原千古)を催し、密々に□□□剋許に度る。宰相、同じく見物し了りぬ。

111 ①『小右記』治安元年十一月廿七日条 (+1、▼c)

▼a「官奏の事」

▼b「封(＝封戸)五百戸を辞せむと欲する事」

▼c「宰相(＝藤原資平)の着陣の事」

▼d「大饗(＝任右大臣大饗)の雑事定」

+1「内大臣(＝藤原教通)、始めて官奏に候ずる事(礼を失すること有り)」(目一四・官奏事)

▼e「新律師尋空・新僧都明尊、慶を申す事」

▼f「滅門」(頭書)

廿七日、戊戌。

宰相(＝藤原資平) 云はく「巳・午時の間、宜陽殿に着すべし。」者り。即ち参内す。史公親朝臣(＝但波) 申さしめて云はく「明日

の官奏の案内、承はるべし。」者り。有るべきの由を仰せしめたりぬ。

▼b 封(＝封戸) 五百戸(相模(相模) 廿五戸・武蔵百五十戸・上総百五十戸・常陸百五十戸・能登廿五戸。) 収むべからざるの由、民部録佐親を召し、且つは事由を仰せ、国□を注出だして給ふ。省符(×符(＝民部省符) に至りては、追ひて給ふべし。

▼c 宰相云はく「巳時、宜陽殿・陣(＝陣座)等に着す。関白(＝藤原頼通、明日の官奏(□□)の有無を問はる。」

▼d 宰相・敦頼朝臣(＝菅野、相共に大饗(＝任右大臣大饗)の雑事等を定む。未だ其の日を定めず。

+1 今日、内府(＝藤原教通)、始めて官奏に候ず。(後聞く。「先づ候ふべき奏文の文申す。而るに□□文を給ふ後、結緒を給ふ。」者り。大失なり。又、参(□□)る時、奏を執る所、廊中に立つ。而るに廊の柱の南に立つ。又、失なり。大納言公任(□(＝藤原)・行成(＝藤原)、陣に在りと云々。公任卿、歎の氣有りと云々。)

▼e 新律師尋空来たる。相逢ふ。白の大樹一領を施す。次いで新僧都(□□□) 明尊来たる。同じく白の大樹一領を施す。

▼f 滅門。

・藤原資平、寛仁元年三月四日、任参議(治安元年十一月三日、叙従三位)。

・藤原資平の参議(従三位か) 初参着陣・着座：110・111

112 ①『小記目錄』(第一五・公卿着座事(付着陣))

同年(＝治安元年) 十二月廿七日、大臣参る時、左衛門陣(＝建春門)に着する人の事。

②『小右記』治安元年十二月廿七日条 (+2)

+1「当年の不堪奏の事」(目一四・官奏事)

+2「大臣参る時、左衛門陣(＝建春門)に着する人の事」(目)

廿七日、丁卯。

公親朝臣(＝但波)を召し、今日の官奏の事を仰す。今日、厄日(＝大厄)に当たる。而るに当年の不堪奏に依り、強ちに以て参入す。参入(々々)する間、中納言道方(＝源、左衛門陣(＝建春門)に着す。余(＝藤原実資)の参入を見て起座し、砌の内に立つ。相揖す。余に従ひ、内に入る。(敷政門より入り、雨儀の道を經。)道方卿云はく「起座すべき乎。案内を知らず。亦、晴(＝)の同所に立つは知らざる也。」余答へて云はく「剋限已に過ぎ、内に入るべし。而るに大臣参入す。相従ひて参内する儀(×議)、晴に立つべからざる歟。」先是、右大弁定頼(＝藤原)参入し、結政に在り。小時、参入す。二剋。太だ懈怠なり。結政の時剋に非ず。官奏の事を問ふ。「未(＝)だ見ず。」者り。早く見るべきの由を仰す。時剋推移す。奏文(＝)を挿し、左少史忠信(＝宇治、北に度る。仍りて南座に移着す。次いで大弁(＝定頼)着座して云はく「奏す。」余揖す。次いで史忠信、小庭に進む。余目す。称唯し、奏を奉る。(当年の不堪文。□を加ふ。)見了り、巻結ねて返給ふ。申して云はく「候すべき文若干。」退出す。右中弁章信(＝藤原)を以て内覧せしむ。良久之、帰来たりて云はく「奏すべし。」(関白(＝藤原頼通、里第に在り。御物忌也。奏文を取入れて見ると云々(□々)。)便ち奏申しむ。(其の詞に云はく「奏候ふ。」西剋に臨み、召有りて参上すること、恒の如しと云々。陣座に復す。大弁着座す。史、奏を奉る。余、表巻紙を給ふ。次いで不堪の解文並びに目録を給ふ。史、目録を覽ず。宣して云はく「諸卿の定に依りて申行なへ。」次いで一々、

書を給ふ。毎度、指寄せて見せしむ。宣る。「申すの任に。」了りて成文を申す。了りて、表巻紙を巻く。了りて結(緒×)を給ふ。史退出す。次いで大弁起座し、壁後に出づ。此の間、隨身、続松を執る。

宰相(＝藤原實平、禪門(＝藤原道長)の御読經の結願所より参内す。余に従ひて罷出づ。余の車尻に乗る。車中にて云はく「道方卿、禪門に申して云はく『大臣参内するの時、左衛門陣に着する人は如何。』権大納言行成(＝藤原、同じく彼の御前に在りて云はく『時剋過ぐれば、起座し、大臣に従ひ、内に入るが宜しかるべき事也。』禪門、同じく此の由を命せらる。』者り。下官(＝実資)の言の如し。

113 ①『小右記』万寿元年(一〇二四)十月三日条(▼d)

▼a「本命供」

▼b「除目、物忌に当たる事」

▼c「厄日(＝大厄)に当たるに依り、北山に出行するを止むる事」

▼d「宰相(＝藤原實平)の着座の雑事」

▼e「下総守如信朝臣(＝藤原)の貢物」

▼f「中津原牧の年貢」

三日、丁巳。

▼a「本命供」

▼b 大外記頼隆(＝清原)云はく「昨日、関白第(＝藤原頼通)に於いて、近習の者云はく『十四日、除目有るべし。』而るに彼の日(＝)下官(＝藤原実資)の物忌に当(＝)たる。然らば、定まらざる歟。其の外、亦、謂はざるは何ぞ。今日、徒然なり。北山の辺を見むが為に、宰相(＝藤原資

平・四位侍従（□□□□）（＝藤原経任）等と呼ばはす。即ち来たる。而るに厄日（＝大厄）に当たるに依り、出行を止む。□□。

向晩、宰相、又、来たる。着座の雑事を問ふ。

右衛門尉（＝衛門尉）高平（＝平）、下総守如信朝臣（＝藤原）の貢馬（＝鶴毛）・炮三百条等を進る。

玄蕃允（＝玄蕃允）守孝（＝藤原）、石見より帰来たる。中津原牧の年貢の牛二頭（＝黒毛）・炮等を進る。

114 ①『小右記』万寿元年十月六日条（▼a）

- ▼a「着座の曆記を写取る事」
- ▼b「季御読経定」
- ▼c「射場始の事」
- 六日、庚申。
- 宰相（＝藤原資平）、両度来たる。着座の雑事を談ず。昨日、余（＝藤原実資）、両度、着座の曆記写取る。
- 明日、季御読経の事を定むべし。而るに左大弁（＝藤原定頼）、物忌と云々。右兵衛督（＝藤原経通）参入すべき事、大外記頼隆真人（＝清原）に仰す。
- 又、云はく「昨日の射場始の御出、晩景に及ぶ。関白（＝藤原頼通、上達部の座に候ず。」と云々。所掌は右兵衛佐（＝乃兵衛督）資通（＝源）。作法、如泥なり。前例を知らざに似る。

115 ①『小右記』万寿元年十月八日条（▼a）

- ▼a「着座の雑事」
- ▼b「御読経（＝季御読経）の定文を進る事」

- ▼c「禪閣（＝藤原道長）、相逢はむと欲するの気色有る事」
- 八日、壬戌。
- 早朝、宰相（＝藤原資平）来たる。着座の雑事を言ふ。
- 左少史（＝右少史）佐親（＝伴）、御読経（＝季御読経）の定文を進る。
- 定基僧都、一昨、密々に告示して云はく「禪閣（＝藤原道長）、相逢はむと欲するの気色有る。」者り。仍りて今日、書札を以て、彼の僧都の許に送る。即ち禪閣の報書有り。「明後日に参謁すべし。」

116 ①『小右記』万寿元年十月十日条（▼de）

- ▼a「諷誦」
- ▼b「盗、故信濃守致時（＝中原カ）の宅に入る事」
- ▼c「宰相（＝藤原資平）等の給官を禪室（＝藤原道長）に申す事」
- + 1「松尾・北野の行幸の行事上卿・宰相・弁已下を定むる事」
- 「松尾・北野の上卿已下の行事を定むる事」（目八・諸社行幸事）
- ▼d「宰相・中納言（＝藤原朝経）の着座の事」
- ▼e「宰相の着座に用ふる料の事」（頭書）
- 十日、甲子。
- 諷誦を六角堂に修す。
- 去夜、盗、故信濃守致時（＝中原カ）の宅に入る。〈東隣〉只、□光并びに妻子の衣裳を搜取る。又、宿人の男、矢に中たるも、死に及ばずと云々。為時（＝高階）を以て、訪はしむ。致行朝臣（＝藤原）子細を申す。「母尼并びに女二人の表着の衣許引取る。」者り。
- 未剋許、禪室（＝藤原道長）に詣づ。良久しく談話す。宰相（＝藤原資平）の兼官、伯耆守資頼（＝藤原）の兼官、少納言資高（＝藤原）の

向後の少弁、大膳大夫敦頼（＝菅野）の給官、貴重朝臣（＝惟宗）の官、師光（×元）朝臣（＝中原）の明年の民部の巡官、左衛門尉式光（＝宮道）の検非違使の所望の事等、一々申し了りぬ。皆、申す所を理とせらる。

禪閣（＝道長）曰はく「今朝、関白（＝藤原頼通）の使右中弁章信（＝藤原）、松尾・北野の行幸の事を示す。行事の上（＝上卿）は中宮権大夫（能信（＝藤原））歟。弁は章信歟。権弁経輔（＝藤原）上臈なり。而るに章信、先に任ずるは、亦、経輔、此の如き事を行なひ難き歟。」其の外、事多し。宰相・史を問申さず。向晩に帰る。入夜、大外記頼隆（＝清原）来たりて云はく「行幸の行事は大納言能信・参議（×儀）広業（＝藤原）・右中弁章信・外記師任（＝中原）・大夫史貞行（＝小槻）。日時を勘申せむと欲するに、吉平（＝安倍）・文高（＝惟宗）参らず。」

戊時、宰相着座す。官（＝太政官庁）・外記（＝外記庁）に参る。退出する後、案内を見て、来たるべき由、師重（＝中原）に仰せ、之を遣はす。中納言朝経（＝藤原）、同じ時に着座す。主計頭吉平、二人乍ら反問すと云々。師重来たりて云はく「時刻、官・外記に着して退出す。四位侍従経任（＝藤原）・左少将資房（＝藤原）・少納言資高相従ふ。」今朝、布百端、宰相の許に遣はす。官・外記の使部の禄料なり。

▼同書（ついで）のちのち、
樋螺鉦・隠文帯等、宰相の許に遣はす。今日戌時、着座す。其の間に用ふべき料也。又、牛車を借る。申時、先づ貴重の宅に渡ると云々。〈中御門。〉

・藤原資平、治安二年九月廿三日、叙正三位。藤原朝経、治安三年十月十五日、任権中納言。

・藤原資平の正三位加階後初参着座：⑬・⑭・⑮・⑯
⑰⑱『小記目錄』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）
万寿元年十二月廿六日、中納言長家卿（＝藤原）、加階し、申文せしむる事。

②『小右記』万寿元年十二月廿六日条（+2）

▼a「諷誦」

+1「北野に行幸する事」（目八・諸社行幸事）

▼b「社の饗の事」

▼c「出御の事」

▼d「宣命を進る事」

▼e「社司の勸賞の事」

▼f「宰相（＝藤原資平）の兼官の事」

▼g「御視」

▼h「神宝・東遊・衆等を奉り、御馬を馳する事」

▼i「見参を奉り、禄を給ふ事」

▼j「還御の事」

+2「中納言長家卿（＝藤原）、加階し、申文せしむる事」（目

+3「行幸の行事史貞行（＝小槻）の父奉親法師（＝小槻）死去するに、

子に告げず行事し畢る事」

「行幸の行事史貞行の父奉親法師死去するに、子に告げず行事し

畢（×異）る事」（目八・諸社行幸事）

▼k「小女（＝藤原千古）の侍所を置き、職事を補する事」

▼l「権律師遍救を少僧都に任ずる事」（頭書）

廿六日、庚辰。

▼今日、北野に行幸す。扈從すべきに依り、諷誦を常住寺・東寺・清水寺等に修す。

参内す。「宰相（＝藤原資平）、車後に乗る。」時刻を問ふ。「已三刻。」

先是、関白（＝藤原頼通）並びに兩三の上達部参入す。外記を召し、諸衛・諸司の参不を問ふ。申して云はく「或は参入し、或は参らず。」申す所、頗る荒涼なり。催すべき由を仰せりぬ。左中弁経頼（＝源）、仰を伝へて云はく「出御の時、已に至る。諸司参入する乎。」者り。外記の申す旨を以て申さしめ訖りぬ。此の間、諸衛の将・佐等参入す。

▼左中弁、関白の御消息を伝へて云はく「社の饗の行事弁章信（＝藤原）精進せしむと云々。御膳（×即膳）に至りては、一日より清食（×請食）を供御す。抑、饗の事、若しくは覚ゆる所有る乎。」者り。先年の行幸の饗、慥には覚えぬ。但し、事理を推するに、魚鳥を用ふべからざる歟。僧官有り、俗官無し。前年、行事の上（＝上卿）中宮大夫齐信（＝藤原）、座に在り。案内を問ふ。答へて云はく「彼の時の饗の事、一切覚えぬ。」猶、精進すること、尤も宜しかるべき事、大略申達し訖りぬ。

▼右頭中将頼基（＝源）、仰を伝へて云はく「左将、一人の外は参らず。已に御出に臨む。右三位中将（＝源師房）若しくは頭基を以て、左に度し、御輿を寄すべし。」者り。此の間、左中将兼綱（＝藤原）参入す。此の由を奏せしむ。即ち南殿に出御す。先づ反問を奉る。〈吉平（＝安倍）〉「午二刻、御輿を轡す。〔葱花形。午二点。〕先づ左右の将軍、御階の異・坤に進立つ。諸卿列立すること、垣の如し。神事に依り、鈴奏・警蹕無し。亦、御綱を仰せず。乗輿す。日華・宣陽・建春・陽明等の門より出づ。大宮大路より北行し、西に折

（×析）れ、北辺大路より西行し、北に折れ、右近馬場より北行す。大輓の外に於いて、神祇官、御麻を献る。〔松尾行幸は献らず。失也。〕了りて御在所に到り給ふ。〔内侍祇候す。〕諸卿着座す。〔新造（×雑造）の仮屋。〕関白・内大臣（＝藤原教通）、御在所に候す。今日、関白、休廬を設けず。行事の上能信卿（＝藤原）、宣命の清書

（×請書）を奏すべき由を触る。余（＝藤原実資）答へて云はく「仰事を待ちて奏すべし。」右中弁章信、勸盃の次に、宣命の案内を示す。小時、勅を伝へて云はく「宣命を奏すべし。」者り。即ち内記兼行を召し、宣命を奉るべきの由を仰（×仰）す。即ち之を進る。章信朝臣を以て奏せしむ。須く御所に進みて奏せしむべし。而るに騎馬の間、進退耐へ難し。仍りて御所に進まず。

▼即ち宣命を返給はる次に、関白の御消息に云はく「御所の辺に於いて、申合わすべき事有り。」者り。宣命、能信卿の許に指遣はす。受取る。余起座し、御所の辺に参る。関白佇立す。即ち謁談して云はく「律師遍救、社司と為す。〔檢校。〕無名法師。〔別当。〕遍救、若しくは賞すべき哉否や。若し賞すべからば、何等の賞を加ふべき乎。石清水の例に依れば、位を給ふべき歟。然らば、法眼を給ふべき歟。律師を去り、法眼を叙するは、還りて愁有るべし。又、僧都に任ずるは、其の例無し。亦、別当を以て、法橋に任ずるは、檢校を置き、下臈を賞するは、便無かるべき歟。此の間、疑を持つ。如何。」者り。余答へて云はく「左右、叡慮に在るべし。」関白、「猶、所懷を示すべし。」者り。余云はく「行幸の処、勸賞の人有り。遍救、已に是、名僧なり。職、律師に居り。次第に漸至し、必ず転任有るべき者也。今、今時に遇ふ上、少僧都を給（×治）ふも、事難無かるべき歟。遍救、素より、転任すべからざるの定無し。」

今、此の時の勸賞の理有り。只、昇進の早晚（×曉）の間の事在るべき也。」又、関白云はく「然らば、難無かるべき乎、如何。」余答へて云はく「下官（＝実資）の申す所は、只、事旨也（□）。唯、諸人の申す所は知り難し。殊、謗難無かるべき乎。禅室、宣ぶる所有る乎。」関白云はく「行幸の時、寺司等、僧綱に任ずる例は如何。尋行なはるべし。但し、宜しきに随ひて定行なはるるに、何事か、之、有らむ也。」

良久しく談話する次に、資平（○）の兼官の事を申付く。和解の氣有り。

此の間、御視有り。

関白云はく「賞進の事、行事の上能信卿に仰すべし。」者り。大略、僧都に任ずべきに似る。

余、復座す。御視了り、歌笛を發す。能信卿、舞人等を率ゐ、宝前に参る。神宝等、在前。東遊・大唐・高麗等の樂、各三曲了りぬ。関白、諸卿を招き、御所に参進みて祇候す。御馬を馳せ了りぬ。

余、外記を召し、見参を奉るべき由を仰す。即ち進る。右頭中将頭基を以て奏せしむ。即ち返し給ふ。外記に給（々）ふ。行事務所、祿を給ふ。

了りて御輿を寄す。初めて警蹕を称ふ。此の間、燎を執りて還御す。建春門の外に於いて、神祇官、御麻を献り了りぬ。入御す。鈴奏「留守の参議朝任（＝源）、最後に、宜陽殿の前に於いて、称ふるの例なり。」・名謁、常の如し。

扈從の上達部、左大臣（関白、騎馬にて、御輿の御後に候ず。）・余・内大臣、大納言齐信・行成（＝藤原）（遅参。）・能信、中納言長

家（＝藤原）・実成（＝藤原）・道方（＝源）・朝経（＝藤原）、参議（×儀）資平・通任（＝藤原）・兼経（＝藤原、右三位中将師房（＝源）、参議（×儀）広業（＝藤原）・朝任（＝源）。今日辰時、中納言長家、加階の後、初めて宜陽殿（宜□□）に着し、陣（＝陣座）に於いて申文せしむと云々。神事の行幸の日、申文せしむるは、頗る強ちに似（□）る。

後聞く。「行幸の行事史貞行宿禰（＝小槻）の父俗名奉親（＝小槻）死去す。子の貞行に告げず、行幸了りて告ぐ。」と云々。

今日、新作の東廊（＝小野宮第）を以て、小女（＝藤原千古）の侍所と為す。小食を儲け、例の飯を置く。兼成朝臣（＝藤原）・彈正忠師重（＝中原）・橘為経等を以て、職事と為す。

権律師遍救を以て、少僧都に任せらると云々。

・藤原長家、万寿元年九月十九日、叙従二位、十二月廿日、叙正二位。

①『左経記』万寿二年（一〇二五）七月二日条（▽a）

▽a「外記政」

二日、壬午。晴。

結政所に参る。春宮大夫（＝藤原頼宗、着座の後、今日、始めて

政（＝外記政）の事を行なはる。源中納言（＝源道方・侍従宰相（＝藤原資平）・藤相公（＝藤原広業）参会せらる。申文、請印し了りぬ。上（＝上卿（＝頼宗）以下、侍従所に着す。申文・食等了り、内（×目）に入る。頃之、退出す。

・藤原頼宗、治安元年七月廿五日、任権大納言。

・『中右記』天永二年（一一一一）四月六日条に「（前略）堀川右大臣殿、治安元年七月廿五日、（任三大納言）」万寿二年六月十二日（壬

戌、時戌、着座、件例家吉例也、雖道虚已有着座事、(後略)と見える。

119 ①『左経記』万寿三年(一〇二六)九月廿一日条(▽c)

▽a「御座(中宮藤原威子)の御調度並びに仏事の事」(目

▽b「御造仏料の不足の事」

▽c「参議右兵衛督経通卿(藤原)の着座」

廿一日、甲子。天晴。

已剋を以て、御座(中宮藤原威子)の御調度を調始む。又、今日

(×月)より毎日、河臨御祓を行なはる。(御堂(御×)(藤原道長)よ

り、陰陽師五人を以て、御座の期に至るまで行なはると云々。

又、御造仏料の不足の由、覚法橋(覺空)の許より、夢想の告

有り。仍りて仏師を召問ふ。「料物は愁無し。但し、薄料の金は不

足する所なり。」者り。仍りて銀卅一兩を加下さる。(体別に二兩)

染工、頗る不足の愁有り。仍りて人別に、米二石を充つ。

子剋(×則)、参議右兵衛督経通(経道)卿(藤原)着座すと云々。

②『日本紀略』万寿三年九月廿一日条

廿一日、甲子。

参議経通(藤原)、始めて着座す。

・藤原経通、寛仁三年十二月廿一日、任参議(寛仁四年正月七日、叙

従三位、十一月廿九日、叙正三位)。

120 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事(付着陣))

同(万寿)三年十月九日(×十九日)(辛巳)、新中納言師房卿(源)、

始めて着陣する事。

②『日本紀略』万寿三年十月九日条
九日、辛巳。

権中納言師房卿(源)、仗座(陣座)に着す。

・源師房、万寿三年十月六日、任権中納言。

・源師房の権中納言初参着陣・着座：120・122・123

121 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事(付着陣))

長元二年四月廿八日(丙辰)、参議重尹(藤原)の着座の事。

・藤原重尹、長元二年(一〇二九)正月廿四日、任参議。

122 ①『公卿補任』長元三年(一〇三〇)条

権中納言源師房「二月廿三日、丙午。酉時、着座す。」

・源師房、万寿三年十月六日、任権中納言(長元二年正月廿四日、叙

正三位、十二月廿日、叙従二位)。

②『公卿補任』長元三年条

権中納言藤原資平「二月廿三日、丙午。丑時、着座す。」

・藤原資平、長元二年正月廿四日、任権中納言。

③『公卿補任』長元三年条

権中納言藤原定頼「二月廿三日。丑時、着座す。」

・藤原定頼、長元二年正月廿四日、任権中納言。

・藤原定頼の権中納言初参着陣・着座：122・123

123 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事(付着陣))

同(長元)三年二月廿六日(己酉)、師房卿(源)の着座の時剋、

相違する事。

124 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(＝長元三年)三月廿六日(＝己卯)、兼頼(×信家)卿(＝藤原)、仗座(＝陣座)に着する事。

・藤原兼頼、長元三年三月八日、叙従三位。

125 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年同月(＝長元三年三月)廿七日(＝庚辰)、定頼卿(＝藤原)の着座の事。

126 ①『小記目録』(第一五・公卿着座事〈付着陣〉)

同年(＝長元三年)八月九日(＝庚寅)、官(＝太政官序)・外記序の倚子、左大臣(＝藤原頼通)の座に双ぶべき事。

127 ①『左経記』長元四年(一〇三一)二月廿六日条(※1)

※1「着座の元子を作らしむる事」

廿六日、癸卯。

木工算師代正頼を召して仰せて云はく「来たる廿九日酉刻、着座すべし。元子、作らしむべきの由、大夫史義賢朝臣(＝惟宗)に召仰せ了りぬ。定めて仰下す敷。明日巳二刻、作初むべき也。須く家司一人を遣はし、慥なる時刻に作初めしむべき也。然而(×而然)、汝(＝正頼、已に家中の寮事の執行為りと云々。仍りて召仰する所也。時刻を違はず、慥に巳二刻に作初めて、廿九日午二刻、官(＝太政官序)・外記序に立つべき也。」者り。

128 ①『小右記』長元四年二月廿九日条(*2)

▼a「呵梨勒丸を服する事」

*1「狼、中納言(＝藤原資平)の家に入る事」(目一六・怪異事)

*2「着座」

▼b「輦車を造る事」

▼c「勘宣旨」

*3「東大寺の印の事」

「官史を東大寺に差遣はし、印等を実検する事」(目一八・雑部)

▼d「鬼気祭」

▼e「諷誦」

▼f「当季仁王講」

廿九日、丙午。

▼曉更、呵梨勒丸を服す。〈三〉

山階(＝興福寺)の僧朝寿来たる。相遇はず。帰粮三石を与ふ。悦

氣有りと云々。

卯時、狼、中納言(＝藤原資平)の家(＝小野宮第の北宅)に入る。他

処に於いて射られ、矢を立て乍ら走入る。今明、中納言物忌なり。

*2 大外記文義(＝菅野)云はく「今日酉時、権大納言長家(＝藤原)・

右大弁経頼(＝源)着座す。」

▼午時、輦車を造らしむ。例の乗用の車、太だ狭少なり。仍りて改

造せしむる所也。

▼東大寺僧嚴調・詮義来たる。相遇はず。

▼藏人左少弁経長(＝源、勘宣旨を持来たる。「前阿波守義忠の申

す藏人所の召物の直法(□法)。」覆奏せしむ。

*3 次いで頭弁(＝藤原経任)来たる。勅を伝へて云はく「官史を

東大寺に差遣はし、印等を実検せしむ。紙に捺さしめて奏すべし。』
 者り。関白（『藤原頼通』）云はく『下官（『藤原実資』）定申す所、尤も好
 言なり。』者り。即ち宣下し了りぬ。

今夜、鬼気祭。（西門。文高（×為高）（『惟宗』、病を称す。仍りて
 陰陽属恒盛（『中原』）を以て祭らしむ。』
 諷誦、三ヶ寺に修す。〔東寺・清水・祇園（祇園）。〕金鼓を打たし
 む。夢想紛紜に依る。

当季（『仁王講』）。

②『左経記』長元四年二月廿九日条（※1、▽a b c）

※1「着座の事」

「着座（×符）の事」（目）

▽a「辻々に於いて、往還の雑人を制止せしむる事」

▽b「太政官庁の着座」

▽c「外記庁の着座」

▽d「饗宴」

廿九日、丙午。

早旦、西廊に渡る。酉剋を以て着せむが為也。主計頭頼隆真人
 （『清原』）云はく「或秘書に云はく『初めて官（『太政官庁』）に入らば
 「秋東」を呼ぶ。又、行なふ時、左手（×右手）に、「天」の字を持す
 るは大吉也。』と云々。』仍りて左掌に、「天」の字を書く。

申剋、漏剋博士信公来たりて云はく「申剋は吉時也。此の剋に返
 閑して出行するの間、酉剋に及ぶ敷。』仍りて西中門の内に於いて
 返閑す。（先是、春日（『春日小路』）・中御門（『中御門大路』）の辻々（×
 迅々）に、人々を立て、往還の雑人を制止せしむ。門を出づ。（白
 の袂一重、信公に被く。〕高倉（高蔵（『高倉小路』）より中御門を引き、

東洞院（×東々院（『東洞院大路』）より近衛御門（『近衛大路』、大宮（『
 大宮大路』）より待賢門に行列す。召使・官掌等左右に相分かれて前駈
 す。使部等、所々に立ち、往還の雑人を制止す。待賢門より入り、
 陰陽寮の東南等の路を経て、八省（『朝堂院』）の東廊の休息所に到る。
 「昨日、史広雅に仰せて装束せしむる也。』

頃之、酉一剋を打つ。此の間、権大納言（『藤原長家』）参入せら
 る。暫くして酉二剋を打つ。大納言（『長家』）、先づ着して出で給ふ。
 次いで余（『源経頼』、西門より入る。召使四人・官掌一人、相分か
 れて前を行く。庁（『太政官庁』）の北屏の西の辺に於いて、靴を着し、
 庁の北面の西戸より入る。（此の間、「秋東（×束）を呼ぶ。』元子
 に着す。（下より、之に着す。』暫くして起座し一揖す。同じ戸より
 出で、元所に於いて、靴を脱ぎ、浅履を着し、本道より、外記（『
 外記庁』）に向かふ。（官の西門を出づるの間、酉三剋を打つ。』

小屋（『外記庁小屋』）の内に於いて、靴を着す。北面の西戸より入
 り、元子の後、并びに西を経て、之に着す。暫くして起座し一揖す。
 「庁（『外記庁』）の南廂の二所、北廂の二所、火を明すに、是、明す
 人無し。唯、松焼火を置く也。』元戸より出で、戸の西腋の方に於
 いて、浅履（履×）を着す。（此の間、前駈四人・召使四人、秉燭
 （×曳燭）し、前に在り。〕陽明門より出でて退出す。（召使・官掌等、
 騎馬して前駈す。』

本道より帰宅する道、召使・官掌等、密々に假を請ふ。先づ権大
 納言殿（『長家』）に請ふと云々。
 戊剋許、召使・官掌等来向す。東廊の東廂に、座を敷き、饗を
 賜ふ。（召使十人・官掌四人、对座南上。弁候二人・時申（申×）す
 使部二人、別座す。〕盃酌数巡の後、〔内蔵の史生等勸盃す。下部

役送す。」禄を賜ふ。「官掌四人・召使十人は、各白絹一疋。弁候（×侍）二人は、赤絹（×依）各一疋。時申す使部二人は、信濃布（信乃布）各二段。」先是、官の使部等の中に、屯食二具、信濃布（信乃布）六十七段。外記の使部等の中に、屯食一具、信濃布（信乃布）卅三段。以て令す。是、先例を尋ねて分給ふ所也。

（注一）「秋東」を呼ぶこと、左手に「天」の字を書くことについては、『台記』保延二年（一一三六）十月十一日条に「前略」経頼左大弁記曰、装束成畢之後、天ト云文字（ラ）、以レ指書ニ掌上（天）、掬（テ）天（ハ）在此掌中（ト）思也、又踰「官・外記戸闕」之時、秋東（ハ）二字（ラ）、心中（ニ）思也（後略）」とある。また、『参議要抄』所引『長房卿記』にも見える。

③『公卿補任』長元四年条

権大納言藤原長家「二月廿九日、丙午。酉時、着座す。」

④『公卿補任』長元四年条

参議源経頼「同（二月）廿九日、丙午。酉時、着座す。」

・藤原長家、長元元年二月十九日、任権大納言。源経頼、長元三年十一月五日、任参議。

②『小記目録』（第一五・公卿着座事（付着陣））

同（＝長元）四年十二月廿七日（＝庚午）、遠行五離の日の着座の例の事。

③①『左経記』長元五年（一一〇三二）正月九日条（▽a）

▽a「加階の上達部、宜陽殿に着すべき事」（目

九日、辛巳。天晴。

殿（＝藤原頼通）に参る。申して云はく「加階の後、明日、始めて陣に着せむと欲す。其の儀、先づ宜陽殿に着す。次いで仗座（＝陣

座）に着すべき也。而るに先例を尋ぬるに、宜陽殿に着するの由、所見無し。亦、申文せしめむと欲す。右衛門督（＝藤原経通）、左大弁（＝藤原重尹）の語に依りて参入すべしと云々。上卿一人、両度、申文せしむるは如何。」仰せて云はく「仗座は、是、仮座也。宜陽殿（×院）の座は、公卿の正座也。初めて参入するは、猶、宜陽殿に着（着×）すべき歟。抑、近例を尋ねて左右すべし。又、上卿一人、両度の申文は不穩の事也。亦、先例は如何。」申して云はく「不見不聞に侍り。」頃之、退出す。

③①『左経記』長元五年正月十日条（▽a）

▽a「宜陽殿に着する事」（目

十日、壬午。天晴。

已一剋、参内す。是、花徳門の辺に於いて、史を召す。宜陽殿の座を敷くや否やの由（×田）を問ふ。「昨日、例を左金吾（＝源師房）に尋ぬ。示されて云はく「加階の人、各、宜陽殿（殿×）に着す。」と云々（々×）。仍りて座を敷かしむべきの由、史広雅に召仰せりぬ。」史云はく「敷かしめりぬ。」亦、時を問ふ。申して云はく「已一剋。」者り。仍りて先づ宜陽殿に着す。「西面。」次いで仗座（＝陣座）に着す。「南面。」次いで腋の床子に着す。頃之、左大弁（＝藤原重尹）参入す。壁外に於いて、陣官の人を以て、逢ふべきの由を示す。起座して進向かひ、雑事を示す。午剋に及び、宜陽殿に着す。予（＝源経頼）、敷政門より出でて退出す。此の間、侍従中納言（＝藤原資平）、花徳門より参入せらると云々。是、申文せしめむが為なり。左大弁、語聞かると云々。予、後日、申文せしむべし。仍りて直ちに以て退出する也。

- ・源経頼、長元五年正月六日、叙従三位。藤原重尹、同日、叙従三位。
- ・源経頼の従三位加階後初参着陣……^{[130]・[131]}

^[132]①『小記目録』（第一五・公卿着座事〈付着陣〉）

同（＝長元）五年六月廿七日（＝丙寅）、着座の日時の事。

掌・召使、各疋絹。時申す使部、各信濃布（信乃布）二段。両所（＝官・外記）の使部の中、同じ布と云々。」
（注）源隆国は、長久四年（一〇四三）九月十九日、任権中納言。治暦三年（一〇六七）二月六日、任権大納言。

^[133]①『左経記』長元八年（一〇三五）三月九日条（▽a）

▽a「右兵衛督（＝源隆国）の着座の雑事」

九日、癸巳。天晴。

殿（＝藤原頼通）に参る。午後、右兵衛督（＝源隆国）の御許に詣づ。明日、着座せらるるの雑事有（×同）り。晩に及び、高倉に詣づ。次いで家に帰る。

- ・源隆国、長元七年七月八日（十月廿四日）、任参議。同日（十一月）、兼任右兵衛督。同日（十二月八日）、叙従三位。
- ・源隆国の参議初参着陣……^{[133]・[134]}

^[134]①『左経記』長元八年三月十日条（▽a）

▽a「御着座の事（宇治大納言殿（＝源隆国））」（目

十日、甲午。天晴。

卯二刻、右兵衛督（＝源隆国）着座せらると云々。俗忌に云はく「着座の人よりの上臈、其の所に向かはず。」と云々。仍りて詣ず。但し、官掌四人、召使十人、時申す使部二人の饗十六前、兼日、真親に仰せて調送らしむ。又、政所に於いて、屯食三具を調備へしめ、官・外記の使部等の中に送らしむ。「二具は官の使部、宿に送下す。一具は外記、外記局に送る。」疋絹・雑布等、本家、之を儲く。〔官

【儀式書】

『西宮記』卷八・臨時乙・新任官叙位人事

一、新任官・叙位の人の事

除目の下名、二省（式部省・兵部省）に給ふの後、三日の中、先づ腋陣に参り、近衛の次将をして「地下の将は、藏人に付して伝奏す。」候ずる由を奏せしむ。「上達部・殿上人等は、清書を奏するの後、頭藏人を以て奏せしむ。公卿は、弓場殿に参る。地下の公卿は、階下を経て参入す。二度の除目、三人已上、之を奏す。」近衛の将参上し、其の人其（々）の人（々）候ずる由を奏す。「数多なれば、注取り、奏すべし。」勅許の後、劍・笏を着し、慶賀の人の前に立つ。「後を以て、人に向かふ也。」仰せて云はく「聞食しつ。」と宣ふ。慶賀の人、称唯して拝舞す。「中間、次将退く。」次いで院に参る。「内に同じ。」諸宮及び然るべき所々は、事由を申ししむ。〈二拝〉

衛府の官、三日間、仮隨身有り。「馬寮並びに六位は、隨身無し。大將は官人一員。非参議の督は志以下。中將は近衛四人。少將は二人。佐は四人。帰る日、禄を賜ふ。」

非参議、兵部の移を待ち、劍を着す。「侍従・中務輔、即ち之を着す。」吉日を扒び、本陣・本官に着す。「衛府の陣、吉上、見参を進る。別に禄を給はる。或は官人已下、饗禄を給はる。」

兼国の人、除目（×内）の外、必ずしも慶賀を申さず。所々の別に補する者、陣外は申さざる所なり。

公卿、吉日を取り、宜陽殿及び陣座に着す。「東西面。公卿の初参は、或は敷政門より入ると云々。未だ為さざれば、可とするは、（前田家大永鈔本「尋可」、神道大系本「尋常」）尚、和徳門より入るべし。大

将、本陣に着するは、本座に着せず。公卿、初めて日上と為て、神事を行なふの時、召使・官掌等、饗禄を給はる。弁官・官掌（々）掌・弁侍、禄を給はる。」

凡そ官を給はる輩、親無ければ、吉日を取り、墓を拝する事なり。〈三拝〉

頭藏人に補する者、初めて参内するは、官を給はる人の如し。但し、傍の職事、簡に付するの後に退出す。昇殿の職事は、三日を過ぐと雖も、参内し、拝礼有り。

天曆二三、除目有り。大納言源朝臣（清蔭、穢に依り、陣外に参り、慶賀を奏せしむ。

「公卿、三日の中、着座の日を扒ぶと云々。」（頭書）

『西宮記』卷十一（甲）・臨時戊・公卿着座事

一、公卿の着座の事

「上達部・弁官・史・式部省の省官（々）官、此の事有り。着座すべき諸司、着座せざるの時、生年を注進せしめ、陰陽寮に仰下し、吉日を勘定め、着座すべき由を催仰すと云々。

【弁、着座するの時、官掌には白絹、各一疋饗す。弁候には赤絹、各一疋饗す。時申す使部二人には信濃布（信乃布）、各二段饗す。使部等の中、屯食二具、信濃布（信乃布）百段、若しくは銭十貫。外記の使部は、此の例に預らずと云々。但し、件の饗禄等、宣旨に依り着座するの時は給はずと云々。又、三ヶ日の慎を致さずと云々。】

陰陽家の勘文に依り、着座の後の三日の中、不楽、不憂、不登高、不臨深、不行刑、不見孝、不入及廁、慎むべし。

旧例は、朝堂に着す。

召使・官掌、饗禄あり。「召使・官掌には各正絹饗す。官・外記の使部等の中、信濃布（信乃布）百段、屯食三具。【官の使部は、屯食二具、布六十七段（一）。外記の使部は、屯食一具、布卅三段、内々に別くる所也。】時申す使部二人には、各信濃布（信乃布）二段饗す。」

吉日、得難ければ、前人の証に依りて定むべし。
或は廃（＝廃務日）・休（＝休日）・衰日に着す。

延喜二年二月十八日。四月十八日。着座す。「此の日に着する人、尋入るべし。」

寛平五年三月六日、己巳。寅三刻、参議源湛着座す。

承和七年八月八日、壬子。戌三刻、右大臣源常着座す。「七日、辛亥、任ずる也。此の日、国忌に依り、尋常の政（＝外記政）を申さずと云々。」

同九年八月八日、己巳。辰刻、大納言忠仁公（＝藤原良房）着す。

貞観十二年二月四日、丙戌。辰四刻、中納言在原行平着す。
〔此の日、祈年祭也。〕

寛平三年三月廿九日。参議時平（＝藤原）着す。〔重服。〕

承平元年九月十六日、庚子。中納言兼輔（＝藤原）、左仗（＝陣座）に参る。復任（＝優任）の後、未だ着座せず。仍りて政無し。今、此の文を案ずるに、復任の後、日を扨び、庁（＝外記庁）の座に着すべき歟と云々。

延喜十一年二月二日、丁巳。丑二刻、四人着す。〔権中納言道明（＝藤原）・参議源〇〇当时（＝源）・大納言貞信公（＝藤原忠

平）・中納言長谷雄（＝紀）等、皆、同日丑二刻に着すと云々。
此の時、天網なり。遁甲家、重制する所と云々。〕

延長二年四月十日。左大臣「貞信公」着す。八月十四日。太政大臣「右大臣定方（＝藤原）也。」着す。〔誰人哉、之を勘ふべし。〕

〔裏書〕

右大臣藤原（一）氏宗、貞観十二年（一）正月（一）十三日、丙寅。

右大臣に任ず。同廿三日、丙子。申時、着座す。〔中納言藤原（一）忠平、延喜（延永）九年（一）五月（一）廿二日（一）、丙戌。寅時に着座す。〕

承平五年（一）五月（一）十六日（一）、己酉。酉時（々時）、中納言伊望（＝平）着座す。

承平三年（一）六月（一）四日、己酉。申時、参議藤原実頼着座す。
〔五月節。〕

天曆二年（一）五月（一）廿日、戊辰。巳時、権中納言藤原（一）師尹着座す。

昌泰元年九月（一）十二日（一）、己卯。午時、中納言藤原経着座す。〔八月節。〕

権中納言平惟仲、衰日に着座すと云々。

延喜二年（一）四月（一）十八日（一）、甲午。申時、大納言藤原（一）定国着座す。

同年二月（一）十七日（一）、甲午。戌時、参議紀長谷雄着す。
同月十八日、乙未。辰時、参議平惟範、外記庁に着座す。

天慶七年（一）十一月（一）五日、甲戌。子刻、参議在衡（＝藤原）、〔右大弁。〕庶明（＝源）、同時に着座す。

「反関を加へ、門を出づるの間、辻々に、人々を立て、往還の雑人・犬馬等を掃はしむ。又、陰陽師の祿、人に随ひ、之を儲くべし。(頭書)」

「或本に云はく『延喜十一年(一)二月(一)二日(一)、同時に四人着す。』(傍書)」

(注1) 源常の任右大臣は「公卿補任」は七日とし、「続日本後紀」には八日の詔が見える。承和七年(八四〇)八月は七日庚戌、八日辛亥、九日壬子。

(注2) 在原行平の任中納言は元慶六年正月十日であるため、ここは極官表記。

(注3) 藤原時平の父基経が寛平三年(八九一)正月十三日に薨去した。

(注4) 平惟仲は正暦三年八月廿八日に任参議、長徳二年七月廿日に任権中納言、同四年正月十五日に任中納言。天慶七年(九四四)出生で、(正暦四年二月廿八日丙戌、参議初参着座、五〇歳、衰日は子・午)、(長徳二年八月十二日庚戌、権中納言初参着座、五三歳、衰日は丑・未)、(長徳四年二月十八日丁未、中納言初参着座、五五歳、衰日は辰・戌)の着座記事は衰日には当たらない。

(注5) 藤原在衡の任参議は天慶四年(九四二)十二月廿五日で、当時は右大弁。同五年三月廿九日に左大弁に転任。

【C】『参議要抄』下・臨時・初任事

一、初任の事

慶賀を申す事

蔵人頭は、除目の入眼に先じ、朝恩有るべき由を奉はる。仍りて表衣を執柄(=撰関)に申す。又、有文帯を借る。(已上、宿所に置く。)又、檳榔毛を執柄に申す。

若し然るべき公卿の入眼の日ならば、除目、未だ畢らざる前に陣(=陣座)を立つ。除目の清書了りて後、宿所に於いて装束を改む。(冬の時、必ず打衣を用ふ。)明義門の廊の板橋の東に於いて、慶賀を申す。(蔵人、猶、脂燭を指す。)拜舞了りて退出す。

又、禁中に御す後宮並びに春宮等に申し、其の宿所に退出す。新しき畳等を留め、後の頭に附属す。

近代、未だ清書を奏せざる前に退出し、後日、里亭より、之を申す。門を出でて三町の程、辻毎に人を置き、法師・女・犬等を制す。

参内の儀、和徳門より入る。(往年、地下の公卿、陣座の後の立部の外に於いて申すと云々。)近代は、宣仁門を経て、軒廊の階下にて、之を申す。所々に申すこと、上に准ず。

其の前駆は六人以下。而るに『佐理参議抄』(=藤原佐理)に云はく「前駆は二人也。多き時も、四人を過ぐべからず。」と云々。是、延光納言(=源)、小野宮大臣(=藤原実頼カ、藤原実資カ)に教ふる所也。

着陣の事

先づ史に仰せ、宜陽殿の座を敷かしむ。

参議以上、皆、敷政門より入り、宣仁門を経て、宜陽殿の北第一間の北辺より昇り、(履を壇上に脱ぐ。)東座に着す。(西面上古、西座に着す。而るに大入道(=藤原兼家)の御説に依る也。壁に向かはざるの意敷。)座を煖めず(三息と云々。)して起つ。左仗座(=陣座)に着すること、例の如し。但し、近代、参議と雖も、窃に大納言の座に着す。(南面。)又、座を煖めずして起ち、敷政門より退出す。

今日、他所に向かはず。是、人の下に付くべからざるの故と云々。

着座の事(着座の日時並びに雑の禁忌を勘へしむ。近代、猶、多く二月丙午を用ふ。貞信公(=藤原忠平)の例(=延喜八年)也。或は十月

庚子を用ふ。」

装束司の史に仰せ、兀子を造らしむ。「申請を承はるの物等有らば、本家の家司(々家)を遣はし、検注せしむ。」宿所を八省(「朝堂院」の東廊に儲く。「官(「太政官庁」の西門(×面門)に当たる。廊の柱に付し、簾を懸け、其の内に、座を儲く。東の砌に幔を樹つ。又、内裏の近辺の人家を借り、出立所と為す。

剋限に参内す。装束並びに前驅・路頭の作法、上に准ず。「但し、靴を具す。」待賢門より入る。下車の時、陽明門に立てしむべきの由、之を示す。八省の廊の宿所に着す。

慥に剋限を問ふ。「陰陽寮の鐘に因る。」次いで官の西門より入る。若し入夜する時は、前驅、火を取りて前行す。両幔の中を経て、官の正庁の後に到り、西階より昇る。壇上に於いて、靴を着し、「今案するに、屏の後に於いて着すべき歟。」西戸より入りて着座す。又、座を煖めず退出す。

次いで外記(「外記庁」)に向かふ。「両説有り。或は靴を着し乍ら向かふ。或は浅履に改め、外記の小屋に於いて、靴を着す。」次いで外記庁の北面の西戸より入りて着座す。又、座を煖めずして起つ。小屋に於いて、履に改め、陽明門より出づ。

此の間、上臈、同日に着座するの時、途中に相逢ふも、相揖せずと云々。各、知らざるを為て、過ごして宿所に還る。官掌以下に、饗禄を給ふこと、常の如し。

三箇日間、毎日、美饌を儲け、来客に与へ、之を勧む。第四日に及び、烏帽子・直衣を着し、檳榔に乗り、家に還る。

『行成抄』に云はく「参議、誤りて中戸に入ると雖も、改むべからず。旧誠(×誠)有り。着座の間、異相有るを以て、吉と為

す。死人の頭を踏む、或は車を其の上に遣はすこと、第一の吉相と為す。只、犬、前を渡るを以て、凶相と為す。」

小野宮大臣の着座の時、孝子有り、重服を着し、宿所に入る。吉例也。

隆国卿(「源」着座の時、兀子の上に、死せる児子の手有り。驚きて小野宮大臣に問ふ。返事に云はく「件の手を取棄て、數物を改むべし。人に語るべからず。此、又、吉相也。」と云々。

経信卿(「源」着座の時、参議の度、車の棟無し。納言の度、宿所に於いて枕を失ふ。並びに吉相と云々。無上心歟。

通俊卿(「藤原」着座の時、宿所に於いて、郭公の和歌を詠む。哭くを歌はざるの儀に違ふ。

泰憲卿(「藤原」着座の時、犬、其の前を渡る。沈淪の相と為す。凡そ、着座せむと欲する人、外記(「外記庁」)の図を先達に請ふ。

三日を過ぐすの後、早く政に着す。未だ政に着せざるの前、参内せず。

『長房卿抄』(「藤原長房」)に云はく「行く時、『秋東』を呼び、左手に、『天』の字を書(×奉)く。」

(注1) 源経信は治暦三年(一〇六七)二月六日に任参議、承保二年(一〇七五)六月十三日に任権中納言、永保三年(一〇八三)正月廿六日に任権大納言、寛治五年(一九一)正月廿八日に任大納言。

(注2) 藤原通俊は応徳元年(一〇八四)六月廿三日に任参議、嘉保元年(一〇九四)六月十三日に任権中納言。

(注3) 藤原泰憲は治暦元年(一〇六五)十二月八日に任参議、延久四年(一〇七二)二月二日に任権中納言。

(注4) 藤原長房は永保三年(一〇八三)正月廿六日任参議、『公卿補任』応徳三年(一〇八六)条に「四月十五日、壬寅、子二点着座、」と見える。